

有岡城跡発掘調査報告書 X

—第11次～第16次・第18次～第22次調査の概要—

2003

伊丹市教育委員会
六甲山麓遺跡調査会

有岡城跡発掘調査報告書 X

—第11次～第16次・第18次～第22次調査の概要—

2003

伊丹市教育委員会
六甲山麓遺跡調査会

序

猪名川から西を眺めると歴史を秘めた伊丹段丘の縁が続いています。この段丘上には、法隆寺式の伽藍を有する白鳳時代の伊丹廃寺跡、奈良時代の名僧行基が創建した昆陽寺、和泉式部ゆかりの五輪塔などがあり、多くの歴史遺産がこの段丘の豊かさをあらわしています。

鎌倉時代からは、この地域に根を下ろした国人領主伊丹氏が段丘東縁の地に居を構え、次第に勢力を強めると南北朝頃には伊丹城を築くようになります。応仁の乱の後、伊丹城は細川家の内紛に巻き込まれ、度々戦乱の表舞台に登場いたしますが、「伊丹城ばかり堅固なり」と言わしめた堅城でありました。天正2年に、池田城主荒木村重により伊丹氏は城を追われますが、村重は従来の伊丹城に大掛かりな改造を加え、町そのものを堀と土塁で閉鎖した惣構えの有岡城を築城しました。天正4年にここを訪れた宣教師フロイスが、「甚だ壮大にして見事なる城」と賛辞を述べていることでもわかります。

有岡城は、昭和50年度から主郭地区の発掘調査が行われ、当時の礎石建物や土塁、石垣、堀などの遺構が発見されました。発掘されたこれらの遺構は、城郭史に足跡を残す有岡城を評価するに十分なものでした。昭和54年に国史跡に指定され、名実ともに天下の名城として顕彰されています。

この報告書は、有岡城の発掘調査成果をまとめたものであります。こうした地道な発掘調査の積み重ねが有岡城史の解明につながるものと考えております。発掘調査と整理作業を担当された六甲山麓遺跡調査会の橋本久代表をはじめ、作業を中心的に進められた浅岡俊夫氏には、調査後年月を経ての整理作業に着手していただき、このような見事な報告書にまとめられたことに対し深甚なる敬意を表するものであります。

最後に、報告書所収の調査成果が研究者のみならず市民のみなさまに活用されることを祈念して序といたします。

平成15年3月

伊丹市教育委員会
教育長 脇本 芳夫

	3. 小 結	45
VII	第13次調査	46
	1. 調査方法	46
	2. 調査概要	48
VIII	第14次調査	50
	1. 調査方法	50
	2. 調査概要	50
	(1)土 層	50
	(2)主な検出遺構	50
	(3)主な出土遺物	55
	3. 小 結	61
IX	第15次調査	62
	1. 調査方法	62
	2. 調査概要	63
	(1)土 層	63
	(2)主な検出遺構	63
	(3)主な出土遺物	68
	3. 小 結	71
X	第16次調査	72
	1. 調査目的	72
	2. 調査概要	72
	(1)石垣遺構	72
	(2)出土遺物	77
	3. 小 結	78
XI	第18次調査	80
	1. 調査に至る経緯と調査方法	80
	2. 調査概要	80
	(1)土 層	80
	(2)遺構と主な遺物	83
	3. 小 結	84
XII	第19次調査	85
	1. 調査に至る経緯と調査方法	85

	2. 調査概要	87
XIII	第20次調査	88
	1. 調査方法	88
	2. 調査概要	90
	(1)土層	90
	(2)主な検出遺構	93
	イ 下層遺構	93
	ロ 上層遺構	101
	(3)主な出土遺物	119
	イ 上臈塚古墳関連の遺物	119
	ロ 中・近世の遺物	125
	3. 竈出土木炭・土の液体シンチレーション ¹⁴ C年代測定	131
	4. 小 結	131
	(1)上臈塚古墳	131
	(2)有岡城跡の遺構	132
	(3)酒造用関連遺構	132
XIV	第21次調査	134
	1. 調査方法	134
	2. 調査概要	134
	(1)第1トレンチ	136
	(2)第2トレンチ	136
	(3)第3トレンチ	139
	(4)第4トレンチ	141
	(5)ボーリング調査	141
	3. 小 結	141
XV	第22次調査	143
	1. 調査の経緯と調査方法	143
	2. 調査概要	144
	3. 小 結	145
	跋	146
	報告書抄録	148

挿 図 目 次

図 1	有岡城跡の位置（「伊丹」1/25,000）	3
図 2	明治18年の伊丹（複製陸測図1/20,000）	4
図 3	伊丹台地の地形（『伊丹市史第1巻』所収「伊丹の地形」に加筆）	5
図 4	越水城推定範囲（明治18年複製陸測図1/20,000）	10
図 5	有岡城惣構え概念図（1/10,000）	14
図 6	有岡城跡の範囲と発掘調査地点（数字は調査回数。1/10,000）	20
図 7	発掘調査地区図（数字は調査回数。伊丹市白図1/2,500を1/5,000に調整）	21
図 8	第11次調査トレンチ配置図	23
図 9	発掘遺構展開図	25・26
図 10	各トレンチの遺構平面図と土層断面図(1)	27
図 11	各トレンチの遺構平面図と土層断面図(2)	28
図 12	各トレンチの遺構平面図と土層断面図(3)	29
図 13	各トレンチの遺構平面図と土層断面図(4)	30
図 14	縄文時代の土坑平面・断面図	31
図 15	埋桶土坑および瓦柱土坑平面・断面図	32
図 16	縄文土器・須恵器実測図	33
図 17	石鏃実測図	34
図 18	中・近世遺物実測図	35
図 19	立会に伴う遺構確認地点	38
図 20	確認遺構図	39
図 21	出土染付磁器	39
図 22	第12次調査トレンチ配置図	41
図 23	第1トレンチ遺構平面図と土層断面図	42
図 24	第2トレンチ遺構平面図と土層断面図	43
図 25	出土遺物実測図	44
図 26	第13次調査トレンチ配置およびボーリング地点図	46
図 27	内堀跡検出平面図と土層断面図	47
図 28	ボーリング調査柱状図	49
図 29	第14次調査トレンチ配置図	51
図 30	各トレンチ土層断面図	52
図 31	検出遺構平面図と主な遺構断面図	53
図 32	伏せ発遺構実測図	55

図33	SE-1 (58~77)、SE-2 (78・79) 出土遺物実測図	57
図34	SE-1 出土遺物実測図	58
図35	SE-1 (106~123)、SK-1・2・6 (124~135)、SD-1 (136・137) 出土遺物実測図	59
図36	包含層出土遺物実測図	60
図37	第15次調査トレンチ配置図	62
図38	各トレンチ土層断面図	64
図39	検出遺構展開図	65
図40	主な土坑実測図	68
図41	出土遺物実測図(1)	69
図42	出土遺物実測図(2)〔銭貨は1/2〕	71
図43	第16次調査地点図(『伊丹城跡発掘調査報告書II』より)	73
図44	有岡城跡主郭北西隅石垣(東面)写真測量図	74
図45	有岡城跡主郭北西隅石垣(南面)写真測量図	75
図46	有岡城跡主郭北西隅石垣(接合部)写真測量図	76
図47	有岡城跡主郭北西隅石垣(東面前石列)写真測量図	77
図48	出土遺物実測図(銭貨は1/2)	78
図49	第18次調査トレンチ配置図	81
図50	トレンチ土層断面図	82
図51	出土遺物実測図	83
図52	第19次調査地の基礎掘り方平面図	85
図53	基礎掘り方の土層断面図	86
図54	第20次調査トレンチ配置図	89
図55	第1トレンチ西壁土層断面図	91
図56	第3・4トレンチ遺構平面図と土層断面図	92
図57	下層遺構展開図	94
図58	上層遺構展開図	95
図59	古墳基底部検出平面図	96
図60	SX-1平面図	96
図61	上縄塚古墳復元図	97
図62	堀跡平面図と土層断面図	98
図63	SD-6平面・断面図	98
図64	第1トレンチ上層遺構平面図(1)	99
図65	第1トレンチ上層遺構平面図(2)	100
図66	第1トレンチ上層遺構平面図(3)	101
図67	第2トレンチ上層遺構平面図	102

図68	窯跡平面・断面図	103
図69	SF-1・2・3検出状況平面図	104
図70	SF-1・2・3平面・断面図	106
図71	SF-4・5平面・断面図	107
図72	SF-6・7・8平面・断面図	108
図73	埋桶や木枠をもつ土坑平面・断面図	109
図74	上賜塚古墳埴輪実測図(1)	120
図75	上賜塚古墳埴輪実測図(2)	121
図76	上賜塚古墳埴輪実測図(3)・ガラス小玉実測図	122
図77	上賜塚古墳関係の板状石材実測図	126
図78	中・近世遺物実測図	127
図79	SK-132出土瓦実測図	130
図80	第21次調査トレンチ配置およびボーリング地点図	135
図81	第1トレンチ検出遺構平面図と土層断面図	137
図82	第2・3・4トレンチ検出遺構平面図と土層断面図	138
図83	ボーリング調査結果概略図	139
図84	ボーリング調査柱状図	140
図85	調査結果に基づく内堀の西側範囲推定図	142
図86	第22次調査範囲図	143
図87	検出遺構平面・断面図と土層断面図	144

表 目 次

表1	有岡城跡所在寺院(『伊丹市史』第2巻を参考に作成)	11
表2	第14次調査検出の井戸・溝・土坑・ビット遺構一覧	54
表3	第15次調査検出の溝・土坑・ビット遺構一覧	66
表4	第20次調査検出の井戸・溝・土坑・ビット遺構一覧	110

図 版 目 次

- 図版 1 (上) 第11次調査 発掘調査前 (調査地北側を望む)
(下) 第11次調査 発掘調査前 (調査地南側を望む)
- 図版 2 (上) 第11次調査 第 6 (N) トレンチ拡張区遺構発掘状況 (東より)
(下) 第11次調査 第 6 (N) トレンチ拡張区縄文土坑SK-6 (上)・27 (下)
- 図版 3 (上) 第11次調査 第 8 トレンチSD- 8
(下) 第11次調査 第 1 トレンチ埋桶土坑
- 図版 4 (上) 国鉄伊丹駅前整備事業主郭石積み工事立会 切り土の状況
(下) 国鉄伊丹駅前整備事業主郭石積み工事立会 遺構確認状況
- 図版 5 (上) 国鉄伊丹駅前整備事業主郭石積み工事立会 確認遺構のグリ石除去の状況
(下) 第12次調査 第 1 トレンチ遺構発掘状況
- 図版 6 (上) 第12次調査 埋甕発掘状況
(下) 第12次調査 埋甕の底に見える銭貨の痕跡
- 図版 7 (上) 第13次調査 発掘状況
(下) 第13次調査 第 2 トレンチ検出の内堀の法面
- 図版 8 (上) 第13次調査 第 1 トレンチ検出の内堀の法面
(下) 第13次調査 第 1 トレンチ内堀の東壁断面
- 図版 9 (上) 第14次調査 発掘調査全景
(下) 第14次調査 伏せ甕遺構検出状況
- 図版10 (上) 第15次調査 発掘調査全景
(下) 第15次調査 第 2 (N) トレンチ発掘のSD- 1
- 図版11 (上) 第16次調査 石垣全景
(下) 第16次調査 東面石垣
- 図版12 (上) 第16次調査 南面石垣
(下) 第16次調査 石垣前の地山検出状況 (北より)
- 図版13 (上) 第16次調査 南面石垣と東面石垣の接合部
(下) 第16次調査 南面石垣と東面石垣の接合部俯瞰撮影
- 図版14 (上) 第16次調査 石造品の石垣転用状況(1)
(下) 第16次調査 石造品の石垣転用状況(2)
- 図版15 (上) 第20次調査 発掘調査地全景 (北より)
(下) 第20次調査 発掘調査前 (南より)
- 図版16 (上) 第20次調査 上層遺構面遺構発掘状況
(下) 第20次調査 第 1 トレンチ下層遺構面 (地山面) 遺構発掘状況 (古墳基底部分)

- 図版17 (上) 第20次調査 第2トレンチ堀跡発掘状況
 (下) 第20次調査 第1トレンチSD-6発掘状況
- 図版18 (上) 第20次調査 窯跡の焚口部(北より)
 (下) 第20次調査 窯跡の焚口部側面(東より)
- 図版19 (上) 第20次調査 SF-1・2・3全景(南より)
 (下) 第20次調査 SF-1・2・3側面全景(西より)
- 図版20 (上) 第20次調査 SF-1石積み遺構
 (下) 第20次調査 SF-1石積み遺構の墨書石
- 図版21 (上) 第20次調査 SF-4全景(東より)
 (下) 第20次調査 SF-6・7全景(南より)
- 図版22 (上) 第20次調査 SF-6全景(東より)
 (下) 第20次調査 SF-7の火床(西より)
- 図版23 (上) 第21次調査 発掘調査前(北より)
 (下) 第21次調査 第1トレンチ発掘状況(西より)
- 図版24 (上) 第21次調査 第1トレンチ内堀発掘状況(北より)
 (下) 第21次調査 第1トレンチ堀1発掘状況(西より)
- 図版25 (上) 第21次調査 第2トレンチ内堀発掘状況(南より)
 (下) 第21次調査 第2トレンチ堀2発掘状況(南より)
- 図版26 (上) 第21次調査 第3トレンチ全景(西より)
 (下) 第21次調査 第4トレンチ内堀検出状況(西より)
- 図版27 第11・16・20次調査出土遺物
- 図版28 第20次調査出土の埴輪
- 図版29 (上) 第11次調査出土の縄文土器
 (下) 第20次調査出土の埴輪
- 図版30 (上) 第20次調査出土の土師器皿
 (中左) 第20次調査出土の基石
 (中右) 第16次調査出土のキセル
 (下) 第16・20次調査出土の銭貨

I はじめに

天正元年(1573)、荒木村重は信長から摂津一国の一職支配を任せられ、伊丹に入城、城名を有岡城と改め、壮麗な城造りを行った。その城造りは、初期の惣構えの城として脚光を浴び、その形態を今によく留めるものとして、1979年12月28日付官報に告示され、国史跡に指定されたのである。

国史跡指定に先立って、1949年、伊丹市は福知山線複線化を促進するため、国鉄伊丹駅周辺整備事業を計画した。そして、1950年度から駅前に残る城跡の発掘調査を実施し、次々と明らかになる遺構・遺物の重要性に鑑み、有岡城跡としての国史跡への方向性が画策された。しかし、有岡城跡は南北約1.5km、東西0.8kmにおよぶ広大な面積を有し、しかもその範囲は江戸時代から綿々と育まれてきた伊丹郷町の町家が、今も伊丹市の母胎として活気を呈しているのである。町全体を取り込んだ面的な文化財の史跡指定はとうてい無理な話であった。

面的な指定が無理なら、そのほかに有岡城として重要な要素は何があるか。その一つに惣構えの輪郭が、廃城後、伊丹郷町として発展する中で取り壊されることなく大変良好な状態で護り残されてきたことがあげられる。今後、伊丹は伊丹郷町の範囲を超えてどんどん発展するであろう。是非とも、この惣構えの輪郭だけでも残し、後世に顕彰したいものだ。そこで、惣構えの輪郭をなす道路敷と水路、そして主郭部の遺存部分を史跡に指定し、保護されることになったのである。ところが、その後の史跡整備のあり方や伊丹郷町内の開発は、本来あるべき史跡保護の姿勢とはまったくかけ離れた、目をむくものがあり遺憾である。

本報告書に掲載する調査は、調査後20年近くを経過するものである。当時の調査を振り返ると、国指定史跡になったとはいえ、開発優先の市民感情が強く、なかなか伊丹郷町内の発掘調査に理解が得られず、せめてトレンチ調査の確認調査だけでもとすがりつく調査ばかりであった。中には、基礎工事で掘るところを見とったらよいだろう、と図面一つとれなかったところもあった。市の行政内部も、文化財保護に理解を示す担当者は少なく冷ややかなものであった。そのような中で、どれだけ学術的に納得のいく調査成果が得られたか、はなはだ心許ない。また十分な整理もできないまま、ここに曲がりなりとも調査成果の一端を公表できることを素直に喜びたい。報告書刊行にむけて、予算配分などにご尽力いただいた担当部局の方々に感謝するしだいである。

本報告書をまとめるにあたっては、発掘調査当時からたくさんの方々からご協力、ご指導、ご教示等をいただいた。特に、下記の方々からは学術面でのご指導、ご教示をいただき、記して感謝の気持ちを表したい。

伊井孝雄 泉拓良 奥田哲通 小長谷正治 黒田慶一 高井悌三郎 高橋克壽 都山比呂志
角田誠 難波洋三 廣瀬党 藤井直正 前川要 宮川禎一 宮本博 村川行弘 山崎貞治
山田治 和島恭仁雄 (五十音順、敬称略)

II 有岡城跡の概要

1. 地理的環境

有岡城跡は兵庫県伊丹市に所在する(図1)。伊丹市は、兵庫県東南部に位置し、江戸時代には川辺郡の中心として栄えた。現在はおおむね6.5km四方の範囲に市域をもつが、その母胎は有岡廃城後の江戸時代に、城域の範囲をそのままに伊丹郷町として発展させたことにある。その形態は明治期にもそのまま引き継がれている(図2)。地勢的には北摂山地から大阪湾に向かって舌状にのびる伊丹台地が市域の大部分を占め、台地の東側に形成された猪名川の沖積地とかなる。

伊丹台地は図3のように、西側が武庫川、東側が猪名川によって画され、北から南へ山本面、安倉面、中野面の段階的発達が見られる。さらに、台地の東側はよく発達した加茂面が南北に帯状にのび、台地東縁部は大きな段丘崖を形成している。その段丘崖は南北長6km以上にわたっており、高いところで20m、低いところで5mの比高差をはかる。この段丘崖の段差は、摂津加茂遺跡の立地にいち早く取り入れられており、台地上の環濠集落として弥生時代にすでに天然の要害としての利用方法が看取される。

有岡城跡もまた、その前身の伊丹城時代から京と西国を結ぶ交通の要衝を睨んで、伊丹台地の地形的特徴を活用して築かれている。後で詳しく触れるが、有岡城は惣構えの形態が完成された城で、伊丹城とは形態を異にする。伊丹城が立地したところは、後に惣構えを形成するのに有利であったことは否めない事実である。すなわち有岡城跡は加茂面の最南端、標高20m～15mに立地し、その東側は比高差10m～5mの絶壁下には猪名川の低湿地や深田がひろがり、北側は伊丹断層で、西側は加茂面と中野面の2mを越す段丘崖でもって区切られ、まさに自然の要害が十分に発揮されているのである。面積の上でも南北1.7km、東西0.8kmの広さがあることも条件の一つに適している。そして、有岡城跡の主郭部(伊丹城跡)に立てば、猪名川の沖積平野全体、北の池田城から対岸の豊中台地はもとより、大阪方面まで一望でき、まさしく西摂の要となる地の利を得ている。難攻不落を誇り、ポルトガルの宣教師ルイス・フロイスが「甚だ壮大にして見事なる城」(ルイス・フロイス書簡『耶穌会士日本通信異国叢』)と絶賛したこともうなづけよう。

2. 歴史的変遷

(1) 伊多美武者所の設置

有岡城の前身となる伊丹城がいつ、誰によって築かれたのかは分かっていない。伊丹城の基になる機関が発展し、伊丹城になったのではないかと考えられる。その機関とは「伊多美武者所」といわれるものである。



図1 有岡城跡の位置 (「伊丹」1/25,000)

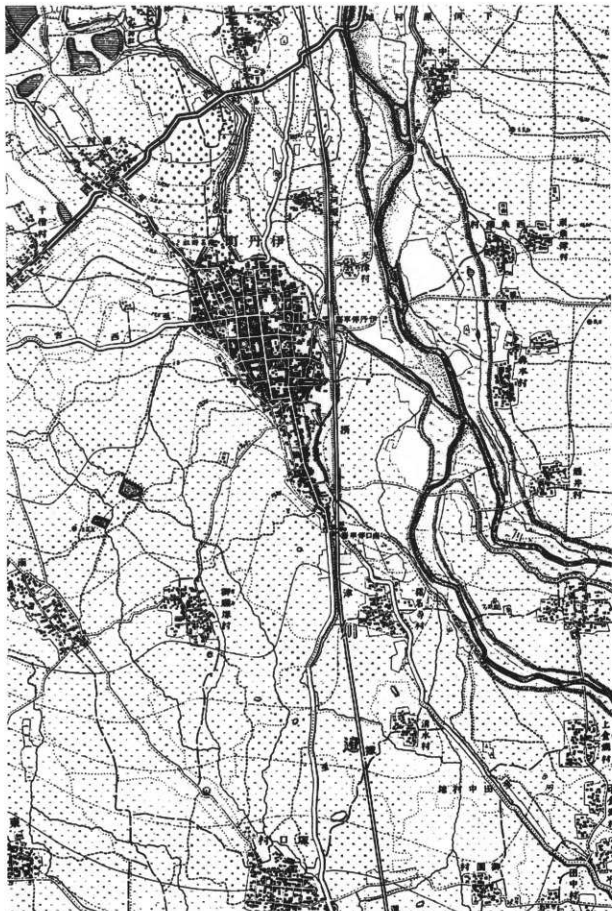


図2 明治18年の伊丹 (複製陸測図1/20,000)

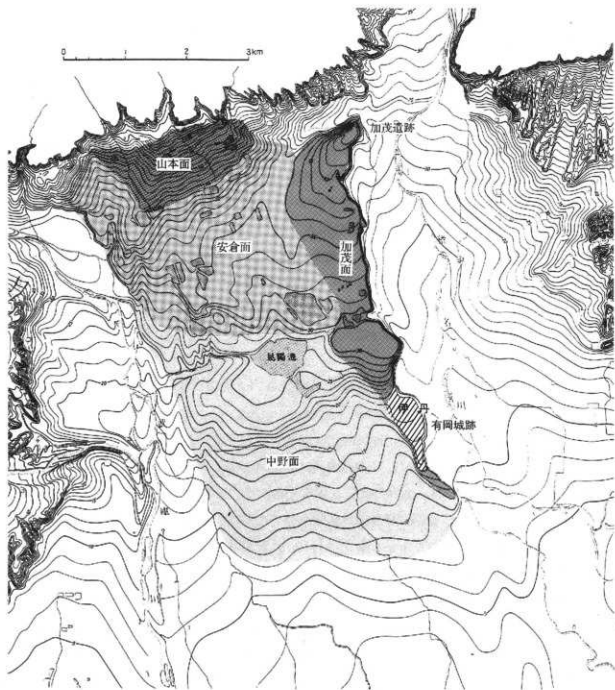


図3 伊丹台地の地形（『伊丹市史第1巻』所収「伊丹の地形」に加筆）

「伊多美武者所」は『山槐記』治承4（1180）年11月23日条に記されており、イタミと読める最古の史料である。その内容は、平安時代末期の治承・寿永の乱の時、摂津国豊島（現豊中市付近）の住人牧義貞の子が豊島の居宅を焼き払って兄のいる近江へ夜逃げしたのを、伊多美武者所の某が山科まで追跡したが、すでに近江へ逃げ去った後で失敗したというものである。

平安時代、猪名川流域には橋齒と呼ばれた摂関家の荘園が広く分布し、その範囲は現在の尼崎市立花・久々知あたりから伊丹市森本・北村・辻村を含む広範囲におよんでいた（黒田

1971)。これらの荘園は京の足下にあたり、摂関家の重要な経済基盤をなしていた。そのため、平安時代末期の政情不安定な時期、荘園を警固する武士の詰め所が設置されたと考えられる。それが「伊多美武者所」である。

この期間の設置場所は、京への街道筋にあって見晴らしのよいところが選ばれたのであろう。前述した有岡城跡主郭あたりが地理的に最適と考えられる。しかし、今のところ伊多美武者所に関連する遺構は発掘されていない。とは言え出土遺物には平安時代後期に遡るものがあり、その可能性を十分に窺うことができる（浅岡1987）。

平安時代末期、伊多美武者所の設置と時を同じくして伊丹氏の祖が出現している。伊丹氏の出自は「森本氏系図」（北河原森本文書所収森本文書）によると、「文治2（1186）年3月20日関東御下文拝領」と注記された加藤右馬允親俊を祖として、伊丹氏とその庶子家森本氏とに分かれたことになっている。そして、親俊から二代後の親元が「伊丹右馬入道」を名乗り、以後、「同左衛門尉」というように記され、「伊丹」姓が引き継がれていったようである。おそらく伊丹氏の祖である加藤右馬允親俊が伊多美武者所の責任者として着任し、その子孫が伊丹氏を名乗ったと考えられる。

伊丹氏に関する確実な初見史料は、延慶2（1309）年、『六波羅御下知状案 下司濫妨停止事』（東寺百合文書）に見える伊丹四郎左衛門入道妙智とされている。この史料は、芥川・土室の武士が垂水庄に濫入したことに對し、摂津守護を兼務する六波羅北方探題が妙智らを使者に立て、芥川・土室らに召喚状を送りつけ、その復命書に基づいて処置したというものである。その6年後の正和4（1315）年には、京都府離宮八幡宮文書に「伊丹親盛進注状」と「伊丹親盛請文」が残されている。これは、諸関津料免除の特権を持つ大山崎の油神人が兵庫関などの関所で濫妨にあい、荏胡麻を没収されたという訴えに對し、六波羅北方探題が親盛らに現地調査を命じた。これを受けて親盛らは兵庫関などを検分し、没収されていた荏胡麻を返却させるとともに、以後、油神人から関津料をとらないことを誓約させたというものである。

これらの史料に見える伊丹姓を名乗る人物のうち伊丹四郎左衛門入道妙智の名は、「森本氏系図」には見られないが、親盛の名は加藤右馬允親俊から数えて五代目に「同〇三郎親盛」とあり、同一人物と考えられている。このように、伊丹氏の祖は平安時代末期にまで遡り、鎌倉時代末期には六波羅北方探題の守護代の要職にあり、着実に勢力を伸ばしていったことが窺える。そして、伊丹城と呼ばれる城塞に造りあげていったものと推定される。

（2）初期の伊丹城

伊丹城が初見するのはそれから数十年後である。1333年、鎌倉幕府が倒れ、後醍醐天皇による建武新政が始まるが政権は安定せず、南北朝の内乱が各地で繰り広げられた。伊丹一族は足利尊氏方に属し、多くの軍功を立て華々しく活躍したことが「森本基康軍忠状」「伊丹野四郎頼員軍忠状」などから窺い知ることができる。それらの軍忠状のうち、文和2（1353）年6月の「森本基長軍忠状」に「右去年十一月三日馳参打出浜、其後楯籠神呪寺御陣、致夙夜警固、同廿

四日伊丹瓦合戦之時、致軍忠（中略）又当年正月十一日御敵押寄伊丹城之時、致散々令□□□□追い返し御敵畢」とある。伊丹城の初見である。「伊丹瓦」は伊丹河原のことで伊丹城下に広がる猪名川河川敷をいう。それは、文和元年11月、南朝方の楠木正儀、石塔頼房らが神崎・尼崎に押し寄せた際、摂津守護赤松光範を助けて基長が打出浜に馳せ参じたが苦戦し、南朝方が伊丹に押し寄せ伊丹河原で合戦し、その翌年には直接伊丹城が攻撃されたが、辛うじて守りきった、という内容である。このことは、南北朝期に規模・構造面において攻撃にも耐えうる戦闘機能を備えた伊丹城に改造されていたことを示しているといえよう。

では、当時の城とはどのようなものであったのであろうか。14世紀中頃、南北朝期に記された『峯相記』（続群書類従第28輯上）には「城ヲ構へ。故実屏ヲ塗り出シ。矢倉ヲカキ。ハシリヲツカヒ。飛礮ヲナゲ。勢樓。モチ楯。屏風楯。箱楯。竹ヲヒシキ皮ヲノベ。種々ノ支度ヲ廻ラシ。無俣ノ方便ヲ構。」とある。これは一遍上人絵伝（京都歎喜光寺藏）に描かれた武士の館とよく符合している。館の周囲は方形に濠がめぐらされ、その内側には板塀が打ち込まれ、入口には板橋が渡されている。有事の際、その板橋は取り外しができる構造になっている。入口には横棧戸をつけた櫓門が構えられ、盾や弓が備え付けられている。敷地内には母屋、従者の宿舍、厩など数棟が配置され、馬場の埒や鷹狩りの鷹も描かれてある。

近年の中世城館の発掘調査例を見ると、上記の絵伝と同様の方形平面をもつ居館跡や構居跡が数多く調査されている。それらは一辺が数十mから大きなもので100mを越えるものまであり、濠や柵跡、土塁跡、掘立柱建物などが発掘されている。中には連郭または複郭構造をとるものもあり、馬出や出柵、横矢掛などの遺構も検出されている。こうした発掘調査に基づき研究も活発におこなわれ、その発展過程も明らかになりつつある（中井1987）。

伊丹城・有岡城跡のこれまでの発掘調査では当時の確実な遺構は未だ明らかになっていないが、伊丹城もまた、おそらく『峯相記』や一遍上人絵伝に描かれたようなもので、各地の発掘調査例にある一辺が100m以内の規模・構造であったと考えるのが相当であろう。

(3) 伊丹城の攻防

観応3（1352）年、足利尊氏による足利直義殺害に端を発した観応擾乱では、10年間にわたって伊丹一族の活躍があった。しかし、康安2（1362）年8月の神崎合戦を最後に、その後1世紀半の間、伊丹氏がかかわった戦闘記録は見つかっていない。

再び伊丹氏が歴史に登場するのは、応仁の乱後の16世紀初めになってからのことである。永正5（1508）年、主従の関係にあった細川家内部の対立にかかわって、伊丹兵庫助元扶が細川高国に味方して細川澄元・三好之長を攻めたことに端を発する。その後、伊丹氏は各地に転戦し、伊丹城も、再三再四、戦国大名の攻撃的となり、たびたび落城の危機に陥りながらもよく持ちこたえた。それは戦国大名をして堅固な城といわせたほどであった。そこで伊丹城にかかわる攻防の記録を列挙してみると、

◇永正8（1511）年8月、澄元側の播磨守護赤松義村が伊丹城に押し寄せる。

- ◇永正17 (1520) 年2月、前年から摂津へ進攻してきた澄元勢が尼崎・伊丹・池田に総攻撃をかけ、高国勢を敗走させた。伊丹城に立て籠もる伊丹但馬守・野間豊前守の二人は四方の城戸を閉め、家々に火をかけ、天守で切腹し、落城する。伊丹、最初の落城である。澄元、伊丹に入城するが、高国の反撃に遭い、播磨へ引き返す。
- ◇大永7 (1527) 年2月、澄元の死後、その子晴元が遺志を継いで挙兵。摂津一带を手中に取め、伊丹城を包囲攻撃する。しかし、伊丹城の守備堅く、落城はならなかった。
- ◇大永7年9月、再度、晴元勢は三好元長を大将に柳本賢治らが伊丹城を攻撃した。1ヶ月余の攻撃にも城は落ちなかった。
- ◇享祿2 (1529) 年11月、柳本賢治が伊丹城を不意に攻撃する。3ヶ月にわたる攻防の末、善戦および、伊丹大和守元扶ら30名が自刃し、落城。晴元の被官高島甚九郎が入城した。
- ◇享祿3 (1530) 年6月、高国勢が播磨で柳本を討ち、反撃に転じ、伊丹城の高島甚九郎を攻める。翌年2月、和議が成立し、高島は伊丹城を明け渡し、池田へ退いた。
- ◇天文2 (1533) 年3月、このころ各地で猛威を振るっていた一向一揆がついに伊丹城にも押し寄せた。一揆衆は「らうかという物を一町あまりづつ二通りこしらへ、昼夜の境なく尼女迄集り堀をうめければ、」堅固な伊丹城も「難儀に及候処」(『細川商家記』)と、陥落寸前の状態となる。しかし、京からの救援軍が一揆衆を背後から襲い、伊丹城を救った。
- ◇天文18 (1549) 年正月、近畿一円を制圧した三好長慶が自ら伊丹を包囲攻撃した。これは、長慶と晴元・三好政長の対立激化にともない摂津、河内、和泉の勢力が長慶の側についたが、伊丹氏が長慶に呼応しなかったためである。伊丹城は非常に堅固な城故、長慶は森本や富垣、前田城、御願塚、小屋(昆陽)城に包囲陣を張り、伊丹の四方を固めた長期戦の構えをとった。戦闘は1年以上にわたり、翌年3月に伊丹親興と和睦が成るまで続いた。
- ◇永祿9 (1566) 年7月、將軍足利義輝の跡目を狙う足利義親(後の將軍足利義榮)は、篠原長房に摂津攻めを命じ、伊丹城も戦火にまみれた。その際、伊丹親興は長房に寝返って、義親に臣従する道を選んだ。
- ◇天正2 (1574) 年11月、織田信長は荒木村重に命じて池田氏とともに伊丹氏を討たせた。そのいきさつは次の通りである。永祿11年9月、信長は15代將軍足利義昭を奉じて入京し、山城、摂津一带を制圧した。摂津を制した信長は、芥川城の和田惟政、池田城の池田勝正とともに伊丹氏を摂津の三守護に任命し、伊丹氏に3万石を与えた。このときの伊丹城主は親興だったか、忠親だったか定かでない。『統応仁後記』などに親興の名が記されており、一般には親興と考えられているが、現在では忠親を有力視する向きがある。いずれにせよ、ここに伊丹氏は戦国大名の一員となったのである。しかし、元亀4年7月、信長は將軍義昭を追放し、室町幕府を倒すと、池田勝正の家臣として頭角を現した村重に池田、伊丹両氏を討たせたのである。村重は主君池田勝正を高野山に追放したのち、伊丹城に攻め寄せ、伊丹氏を滅亡させた。当時、信長は一向一揆鎮圧のため大阪石山本願寺とも戦っており、西方からの攻撃拠点として伊丹城を重視していた。そこで、村重を摂津の新守護に任命、

伊丹城に入城させ、38万石の知行を与えた。摂津の一戦支配を任されて伊丹城に入った村重は、直ちに城名を有岡城と改め、新しい城造りに取りかかった。

である。そのうち伊丹落城の記録は、永正17（1520）年2月、享祿2（1529）年11月、天正2（1574）年11月の3度しか見られない。よほど堅固な城であったことが知られよう。では、その堅固さは何に由来するのだろうか。

（4）外構えの形成

合戦の記録などの史料は戦闘の様子や落城の記事であって、城の構造や特徴を細かく記したものはほとんどない。伊丹城の場合も例外ではない。その中で、永正17年2月の落城の記録は興味深いものである。「細川両家記」（群書類従第20輯）は、最初の伊丹落城のことを記し、「然るに伊丹城の中に同但馬守・野間豊前守二人申けるは、当城此数十年の間、諸侍士民以下煩としてこしらえたるしるしなく、のがれける事口おしさよ、我等二人は此城の中にて腹切らんと四方に城戸をさし、家々へ火をかけ天守にて腹切ぬ」云々と落城の様子を生々しく伝えている。このわずかな記事の中に重要な問題点がいくつか含まれているのである。

一つは「当城此数十年の間、諸侍士民以下煩としてこしらえたる」と記された築城時期の問題である。これをそのまま信じれば、伊丹城は1520年から数十年前に築城されたことになり、いくら遡らせても15世紀中頃以前にはならない。先に見た伊丹城の初見時期との差が100年以上も開くことになり、この矛盾をどのように捉えればよいのだろうか。

1520年といえは応仁の乱から半世紀を経た戦国動乱の最中になる。幕府内部の対立は政権争いに拍車をかけ、有力大名は虎視眈々と京に上る機会をうかがい、下克上がまかり通っていた。各地では国一揆、土一揆、一向一揆、徳政一揆が猛威を振るい、政情は安定せず、一般民衆にまで不安が高まっていた時代である。こういう時代にあって、戦争の規模や形態すなわち戦略、戦術面に大きな変化が現れてきたことはいまでもあるまい。膨大な兵力の動員、武器の発達、物資の輸送などは城構えの面にも大きく影響したであろう。特に、1543年に鉄砲が伝来したことはそれに拍車がかかり、戦略、戦術面はもとより築城面など戦争の形態を一変させた。城の縄張りも拡大の一途をたどり、城内の地割りも複雑になり、それらの機能や役割が分化され、「本城」と「外城」といった区分が成立してくる。本城とは城の中心部を指し、外城とは本城を取り巻く外構えの空間である。16世紀の合戦記や史料には外城や外構え、またはそれに類する表現が多く目につく。この時期、城の区画に対して本丸や二の丸、三の丸といった用語はできておらず、そうした用語ができるのはもっと後のことである。そこで、城の中心部である本城のことを主郭、外城・外構えのことを外郭と呼ぶことにする。では、こうした築城区画はいつ頃成立したのであろうか。

16世紀初期に造られた城に西宮市所在の越水城がある。越水城は、永正9（1512）年～永正16（1519）の間、瓦林正頼によって小清水山と呼ばれる丘陵先端に築かれた。存続期間は信長により落され、廃城となった水禄11（1568）年までの50年間である。城跡は、1950年代までは

その名残をとどめていたようであるが、その後、住宅開発により面影は失われてしまった。『瓦林正頼記』（続群書類従第20輯上）には「小清水の頂本城に軒を雙て作り広げて正頼常の居所とす、外城には子息六郎四郎春綱」と本城と外城の関係が記されている。が、今までは、丘陵上の本城のみが城として取り扱われ、外城については何ら顧みられることがなかった。しかし、兵庫県教育委員会による『兵庫県の中世城館と荘園遺跡』（1982年刊）の調査の際、外城に着目し、現在も残る「城ヶ堀町」の地名を手懸かりに地表面に堀跡や土塁などの徴表観察を試みた。が、時すでに遅く、アスファルトとコンクリートで固められた市街化の波はそれを完全に拒否したのである。そこで、市街化が進む以前の明治・大正期の陸測図を検討したところ、果たして丘陵下の低地に、越水村の東端から南に向かって鉤形に折れ曲がる堀状の区画が認められた。その距離は延長450mにわたっており、張り出し曲輪や横矢掛らしい折れも見られる。堀の東南角にあたるころには「城ヶ堀町」の地名が残っており、中村から伸びてくる道が取り付いている。永正17年正月、伊丹兵庫助元扶の伊丹勢が越水城を攻めた際、中村口から木戸逆茂木を切り落として城内に攻め入ったとあり、おそらくこの東南角が中村口にあたろう。堀は東南角



図4 越水城推定範囲（明治18年仮製陸測図1/20,000）

から西へ100m程で途切れているため外構えの全容は不明であるが、少なくとも図4の範囲に越水城は推定できよう。

ところで、瓦林正頼は越水築城の1年前の永正8年、芦屋の鷹尾山（城山）に鷹尾城を築いている。この城は、芦屋川と高座川の合流点に聳える標高263mの典型的な山城であるが、やはり『瓦林正頼記』に「鷹尾城に外堀を掘れば、用水をは桶にてかくへし」と記されている。この記事は、外堀を掘ったがために、用水が遮られたとして芦屋の民百姓から突き上げを食らったというもの、おそらく城の麓を流れる

高座川を外堀として深く掘り下げたことにより用水がとれなくなったため、上流から樋をかけてまかになったと解釈できるのである。現在も高座川を渡ると、恐ろしく深く抉れた様子が見て取れる。このことは、鷹尾築城にあたっても麓の平地を画するために外堀を掘り、外郭を構えたことを物語っている。

以上、西宮と芦屋に築かれた二つの城について長々と見てきたが、16世紀の初めには城の構造上、外構えは無くてもならないものになっていたことが知られるのである。こうした状況から鑑みて、伊丹城も永正17年の落城の際には外構えを備えた城に生まれ変わっていたものと思われる。それが、「当城此数十年の間、諸侍土民以下煩としてこしらえたる」城であったのである。15世紀第3四半世紀から16世紀初頭にかけては戦国動乱の情勢が高まった時期である。こうした時勢、堀を深く掘り、外構えを備えた大きく新しい城造りがおこなわれたことは当然の理といえる。

当時の外構えの縄張りについては、今のところ考古学上明らかにされていないが、「四方に城戸をさし、家々へ火をかけ天守にて腹切ぬ」は城の四方には門があり、城門の内にはたくさんの家があり、その中心には天守¹⁰が配置されていたと解釈できる。つまり、城内に天守とたくさんの家を擁し、四方に城門を配したかなり大きな城に拡大されていた様子が窺えるのである。そして、寺院も配置されたことであろう。有岡城跡には、廃寺となったものや所在地不明のものを含めて14ヶ寺があった(表1)。そのうち8ヶ寺は荒木村重入城後に配置されたものである。残る6ヶ寺は、平安時代の金剛院を除き、村重入城前の15世紀後葉から16世紀前葉に集中しており、その建築時期も外構え形成時期を考える上で参考になる。これら6ヶ寺の配置は、もっとも遅く建てられた本泉寺が伊丹城主郭の西正面に隣接しているほかは、有岡城跡の外郭線に近いところに占めている。このことは、当時すでに、有岡城跡の外郭線と同じに外構えができあがっていた可能性を示唆するものと見ることができる。しかし、寺院の位置は当時のままを保っているとは限らない。

特に村重入城にともなう配置替えがあったであろうし、そのあたりの事情も考慮に入れなければならない。さらなる調査検討が必要である。

伊丹城に外構えが形成され始めた時期については、永正17年から数十年前ではあるが、15世紀後葉以後の社会情勢、伊丹城内の寺院配置時期などから鑑みて、15世紀後葉の内に求めるのが妥当であろう。

表1 有岡城跡所在寺院(『伊丹市史』第2巻を参考に作成)

番号	寺院名	開基年代	備考
1	金剛院	平安時代	野宮(猪名野神社)の別当寺
2	正覚寺	文明年間(1467~86)	
3	法厳寺	大永2年(1522)	
4	法専寺	天文年間(1532~54)	寺伝では天正年間の開基
5	福円寺	天文年間(1532~54)	
6	本泉寺	永禄3年(1560)	内郭に位置する
7	光明寺	天正年間(1573~91)	
8	万徳寺	天正年間(1573~91)	
9	行善寺	天正年間(1573~91)	廃寺
10	墨染寺	天正年間(1573~91)	
11	正善寺	天正年間(1573~91)	
12	大蓮寺	天正年間(1573~91)	
13	大広寺	天正年間(1573~91)	所在地不明
14	本叢寺	天正年間(1573~91)	所在地不明

(5) 荒木村重と惣構えの完成

ポルトガルの宣教師ルイス・フロイスは伊丹に村重を訪れ、有岡城に入ったときの様子をつぎのように本国への書簡にしたためている。「我等は宵の口に伊丹と称し甚だ壮大にして見事なる城に着きたり。城主は直に我等を引見し非常なる款待をなし(中略)。彼は又新に築造せる彼の美麗なる城を日中に親せんと欲し、翌日は是非彼と午餐を共にせんことを望みしが、我等は黎明前出発すること必要なりき。」(1578年9月30日〔天正6年8月29日〕付ルイス・フロイス書簡「耶蘇会士日本通信異国叢」)

天正2年、伊丹氏を滅ぼした村重が伊丹城に入り、新しい城造りに着手した自慢の「壮麗なる城」とはどのようなものであったのであろうか。それは、伊丹氏が築き上げてきた伊丹城とは形態や構造、規模はもとより機能的にも格段の差があったことは確かである。この時期は、ようやく戦国時代も終わりの段階で、中世から近世への移行期にあたり、政治の面においても、経済の面においても構造改革が進行形であった。政治と経済、文化が一つの城郭の中に機能的にまとめられ、城を中心に大きくうねりだし始めたのである。それまでは取り入れられることのなかった町家を城の外構えに取り入れることによって、それを「惣構え」と呼ばれる城の形態として結実させたのだった。

町家は、城郭の一番外側を取り巻く緩衝地帯におかれ、職種ごとに居住域が割り当てられて配置された非戦闘員から成る。城主は楽市・楽座に見るような経済奨励策をとり、彼らの自由な経済活動を保護し、保証した。それは、町家の非戦闘員を防御の盾とするのを第一義とするのではなく、自由な経済活動を通じて物資の流通を最大限にはかり、銭貨の獲得と物資の備蓄、とりわけ有事の際の築城戦に備えた兵糧と武器の備蓄を最重点におくことにあったというまでもあるまい。事実、村重が信長を離反したとき、信長の有岡城攻めに対し1年に及ぶ持久戦を展開できたほど強固なものだったのである。

天正6年秋、大阪石山本願寺攻めの前線にあった村重が本願寺に内通した、という情報が信長のもとに寄せられた。信長は大きな衝撃を受け、直ちに本願寺と毛利氏との和睦を朝廷に願い出たほどの打撃であった。しかし、信長勢が毛利の水軍を木津川口に破ったことから攻勢に転じ、同年11月、信長による有岡城攻撃が開始された。12月初めには、信長勢は鉄砲と火矢を射って有岡城まで押し寄せた。しかし、城の守りは堅く、信長勢の被害は予想外に大きかった。太田牛一の「信長記」は、その様子を「堀久太郎、万見仙千代、菅屋九右衛門三人為御奉行、鉄砲之者とも召列町口へ推詰、鉄砲をうたせ、(中略)は又三手に分而火矢を射入町を放火可仕之旨仰出、(中略)近々と取寄被攻壁際ニ而万見仙千代打死候」と記す。そこで、信長は長期戦の構えをとり、自ら古池田に陣取り、塚口、食満、加茂、倉橋、原田、刀根山などに布陣を張り、有岡城を包囲した。村重勢も、時には場外に出撃したが、一進一退のまま1年に及ぶ持久戦となった。

11月に攻撃を受けて以来10ヶ月、有岡城は本願寺や毛利氏の救援もなく、兵糧も少なくなってきた。そうした9月2日、村重は数人の近習を連れ、闇夜にまぎれて有岡城を脱出し、尼崎

城に逃れたのである。村重が城を出た理由は援軍要請のためとされているが、功を奏さないうちに村重は再び有岡城へ戻ることはなかった。

城主なき後も有岡城は1ヶ月半にわたって堅固に守られていたが、有岡城の砦の一つ上鷹塚砦を守る中西新八郎の裏切りにより上鷹塚砦が開かれた。有岡城跡は前述したように南北に長い縄張りをもち、惣構えの周囲は段丘崖の要害で守られている。そうした地形的特質を生かして惣構えの東縁中央に城本体にあたる城郭（主郭）が置かれ、縄張りの南北端と西縁中央とに3つの砦が配されていた。北端の砦は「岸の砦」と呼ばれ、渡部勘大夫が守備した。南端の砦は「鶴塚砦」と称し、野村丹後を大将に和歌山の雑賀衆が守備した。開かれた「上鷹塚砦」は西縁中央を守る砦であったのである。城内に侵入した信長勢は、たちまち町家を占拠し、侍屋敷を焼き払い、裸城にしてしまった。「信長記」はその時の状況を「町を八居取にいたし城と町の間二侍町御座候、これをハ火をかけたか城になされ候」と記している。

落城間近に迫った10月24日、信長はすぐさま家康に「仍伊丹事、外構悉打果、天守計攻詰候」と黒印状を送っている。また10月27日には河尻与兵衛（秀隆）に「就伊丹之事、早々言上無由断之条尤候、彼向事外構悉打果、天守斗攻詰候、金掘等申付候間、不口可落居候、（後略）」と黒印状を送り、天守（城郭）攻めに金掘りを用いていることを明かしている。

惣構えの手足をもぎ取られた有岡城は、城郭に「諸手四方より押つめ城楼かねほりを入責られ」（『信長記』）て、ついに天正7年11月、1年にわたる攻防の末に落城した。

有岡落城後、信長は池田恒興（信輝）・之助（元助）父子を重用し、之助に伊丹の城を与えた。そして、有岡城は再び伊丹城と呼ばれるようになったが、天正11（1583）年、信長の後を継いだ秀吉は伊丹を天領とし、廃城とした。

3. 惣構えの形態と構造（図5）

城郭における惣構えの形態は、戦国時代を通じて育まれてきた高度に発展した構造と機能を備えたものであった。そして、政治的機能と経済的機能を一体化して城内に取り入れた構造は、つぎの近世的城下町への発展へつながっていく都市的要素をもったものといえる。有岡城の場合は数奇な運命をたどり、最後は廃城となったため城下町として発展はしなかった。しかし、江戸時代を通じて酒造業を中心に新たな産業の町、伊丹郷町として発展した。有岡城主郭の北西部の堀に沿った雲上坂から樽廻船で江戸に運ばれた伊丹酒は、「丹醸」の極醸酒として大いにもてはやされ、全国にその名が知られた。そして、各地から文人墨客が訪れ、文化人が輩出され、文化的にも華やき、現在の伊丹の礎を築いたのである。

では、伊丹の基となった有岡城の惣構えとはどのような形態・構造であったのだろうか。現在までに、有岡城跡・伊丹郷町の発掘調査は200回を超える調査がおこなわれているが、未だその全体像を復元するところまでに至っていない。しかしながら、江戸時代に作られた伊丹郷町の絵図面や地図が数多く残されている。そこで、それらの資料を頼りに惣構えの概要を記してみよう。

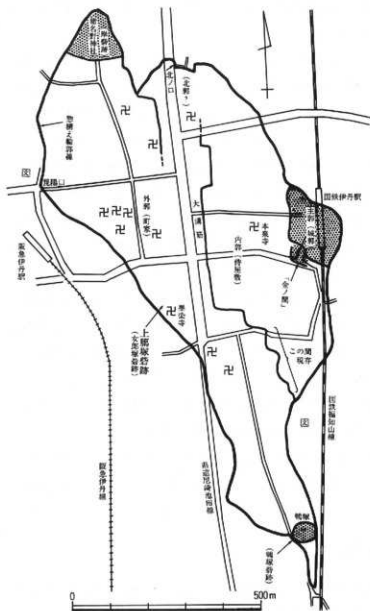


図5 有岡城惣構え概念図 (1/10,000)

現存する伊丹郷町最古の絵図は『寛文9年伊丹郷町絵図』(以後、寛文絵図という)と称されるものである。寛文9年は江戸時代前期、西暦1669年にあたる。ところが、これから167年後の天保7(1836)年に描かれた『文禄年間摂州川辺郡伊丹郷之図』(以後、文禄図という)がある。文禄年間(1592-96)とは有岡廃城後10年ほど経過した16世紀末になり、寛文9年を遡ること70年以上前にあたる。この文禄図には「古野氏古記をもって書きしるす」とあり、古野家に伝わる古記録をもとに当時の様子が復元されたものと考えられる。ちなみに、文禄図は幕末の測量技術をもって作成されたと思われる、非常に地図としての精度の高いものである。このほか、天保7年写し「川辺郡伊丹略図」など、江戸時代末から明治にかけて作られた絵地図があるが、惣構え復元には前の寛文絵図と文禄図が有効である。

寛文絵図、文禄図を見て、まず

気づくことは伊丹郷町を取り巻く堀と土塁である。その堀と土塁は有岡城の惣構えの輪郭に他ならず、伊丹郷町が惣構えの形態を保って形成されたものであることを物語っている。その堀を外堀とする。さらに、文禄図には町の中央を南北に走る溝と土塁が描かれており、「大溝筋」と記されている。寛文絵図にもそれらしき描写が認められ、惣構えの中が東西に二分されていたことが窺える。その北側では横矢掛と思われるコの字状の折れも見られる。

大溝筋は、県道尼崎池田線の東側に平行して白雪酒造や老松酒造の工場敷地、住宅の下に埋もれているものと考えられ、その大半が現存せず不明である⁹⁾。ただし、大溝筋の南側が鉤形に折れて惣構えの東側を画する段丘崖の外堀につながっている部分は、現在も台地上から台地下へ落ちる斜面地の溝として現存している。この部分の堀幅は現況から20m以上に想定される。その規模などから鑑みて、大溝筋は惣構えを東西に二分する内堀になる。文禄図を見ると、そ

の西側は細かく町割が描かれているのに対し、東側には新しい大きな道路地割りはあるがほとんど空白である。寛文絵図でも西側に町家が描かれ、東側にはほとんど町家はなく空白である。その状況から西側に町家、東側に侍屋敷が配されていたと想定できよう。そこで、大溝筋から西側の町家にあたる空間を外郭、東側の侍屋敷にあたる空間を内郭と呼称する。

つぎに城の本体部分であるが、寛文絵図、文祿図ともに内郭の東端中央に城郭を描き、その西隣に本泉寺を描く。文祿図では城郭を「古城」と記し、それを取り囲む堀と土塁があり、西側の堀に石垣を描いている。この石垣は寛文図には描かれておらず、寛文9年以降に積まれた新しい石垣と考えられる。寛文図では城郭内をH状の堀で5区画に区切り、その北端の区画に「本丸」と大書し、中央東の区画に「天守土台」、南区郭の東半分に「二之丸金之間」と記す。そして、天守土台の東側には「古堀」と記された池状の堀が描かれているが、前述したように周囲の堀に石垣は描かれていない。古城や本丸とされたところは城の中核になるところで、これを主郭とする。

このように有岡城の惣構えは、猪名川に面した段丘崖に主郭を置き、その西側を波形状に取り囲んで内郭、外郭を配した構成であったことが想定できる。

ところで、『信長記』には「町を八居取二いたし城と町の間二侍町御座候、これをハ火をかけたか城になされ候」とあり、有岡城の惣構えは一番外側に町があり、町と城の間に侍町があり、町と侍町と城の3部構成で成っていたことが知られる。また、信長の黒印状には「外構悉打果、天守計攻詰候」とあり、大きく外構と天守⁵から構成されていたのである。この場合の外構は町と侍町をさすものであり、天守は城に相当する。これを前に検証した主郭、内郭、外郭に当てはめると、主郭は城であり天守にあたり、内郭は侍町、外郭は町に一致し、主郭を城郭、内郭を侍屋敷、外郭を町家として捉えられよう。

主郭や内郭がどのような構造になっており、どのような施設が配備されていたのかについては、残された絵地図などからは全くといってよいほど分からない。特に主郭部は阪鶴鉄道（現JR福知山線）敷設の折り、東2/3以上が削り取られたため寛文絵図にあるH状の堀の確認も発掘調査で検出されておらず不明である。現在のところ、主郭の南西隅に「金之間」と記された独立曲輪の存在が確認できている。残存地区からは、第1次調査で伊丹城時代の沓脱石を持った桁行3間（8.1m）、梁行3間（6m）の礎石建物が有岡城時代の地層下から検出されている。

内郭における主要な施設といえば、主郭の西隣にある本泉寺があげられる。同寺は伊丹城時代の永祿3（1560）年建立といわれ、唯一内郭にある寺院である。侍屋敷がどのように配されていたのかは発掘調査でも区画溝が一部確認されているものの、確実な建物跡は未検出で、今後の調査に期待がかかる。

外郭には、整然と区画された道路が東西南北に張り巡らされ、それに沿って町家が形成されている。町家の配列を南北の道筋に沿って東側から列挙すると、

①薬屋町—柴屋町—魚屋町—中之町—材木町—竹屋町—南町—外城村—無足町—野田村—植松村

②鍋屋町一柳町一米屋町一裏屋町一紺屋町

③北小路村一毘陽口村一中小路村

となる。この町家はあまりにも整然としており、有岡城当時の町家と同一には考えられないが、こうした町家は外郭に配置され、攻撃に対する緩衝地帯として防衛上の役割と籠城戦に耐える機能を果たしていたのである。文禄図には外郭内を幾重にも分断していたと思われる土塁が町家のあちこちに描かれており、かなり複雑な町家構成であったと推測される。さらに、町家の要所要所には寺院が配置されており、簡単には内郭、主郭へ近づけない構造になっていたことが窺える。

また、外郭の要所には砦が配置されていた。砦については『信長記』から岸の砦、鶴塚砦、上臈塚砦の3砦があったことが知られる。岸の砦は惣構えの北端を守る砦で、現猪名野神社(寛文絵図には野宮寺と記す)境内が比定されている。神社境内の周囲には土塁が現存する。鶴塚砦は、伊丹郷町の南端に鶴塚と称される小山が今も残っており、惣構えの南端を守る砦であった。その小山は比高差4m以上の高さがあり、古墳を利用した物見台であったと考えられる。上臈塚砦は、前述したように、惣構えの中央西側を守っていたが、信長に内通し落城のきっかけを作ったためか、ことごとく破壊されてその痕跡をとどめていない。その位置については20次調査で手懸かりが得られた。

以上のように、有岡城の惣構えは、その周囲を堀と土塁で囲み、主郭(城郭)を取り巻いた内郭と外郭の二重の外構えで成り立っていた。内郭と外郭は後に大溝筋と呼ばれた内堀で区切られ、内郭には家臣を中心とする武士団で構成された侍屋敷、外郭には、一般民衆や足軽等の無足衆を住まわせた町家が置かれた。外郭は、ただ単に町家を形成するだけでなく、要所に砦と寺院を配置し、さらに土塁や堀を網の目のように張り巡らせて細かく分断されていたと想定される。

【註】

- (1) 「四方に城戸をさし、家々へ火をかけ天守にて腹切ぬ」の部分は、天守の初見史料としてよく引き合いに出される。しかし、この天守については、内藤昌氏が出典である『細川両家記』の他の写本を比較検討した結果、『群書類従』所収本は江戸時代末の史家が「しゅてん」を「てんしゅ」と誤った校訂をしたため、永正17年の頃には天守という用語そのものが存在しないとされ、その上で、天守の初見は半世紀後の『元龜二年記』に記された二条城「天守之前」とされている(内藤1979)。
- (2) 2001年、兵庫県教育委員会が実施した主要地方道・伊丹停車場線の調査で大溝筋の一部が確認された。
- (3) 天守の用例は、元龜2(1571)年を初見として元龜3年の坂本城、元龜4年の高槻城、天正2年の勝龍寺城、天正4年の安土城というように徐々に増えている。そして、安土城に天守が完成した天正7年以降には急増し、以後、普遍的に使用されるようになった観がある。それは、城の象徴的建造物として、それまで目にする事のなかった重層建築が初めて安土城に登場した事に由来するものであろう。織田信長が安土城を築いたのが天正4(1576)年。その3年後の天正7(1579)年に天守と呼ばれる重層建築が完成する。この天守の全容については長い間不明であったが、内藤昌氏によってその指図が発見され、その形態および構造が明らかになった。それは外見5層7階建ての威風堂々とした望楼型建築であった。それは、

規模・内容ともにそれまでのものに比べて破天荒であり、革新的であったがために天守の濫觴となった(内藤1976・1994)、という。このような重層建築物が標高198mの安土山の頂に聳え立った様は、当時の人々を驚きの眼で引きつけ、信長の破竹の勢いを天下に知らしめた。これ以後、城郭の中心に権威を象徴する重層建築物が据えられるようになり、それが城を象徴する建物として一般的に天守と呼ばれるようになったと考える。

とすれば、安土城の天守出現以前は、天守とは果たして特定の建物だけを指していたのだろうか。伊丹城の天守の記載は後の校訂になるとして、天守の用語が確実に出現するのは元亀2年、安土城天守完成の8年前であり、安土城天守着工前のことである。信長が有岡城を攻めたのが天正6年、安土城天守建築中のことである。その翌年5月に安土城天守が完成する。そして、その半年後に有岡城は落城する。落城直前、信長は家康と河尻秀隆にまもなく落城するであろうという書状を送っている。その中に天守という用語が使われており、有岡城にも天守の存在が知られるのである。ということは、安土城天守よりも早く天守が完成していたということになるか。もし天守が建造物をさすすれば、安土城天守のような壮大な建造物が突然出現したとは考えられず、その祖型となる建物があったと考えた方が妥当であろう。ところが、信長の書状をよく検討すると、天守とは外構えに対して使われており、ある特定の建物を差したものでだけではないことが分かる。つまり、天守と呼ばれる建物を擁して、城の中核となる空間(郭・曲輪)全体をいったものと解される。まだ城郭用語が完成されていない当時は、ある時は建物、又ある時は建物を含めた空間を差したと理解するのが自然である。有岡城の場合、主郭が天守にあたる。

そして安土城天守出現以後、城を象徴する重層建築物を差して天守と呼び、天守を擁する空間は別に天守丸や本丸と呼ばれ区別されるようになったと思われる。

〔参考文献〕

- 浅岡俊夫 1980 「有岡城跡の指定にあたって」『城』No.160 城郭研究会
 浅岡俊夫 1981 「伊丹城(付有岡城)」『日本城郭大系』12 新人物往来社
 浅岡俊夫 1987 「有岡城跡における既往の調査と二・三の考察」『有岡城跡・伊丹郷町』I 大手前女子学園
 有岡城跡調査委員会
 伊丹市教育委員会 1976 『伊丹城跡発掘調査報告書』I
 伊丹市教育委員会 1977 『伊丹城跡発掘調査報告書』II
 伊丹市教育委員会 1978 『伊丹城跡発掘調査報告書』III
 伊丹市教育委員会 1979 『伊丹城跡発掘調査報告書』IV
 伊丹市教育委員会 1983 『有岡城跡発掘調査報告書』V
 大手前女子学園有岡城跡調査委員会 1987 『有岡城跡・伊丹郷町』I (三井パークマンション建設に伴う発
 掘調査報告書)
 奥野高広 1969 『織田信長文書の研究』上 吉川弘文館
 黒田俊雄 1971 「中世の伊丹」『伊丹市史』第1巻 伊丹市
 黒田俊雄編 1974 『伊丹中世資料』(伊丹資料叢書2) 伊丹市立博物館
 黒田俊雄 1978 「伊丹氏の初見史料のことなど」『地域研究いたみ』第9号 伊丹市立博物館
 鈴木充 1975 「伊丹城」『地域研究いたみ』第4号 伊丹市行政資料室
 内藤昌 1976 「図説日本城郭史」『歴史読本』第21巻第10号
 内藤昌 1979 『城の日本史』NHKおっくす
 内藤昌 1994 『復元安土城 信長の理想と黄金の天主』講談社
 中井均 1987 「中世城館の発生と展開」『物質文化』48

兵庫県教育委員会 1982『兵庫県の中世城館・荘園遺跡』

八木哲浩編 1982『伊丹古絵図集成』(伊丹資料叢書6)伊丹市立博物館

八木哲浩編 1978『荒木村重史料』(伊丹資料叢書4)伊丹市立博物館

Ⅲ 発掘調査地点

第11次～16次、第18次～22次の発掘調査地点は図6に、その調査地点の面的な調査範囲は図7に示したとおりである。有岡城跡は惣構えの形態がよく残されていることで知られ、1979年12月28日、惣構えの外郭線と主郭の一部を開発から護り、史跡整備を促進し、後世に顕彰するために国史跡に指定された。惣構えは、城の中心である主郭、主郭を取り巻く侍屋敷の内郭、そしてその外側を形成する町家の外郭で構成されており、その外郭線を土塁と外堀で固められていたのである。そこで、それぞれの調査地点が惣構えのどの場所にあたるのか、位置関係を明示しておく。

主郭部に関係して行った調査は、第13次・16次・21次調査である。第13次・21次調査は主郭部を取り巻く内堀の範囲と深さを調べることを目的とした。第16次調査は主郭の北西隅に残る土塁に積まれた石垣の再調査である。この石垣は第2次調査で検出されていたが、史跡整備にあたり、石垣の基底部の検出と写真測量を目的としたものである。

なお、イ地点として記したのは国鉄（現JR線）伊丹駅前周辺整備工事に際し、主郭史跡指定地と道路境界に石積み工事が行われ、その立会に伴う報告である。

内郭における調査は、第11次・14次・15次調査がこれにあたり、第11次調査は主郭部周辺から離れた地区を調査するさきがけとなった。この3調査地は、有岡城主郭の南約300mのところに接近しており、内郭の東南端地区に位置する。侍屋敷の構造などを知る手懸かりが期待される。

外郭における調査は、第12次・18次・19次・20次・22次がこれにあたる。第12次調査地点は江戸時代に形成された伊丹郷町の町家でいうと、柴屋町の北端の一面に位置する。第18次調査地点は有岡城惣構えの外郭線の外側にあたり、堀跡の確認に期待がかかる。第19次調査地点は有岡城の岸砦跡に隣接し、やはり惣構え外郭の堀跡の確認に期待がかかる場所である。第20次調査地点は、推定上属塚砦跡付近に位置し、砦跡遺構検出に最も期待される場所である。伊丹郷町の位置でいうと、中少路村の南端にあたる。第22次調査地点も伊丹郷町の中少路村に位置する。

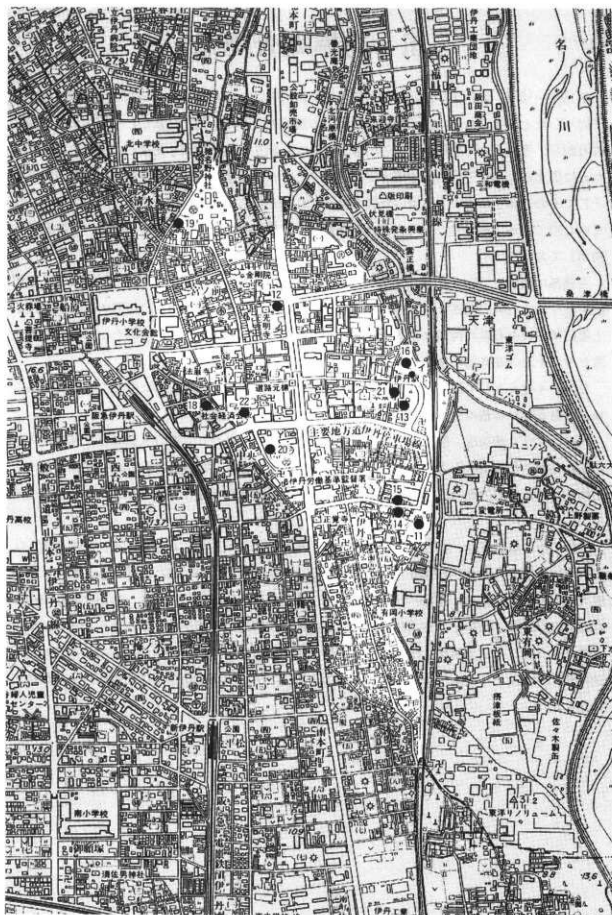


図6 有岡城跡の範囲と発掘調査地点(数字は調査回数, 1/10,000)



図7 発掘調査地区図(数字は調査回数、伊丹市白図1/2,500を1/5,000に調整)

IV 第11次調査

・調査期間	1983年7月2日～8月23日		
・調査地	伊丹市伊丹5丁目616-1 外		
・調査原因	集合住宅及びスイミングプール建設		
・調査組織	有岡城跡発掘調査団		
調査団長	橋本 久		
調査主任	浅岡俊夫		
調査員	小西規雄（伊丹市立伊丹高校教諭） 中島正善（浪速高校教諭）		
補助員	石田千秋（大谷大学大学院） 伊藤典子（松蔭女子短大） 井上洋介 大西 浩正 佐伯二郎 松原崇雄 三宅和夫 宮本幸蔵 山本大治 吉田伸也 （以上神戸大学） 田中一（龍谷大学） 岸本兼英 土井初恵（以上奈良大学） 植村芳子 北村敏子 田村洋子（以上主婦）		

1. 調査方法

当調査地は、JR伊丹駅（有岡城跡の主郭）から南へ約350mに位置する。有岡城惣構えにあてはめると、内郭東南部の段丘崖に臨んだ一面にあたる。ここからは猪名川河口から大阪港、そして大阪市街から豊中市にかけての町並みが広く望める。

敷地は、駐車場として利用されていた数枚の土地をあわせて一枚の凸型に近い形態を呈し、南北長、東西長ともに最大約60mをはかる。敷地面積は約3,000㎡である（図版1）。

調査は予算と期間の制約上、全面発掘調査を行うことは不可能で、トレンチ調査にならざるを得なかった。そこで惣構えの輪郭になる土塁等の防御施設、内郭に配された建物や区画溝等の遺構の確認に重点をおいてトレンチを設定した。調査面積は507㎡である。

トレンチは、最初に東西トレンチ5本、南北トレンチ2本の7本を設定し、第1～第7トレンチとした。調査の過程で、必要に応じて予算と時間の許す限りトレンチの拡張と追加を行い、第6（N）トレンチ拡張区、第8・9トレンチを設定した。各トレンチの規模は次の通りである（図8）。

- ・第1トレンチ 長さ23.5m×幅2m
- ・第2トレンチ (E) (W) に二分
 - 第2（E）トレンチ 長さ27.5m×幅2.5m
 - 第2（W）トレンチ 長さ21m×幅2.5m
- ・第3トレンチ 長さ11m×幅2m
- ・第4トレンチ 長さ15.5m×幅2m

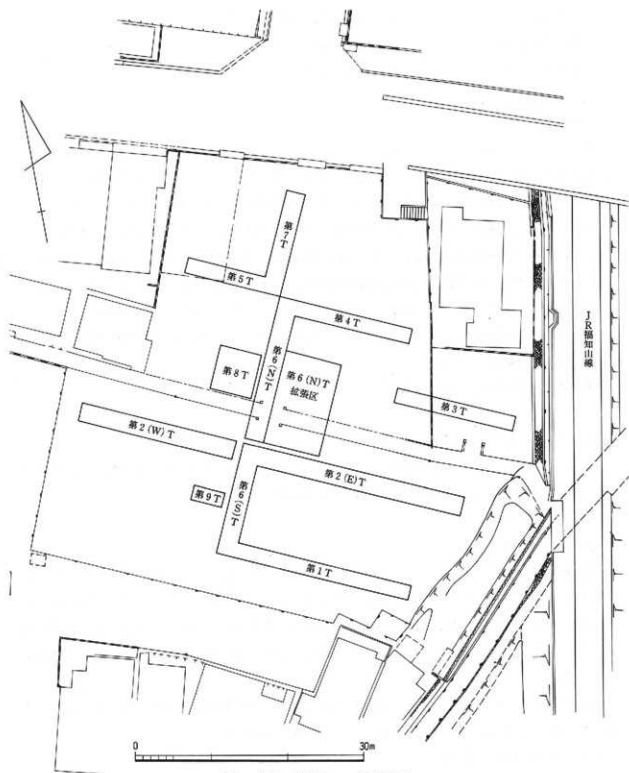


図8 第11次調査トレンチ配置図

- ・第5トレンチ 長さ10.5m×幅2m
- ・第6トレンチ (N)(S)に二分
 - 第6(N)トレンチ 長さ20m×幅2.5m
 - 第6(S)トレンチ 長さ15m×幅2.5m
- ・第6(N)トレンチ拡張区 長さ13m×幅7.5m

・第7トレンチ	長さ14m×幅2.5m
・第8トレンチ	長さ6m×幅5.5m
・第9トレンチ	長さ4m×幅2m

2. 調査概要

(1) 土 層

敷地全面に厚さ約80cmの盛土（第1層）があり、場所によっては表面に碎石が敷かれていた。盛土の下には旧地表の耕土層（第2層、黒灰色礫混泥土層）が10cm前後の厚さで一面に広がり、埋め立てられる以前は田畑であったことが分かる。その耕土層下に淡黄灰色礫混砂泥層（第3層）ないし茶褐色礫混砂泥層（第4層）、灰黄色砂泥層（第5層）、灰茶褐色砂泥層（第6層）、灰茶色礫混砂泥層（第7層）、淡褐色礫混砂泥層（第8層）、暗褐色砂泥層（第9層）等が厚さ10cm～20cmで広がり、それらの土層が一部重なり合って2層になるところもあるが、基本的には1層であり、全体的に一つの層として括れるものである。その直下が伊丹洪積台地の地山（第10層、黄茶色砂礫層）となる。

遺構は、有岡城時代以前が地山面から、江戸時代以後が第3層から検出した。

(2) 主な検出遺構

検出した遺構は大きく3つの時期に大別できる。第1は縄文時代、第2は伊丹・有岡城時代、第3は近世～現代である。出土遺物の中には古墳時代の須恵器などが含まれているが、その時代の遺構は検出しなかった。

縄文時代の遺構

調査地のほぼ中央、第6（N）トレンチおよび第6（N）トレンチ拡張区から2基の土坑SK-6、SK-27を検出した（図14、図版2下）。土坑はいずれも円形を呈す。大きさは、SK-6が直径124cm×110cm、深さ約10cm、SK-27が90cm×84cm、深さ13cmである。土坑からは縄文土器片、サヌカイト片、炭化物が出土したが、土器片は風化が激しく残存状況は悪い。SK-6からは石鏃が1点出土している。

SK-6・27から検出した炭化物は、放射性炭素年代測定を京都産業大学理学部山田治教授に依頼した結果、B.P.3550年±150年（KSU-951）の測定値が得られた。

伊丹・有岡城時代の遺構

城跡に関係する遺構には溝状遺構3本（SD-2・SD-3・SD-8）、井戸2本（SE-1・SE-2）、ピットがある。

SD-2は、第2（W）トレンチの中央部で検出した南北に走る溝状遺構である（図11）。後世の遺構に激しく切られているが、逆台形に掘られており、幅約3.6m、深さ約25cmをはかる。

SD-3は、第7トレンチの北端部で検出した東西溝である（図13）。溝の北側は平行する後世の溝で切られているが、復元幅約4m、深さ90cmの規模をもつ。溝の断面形は幅広のV字形を呈

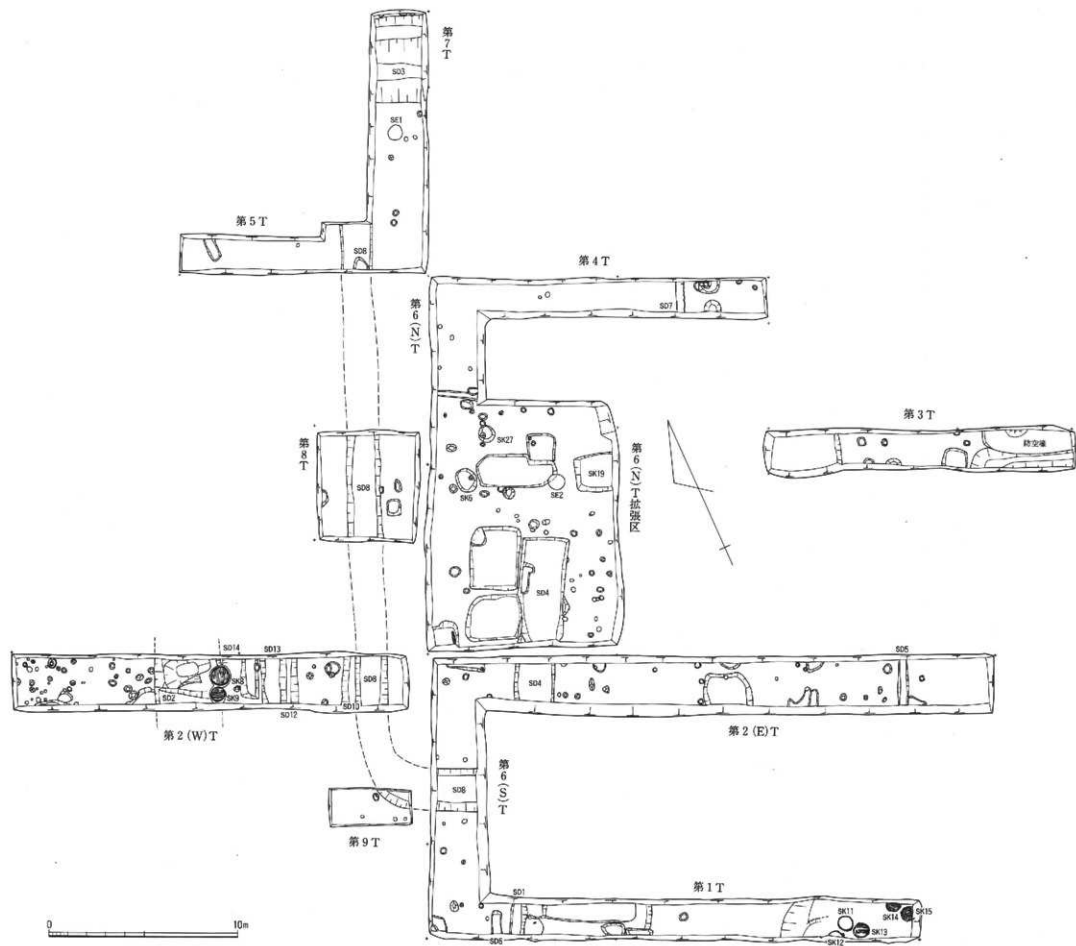
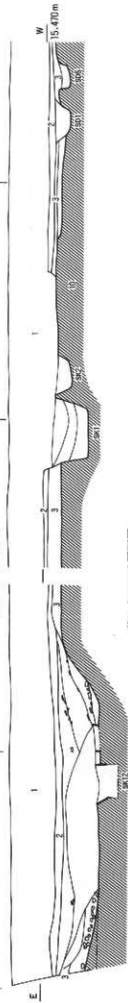
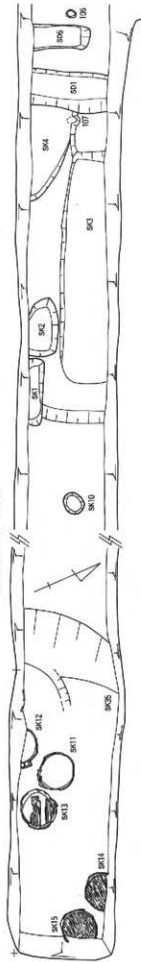


図9 発掘遺構展開図

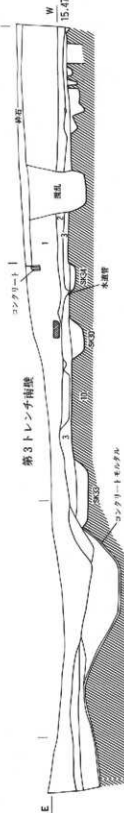
第1トレンチ南壁



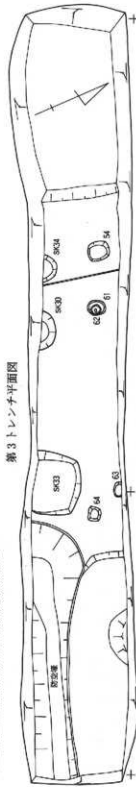
第1トレンチ平面図



第3トレンチ南壁



第3トレンチ平面図



- 1 黄土
- 2 黒灰色腐植土層 (田表土)
- 3 淡黄灰色腐植砂泥層
- 4 茶褐色腐植砂泥層
- 5 灰青色砂泥層
- 6 灰茶褐色砂泥層
- 7 灰茶色腐植砂泥層
- 8 淡褐色腐植砂泥層
- 9 暗褐色砂泥層
- 10 黄褐色砂泥層 (地山)



図10 各トレンチの遺構平面図と土層断面図(1)

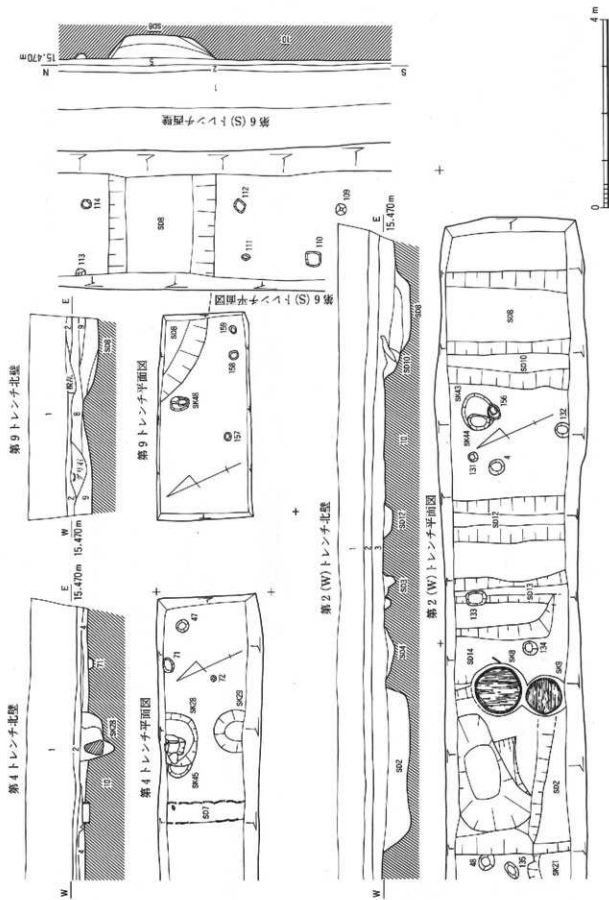


図11 各トレンチの遺構平面図と土層断面図(2)

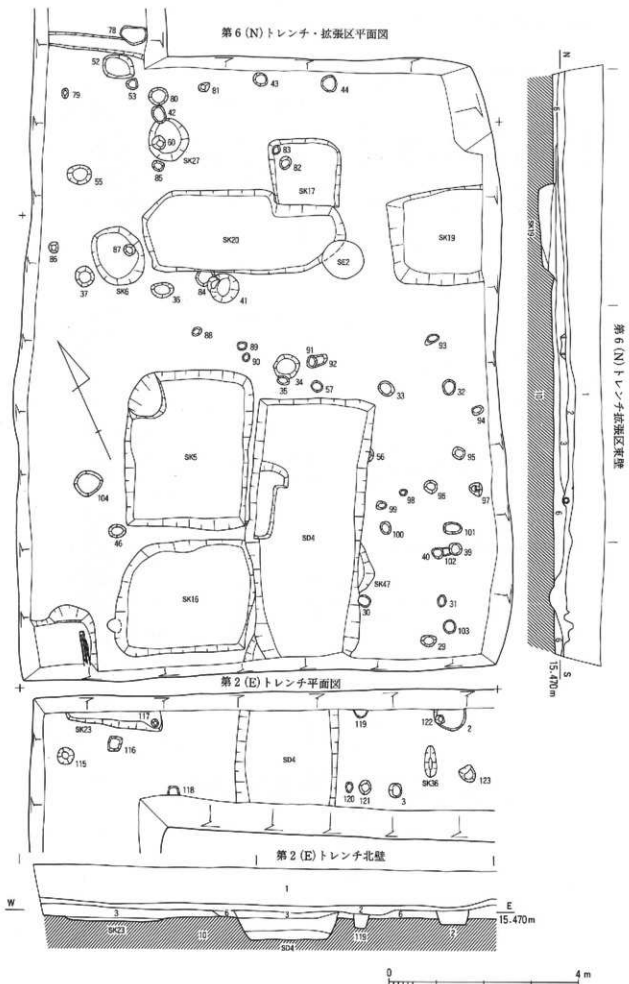


図12 各トレンチの遺構平面図と土層断面図(3)

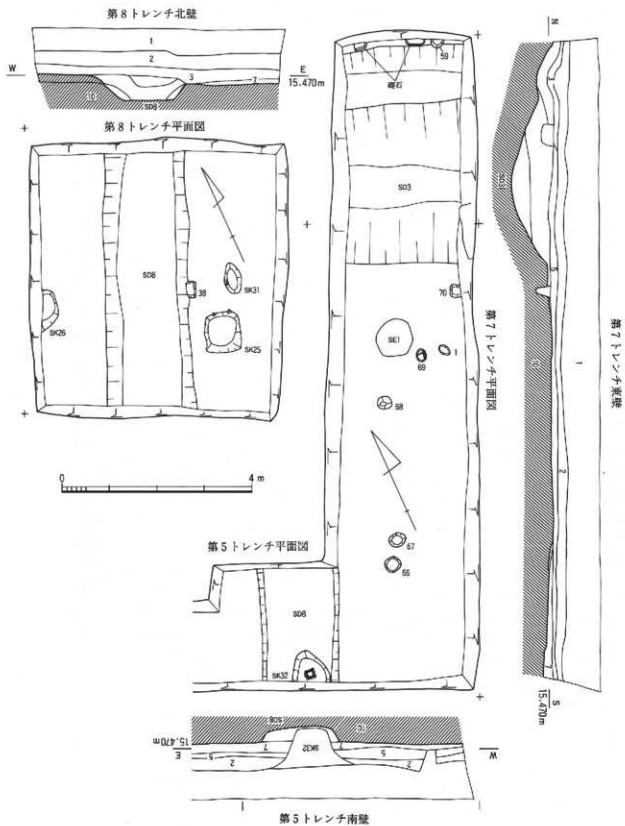


図13 各トレンチの遺構平面図と土層断面図(4)

す。その形態からみて、内郭の中を小区分する小堀としての性格・機能を持ったものと推定できる。

SD-8は、北から南へ第5・第8・第2(W)・第9・第6(S)トレンチで検出した溝である(図9・11・13、図版3上)。一直線に南北方向に伸び、第9トレンチで東へ隅丸直角に折れ曲がる。溝の断面形態はSD-2と同じく逆台形を呈し、肩幅は1.6m~2.2m、深さは30~50cmをはかる。溝の規模や形態から見て、個々の待屋敷を区画した溝と思われる。出土遺物は少なく、土師質へそ皿などが少量出土した程度である。

SE-1は、第7トレンチのほぼ中央で検出した(図13)。SD-3からは1.2mほどしか離れていない。直径80cmの素掘りの井戸で、深さ490cmまで掘り下げたが底には到達せず、ガスが発生し危険なためそれ以上掘り下げることは断念した。この井戸は落城直後に埋め立てられたらしく、16世紀代の備前焼や丹波焼の陶器類、土師質土器、瓦類および火熱を受けた礫などが多量に投棄されていた。

SE-2は、第6(N)トレンチ拡張区で検出した(図12)。SE-1と同じく直径80cmの素掘りである。深さ425cmまで掘り下げたが、底にはいたらず、それ以下の掘り下げは断念した。出土遺物には古伊万里や備前焼などの陶磁器類、瓦などがある。

ピットは、柱穴状のものや杭状のものを多数検出したが、建物や柵列に組合わさるものはなかった。出土遺物から有岡城時代になるピットは、第6(N)トレンチ拡張区検出のSP-34・56などである。

近世~現代の遺構

溝枠を差し瓦した溝や瓦溜土坑、埋桶土坑、瓦枠土坑、防空壕などを多数検出した。ここでは埋桶土坑(SK-8・9)と瓦枠土坑(SK-11~15)を取り上げておく(図15)。

SK-8・9は第2(W)トレンチの中央でSD-2の東肩を切って検出された(図11)。SK-8は直径96cm、残存深40cm、SK-9は直径75cm、残存深35cmをはかる。この2基は接して並んでお

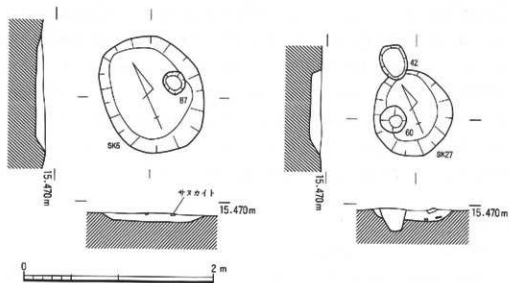


図14 縄文時代の土坑平面・断面図

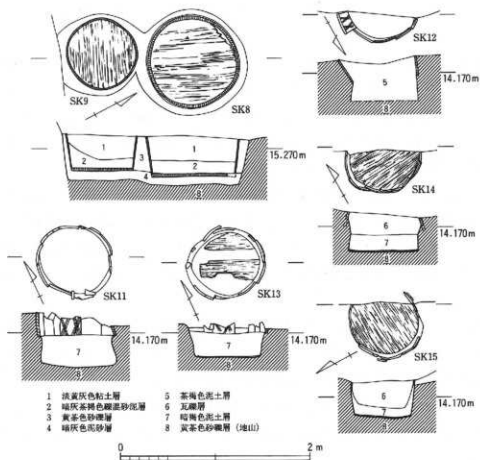


図15 埋植土坑および瓦棒土坑平面・断面図

り、大小を一組として設置されていたと見られる。

SK-11~15は第1トレンチの東端部で5基固まって検出された(図10、図版3下)。第1トレンチの東端部は惣構えを圍繞する土塁の遺存が推定されたが、土塁の痕跡は確認できず、逆に1mほど掘り下げられて落ち込み、瓦礫で埋められていた。その瓦礫の下から瓦で棒取りされた土坑が5基検出された。なお、トレンチの壁に1基引っかけっており6基以上になる。6基の土坑は、SK-11~13の3基に1基を加えて4基を一組とする組と、SK-14・15の2基を一組とする組に分かれる。瓦棒は土坑の底まで及んでおらず、底から20cm~30cm上になされていた。土坑の直径はほぼ70cmに統一されている。残存深が35cm~55cmで、もとの深さが分からないため、瓦が何段積まれていたのかは不明である。土坑の底には底板が敷かれていたらしく、SK-13~15の3基には底板が遺存していた。これらの土坑の中にも瓦礫が詰まっており、中から伊万里焼碗が出土した。時期は江戸時代後期~末に比定される。

(3) 主な出土遺物

縄文土器 (図16 1~17、図版29上)

縄文土器は、SK 6・27から出土した以外に第2 (E) トレンチ地山直上および第6 (N) トレンチから出土した。図示した土器のうち、5・9・11・12・13・14はSK-6、1・4・6・10・

15はSK-27、2・3・7は第2(E)トレンチ、8・16・17は第6(N)トレンチからの出土である。縄文土器の遺存状態は全体にきわめて悪い。

1～5の口縁部は先端を面取りせず尖り気味に仕上げている。1の調整は、巻き貝条痕に撫でを施す。6・7の口縁部内面には沈線が巡る。

8は、8字状をした深鉢の口縁突起になる破片であろう。内面には八の字に沈線が認められる。堀ノ内II式に類似するものと思われる。

9は、沈線と縄文があり、縄文はLRである。10～12の破片には深さ、太さの違いはあるが沈線が認められる。13～15は底部の小片である。

16・17は、くの字に屈曲する口縁部の小片で、紋様は見られない。

これらの縄文土器の時期は、口縁内面に沈線のあるもののように中期末まで遡りうるものもあるが、総体的にみて北白川上層式に比定できよう。

石 鏝 (図17、図版27 20)

SK-6から出土したサヌカイト製の凹基無茎式石鏝。薄い剥片を素材とし、一方に素材の主剥離面を残す。両側縁は雑な細部調整でもって鋸歯状につくる。凹基部はやや鉤形状に剥離調整する。全長17.4mm、全幅15.1mm、厚さ2.9mm。

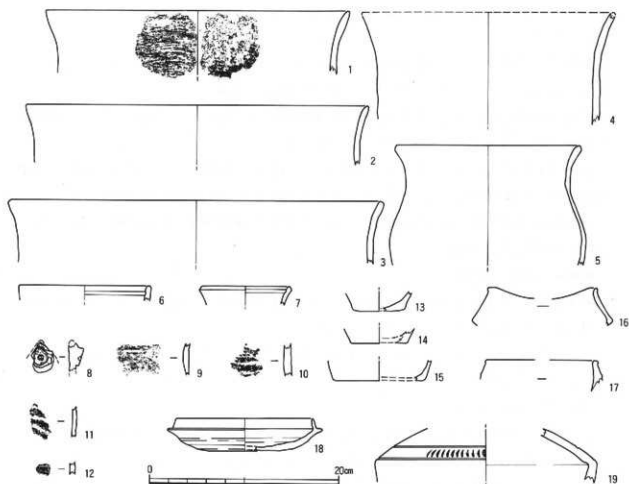


図16 縄文土器・須恵器実測図

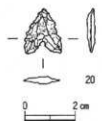


図17 石鏃実測図

須恵器 (図16 18・19)

18は、第2(W)トレンチのSD-8から出土した杯である。TK43に比定される。

19は、第2(W)トレンチのSK-24から出土した長頸瓶の肩部である。灰白色を呈し、肩部に2条の沈線と9本のクシ先による刺突紋を施す。

土師器 (図18 21~27)

21~25は、直径7cm~8cmの小皿である。21・25は第8トレンチSD-9、22・23は第7トレンチSD-3、24は第1トレンチSD-6から出土した。

26・27は、第6(N)トレンチ拡張区SP-31出土の中皿である。直径10cm~11.5cmをはかる。27の口唇部は丸く肥厚する。

瓦器 (図18 28~31)

図示した4点は碗である。28は、深みのある型になり、内面をなめらかに調整する。29の内面にはナデの痕跡がみられる。28・29には申し訳程度の低平な高台がつく。28・29は第6(N)トレンチ拡張区SP-30、30は同SP-31、31は第2(W)トレンチSD-14から出土した。

東播系須恵器 (図18 32~34)

いずれも第7トレンチSE-1から出土した捏鉢である。口縁部を上下に拡張させる。

陶器類 (図18 35~38)

35は、筒型の香炉で、口縁部内面から外面にかけて淡い緑釉を施す。内面と底部は露胎。高台の外側に3足がつく。第6(N)トレンチ拡張区SD-4出土。

36は、柿色釉を施した小皿である。釉は口縁部外面から内面にかけて施されている。底部は糸切りである。第6(N)トレンチ拡張区SD-4出土。

37は、陶製の小皿であろうか。糸切り底部から、肉厚に口縁部が大きく外反して開く。底部内面に貼りつけの突起がある。第7トレンチSD-3出土。

38・39は、汽車土瓶の蓋と思われる。上面には茶褐色の釉を施す。下面は露胎。第6(N)トレンチ拡張区SD-4出土。

備前焼 (図18 40・41)

40は播鉢で、6条を単位とする播り目をもつ。口縁は斜め外方に面取りする。間壁編年のIII a期にあたる。第6(S)トレンチSD-8出土。

41は大甕の口縁部である。玉縁口縁に段状の凹線が3条めぐる。間壁編年の5期に比定。第7トレンチSE-1出土。

瓦質土器 (図18 42~44)

42は、甕の口縁部である。口縁部は肥厚させながら大きく外反させ、口唇部を垂下させる。休部にはタタキ目が観察される。第2(W)トレンチSD-14出土。

43は、鍋もしくは鉢の底部と思われる。底部はケズリ整形する。第7トレンチSD-3出土。

44は、筒型になる器形の底部である。底部は上げ底で、内面に指頭痕が観察される。外面は

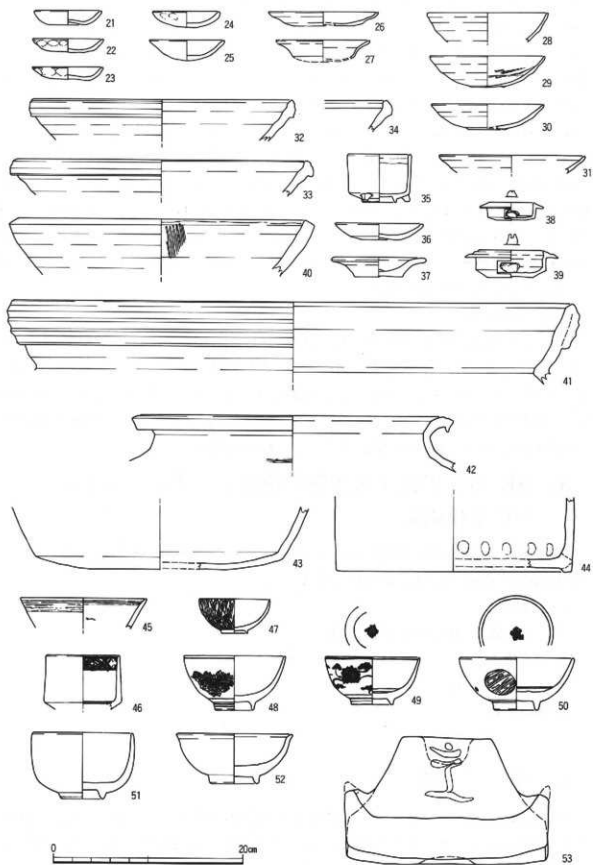


图18 中·近世遺物実測図

入念なナデ調整。火舎になろう。第7トレンチSD-3出土。

磁器 (図18 45~52)

45は、青磁碗である。色調は濁ったオリーブ色を呈す。口縁部は直線的に外傾して開く。口縁部内面に幅2mmの2条の影沈線、外面に幅広の影沈が見られる。体部内面には陰刻紋の一部と思われる細線が認められる。中国製。第2(W)トレンチSD-14出土。

46は青磁染付の筒茶碗である。第1トレンチSD-6出土。47は、赤絵染付碗である。第6(N)トレンチ拡張区SD-4出土。48・49は、草花をあしらった上手の染付碗である。48は第1トレンチSD-6出土。49は第6(N)トレンチ拡張区SD-4出土。50は、外面に丸窓紋、見込みに五弁花紋のくらわんか手茶碗である。第6(N)トレンチ拡張区SD-4出土。51は、淡緑灰色の青磁碗である。器壁は肉厚で、唐津製と思われる。第6(N)トレンチ拡張区SD-4出土。52は、肉厚の伊万里系白磁碗で、端反り口縁である。見込みに重ね焼きの高台痕が蛇の目状に残る。第6(N)トレンチ拡張区SD-4出土。

五輪塔 (図18 53)

組み合わせ五輪塔の火輪(笠)部である。四面には火輪に刻まれる大日如来真言、すなわち「**ア**」発心門(東)ラ、「**マ**」修行門(南)ラー、「**サ**」菩提門(西)ラン、「**ニ**」涅槃門(北)ラクの梵字が刻まれている。図示した面は西面である。梵字の彫り方は丸みをもった船底形を呈し、薬研彫りではない。大きさは一辺21.4cm、高さ13.4cm。上面と下面には風輪と水輪を受ける柄穴が穿たれている。花崗岩製。第7トレンチの攪乱層出土。

3. SK-6・27出土炭化物の液体シンチレーション 14C年代測定

京都産業大学理学部山田治教授にSK-6・27から出土した炭化物の液体シンチレーション¹⁴C年代測定を依頼した結果は次の通りである。

(1) 測定試料

SK-6およびSK-27出土木炭

(2) 測定番号

KSU-951

(3) 測定結果

3550±150年B.P.

4. 小 結

①城跡以前の遺構・遺物としては、縄文時代と古墳時代のものがある。縄文時代は、後期と晩期の遺物が出土したが、後期には遺構が伴い、量的にも多い。後期の土器は北白川上層式が主体を占め、石罫1点が伴う。遺構は、円形土坑2基が2mほどの間隔を置いて検出された。

②有岡城惣構えを圍繞する土塁は、第1・第2(B)・第3トレンチにおいてその痕跡すら確

認できなかった。江戸時代後期以後、段丘崖付近での開発が活発におこなわれた様子が看取された。

③城跡に関連する遺構は、惣構えの内郭内を区分した区画溝SD-2・3・8がある。これらの溝からは15世紀～16世紀にかけての遺物が出土している。SD-3は、SD-2・8とは形態が異なり、規模も大きく、内郭の中を小区分した小堀としての性格を有するものと考えられる。SD-8は方形に区画する溝で、侍屋敷を個々に区画した溝になろう。SD-2は、SD-8の西側に3.5mの間隔をおいて平行しており、SD-8と同様の性格を持った溝と考えられる。とすれば、SD-2とSD-8の間は侍屋敷内の通路として捉えられよう。侍屋敷にかかわる遺構はSE-1・2の井戸以外に建物に関する遺構を検出できなかったが、礎石建物であれば、江戸時代以降、削平されてしまったと考えることもできる。SE-1・2は、SD-8で区画された侍屋敷に付属した井戸になろう。



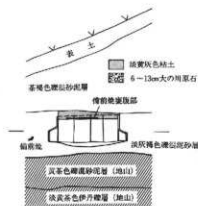
図19 立金に伴う遺構確認地点

V 伊丹駅前整備事業石積み作業に伴う立会検出遺構

- ・期 日 1983年9月3日
- ・場 所 伊丹市伊丹1丁目(史跡指定地内)
- ・調査員 浅岡俊夫 田中久雄

1. 遺構確認の経緯

国鉄(現JR線)伊丹駅前整備にともない、有岡城跡主郭部史跡指定地整備事業の一環として石積み工事が開始され、工事が石積み直前の段階に至ったので状況立会を依頼する旨の連絡が市建設部からあった。早速、現地に急行したところ、図版4(上)のように斜面は完全に切り落とされてしまっており、断面観察による遺構確認しかできない状況であった。断面観察の結果、図6・7・19のイ地点において瓦葺で囲った遺構を確認した。



2. 遺構の概要と出土遺物

確認した遺構(図20 図版4下・5上)は、瓦葺を方形に組んだと思われる土坑で、その北西隅部分が残っていた。土坑は焼土・炭化物を含む淡灰褐色雑混泥砂層上面から切り込まれていた。土坑の残存長は瓦葺2枚半、60cmほどで、深さは中窪みになっており30cm~38cmをはかる。瓦葺は、長さ27cm、幅22cm、厚さ2cm強で、掘り方に沿って内ぞりになるように立てかけてあり、瓦葺の底から25cmの高さまで6cm~13cm大の川原石が詰め込まれていた。そして、川原石の上面に30数cm大の備前焼の甕腹をかぶせ、その上に厚さ7cm前後の淡灰灰色粘土を充填し、土坑を密封していた。

土坑の中からは染付片が1点出土した。染付は、肥前系の鉢もしくは皿の底部で、見込

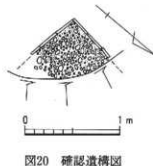


図20 確認遺構図

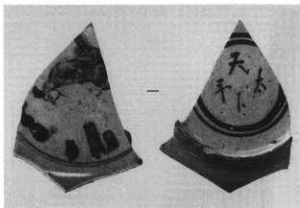


図21 出土染付磁器

みに人物画、底に「天下太平」の文字が書かれている（図21）。

土坑の性格などは不明であるが、その時期は土層や出土遺物から有岡城時代以前に遡るものではなく、江戸時代の中で捉えられる。

VI 第12次調査

・調査期間	1983年11月2日～11月14日		
・調査地	伊丹市宮ノ前2丁目193-7、195、196、197-1・2		
・調査原因	財団法人 柿衛文庫館建設		
・調査組織	有岡城跡発掘調査団		
調査団長	橋本 久		
調査主任	浅岡俊夫		
補助員	岸本兼英 (奈良大学)	浜口芳郎	和田秀寿 (龍谷大学) 村田正則

1. 調査方法

当調査地は、県道尼崎・池田線と県道空港線との交差点の西詰めに位置し、有岡城内の位置関係は惣構えの外郭（町家）中央部の北寄りにあたる。県道尼崎・池田線を挟んだ東側には、内郭（侍屋敷）と外郭とを区分した大溝筋と呼ばれた堀が南北に貫通していた考えられている。ところで、常盤町絵図や寛政8年伊丹細見図には、その大溝筋とは別に城内を区画したと思われる「大溝筋」が当調査地あたりを南北に横切っていたように描かれている。この大溝筋が前述の大溝筋と同じなのか、あるいは別に外郭を区画するものなのかなど、その実態の解明が急がれる。そこで、柿衛文庫館建設に伴って、この大溝筋の確認を中心とした

トレンチ調査を実施した。

トレンチは敷地に沿って2本の東西トレンチを、12mの間隔をおいて設定した。北側に設定したトレンチを第1トレンチ、南側のを第2トレンチとした。トレンチの規模は、第1トレンチが長さ34m、幅

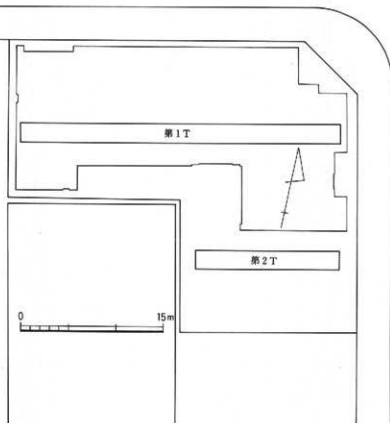


図22 第12次調査トレンチ配置図

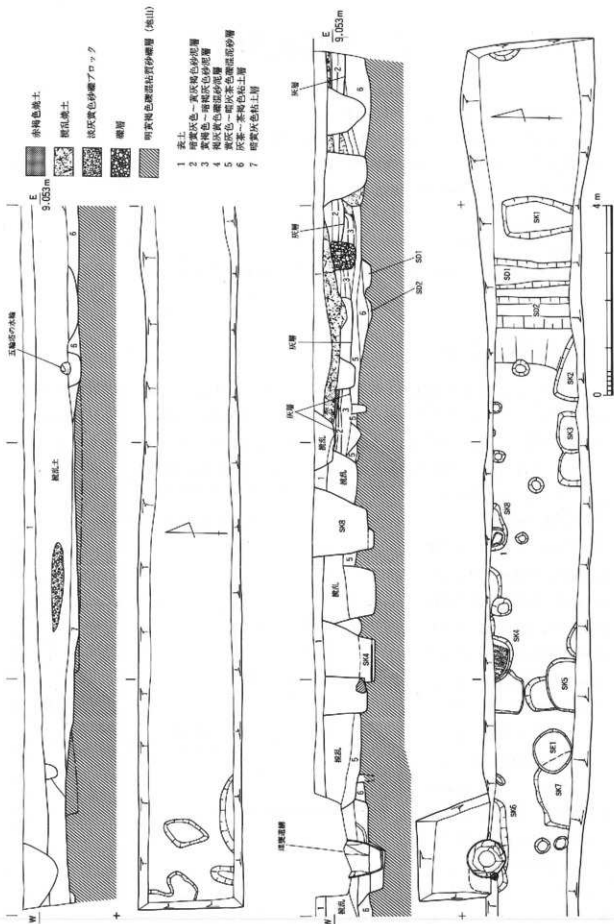


図23 第1トレンチ遺構平面図と土層断面図

2 mで、第2トレンチが長さ15m、幅2 mである(図22)。調査面積は97㎡。

調査は、建設工期の都合上、機械掘削にて地山直上まですき取りを行い、遺構検出は地山面にとどまった。そのため溝状遺構、土坑、ピット、井戸などの遺構を検出しながら、その性格や年代等を十分に検討することができず、満足のいく調査はできなかった。

2. 調査概要

(1) 土層 (図23・24)

土層は、調査地の東側と西側とで大きな違いが見られる。第1トレンチの東側には焼土層や灰層、焼土・炭化物混入土層が幾層にも重なっている。それに対し、西側は地山近くまで攪乱層が広がっている。このような状況は、第2トレンチでも同様である。そして、こうした土層のあり方は、遺構のあり方にも反映されており、遺構はトレンチの東半分集中しており、よく符合している。

(2) 主な検出遺構 (図23・24)

当初予想していた大溝筋と呼ばれた水路もしくは堀跡に見合う遺構の検出はなく、当調査地内に存在しないことが判明した。また、有岡城時代の顕著な遺構の検出もなかった。しかし、第1トレンチの東端および第2トレンチで検出

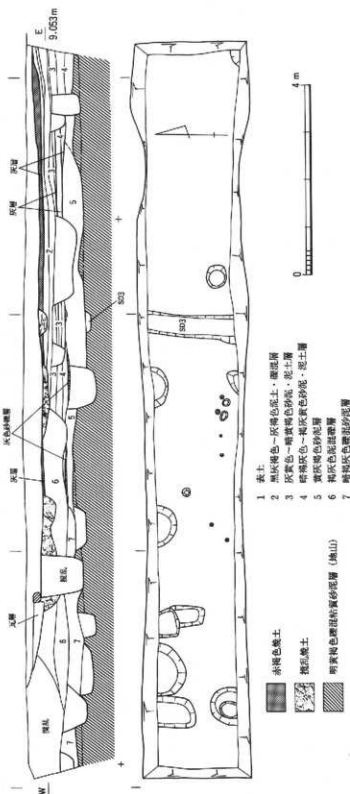


図24 第2トレンチ遺構平面図と土層断面図

した溝状遺構3本(SD-1・2・3)は、出土した土師器皿から16世紀に遡る可能性が高いものである。SD-1は幅45cm～60cm、深さ20cmをはかる。SD-2は幅60cm、深さ20cmをはかる。この2本の溝は20cmほどの間隔でもって南北に平行している。SD-3は幅45cm、深さ15cmほどである。その位置関係からSD-2に繋がるものと考えられる。

第1トレンチの中央北壁にかかって備前焼の埋甕遺構を検出した(図版5下・6)が、これを境にトレンチの東側と西側とでは遺構の分布に違いが認められる。埋甕遺構から東側には井戸(SE-1)や埋桶土坑(SK-4)など、土坑やピットが多く分布するが、西側にはほとんど顕著な遺構は見られない。これらの遺構は、江戸時代以降の町家に伴うもので、町家の建物が東側に片寄って建てられていたことが窺える。こうした遺構のあり方は第2トレンチでも同じである。

西側で確認した顕著な遺構としては、北壁断面で検出した五輪塔の水輪がある。水輪の下には直径約70cm、深さ20数cmの土坑が認められたが、水輪との関係などはよく分からない。

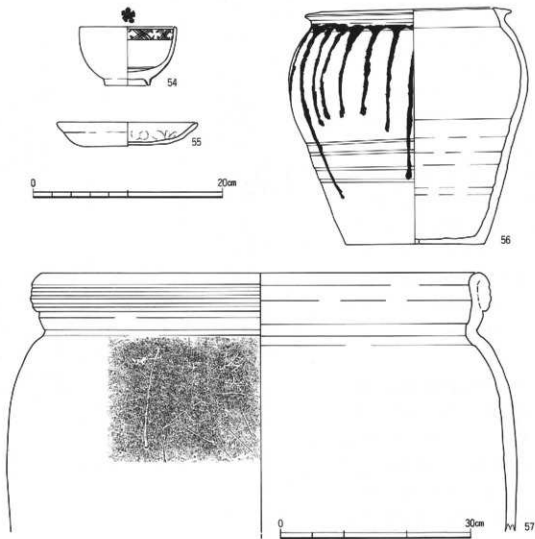


図25 出土遺物実測図

(3) 主な遺物 (図25)

54は、第2トレンチ出土の伊万里焼染付碗である。見込みに五弁花紋をあしらう。

55は、第1トレンチSK-1出土の土師器皿である。表面は白灰色を呈し、全体をナデ調整する。口縁部直下に強いナデ。内面底部付近に指頭痕が観察される。口径14.8cm、高さ2.5cm。

56は、第2トレンチ出土の丹波焼甕である。口縁端部を内外に拡張し、上端面を平滑に仕上げている。外面に鉄釉を施し、鉄釉を流し掛けする。口縁部から内面にかけては緑色の灰釉を施す。底部には砂目が6ヶ所ある。底部中央を径1cmほど穿孔しており、おそらく水琴窟として利用されていたものであろう。

57は、第1トレンチ検出の埋甕の上半部である。口縁部は玉縁に3条の凹線を施す。頸部は短く、肩部は撫で肩で、口径と胴部最大径との差は小さい。肩部に「捻土 御眺也 叶」と3行にわたって篋書きされ、細線篋書きの「△」印がある。甕の底からは寛永通宝を主とする銭貨が7～8枚出土した。江戸時代初期（慶長末年～元和年間）に作られたものであろう。

3. 小 結

今回の調査は、有岡城跡関係の遺構確認に主眼をおいたため、廃城後の伊丹郷町発展のもととなった江戸時代の遺構を系統的に発掘することはできなかった。しかし、当調査地の東半分には江戸時代に町家の建物が構えられていたことが明らかになった。そして、その建物は何回かの火災にあったことが土層の状況から判明した。記録によれば、元禄期に2度にわたって大火が発生し、町家の大部分を消失している。このたびの調査結果はそれに符合するものとして捉えられよう。

VII 第13次調査

- ・調査期間 1983年11月15日～11月24日
- ・調査地 伊丹市伊丹2丁目583-8 (大手児童遊園地)
- ・調査原因 史跡地内堀跡確認
- ・調査組織 有岡城跡発掘調査団
 - 調査団長 橋本 久
 - 調査主任 浅岡俊夫
 - 補助員 岸本兼英 (奈良大学) 和田秀寿 (龍谷大学)

1. 調査方法

伊丹城跡・有岡城跡発掘調査の第1次調査と第5次調査において主郭の南側を画する堀跡の面肩が確認されている。この堀跡は、江戸時代の絵地図に描かれた主郭を取り巻く内堀になり、

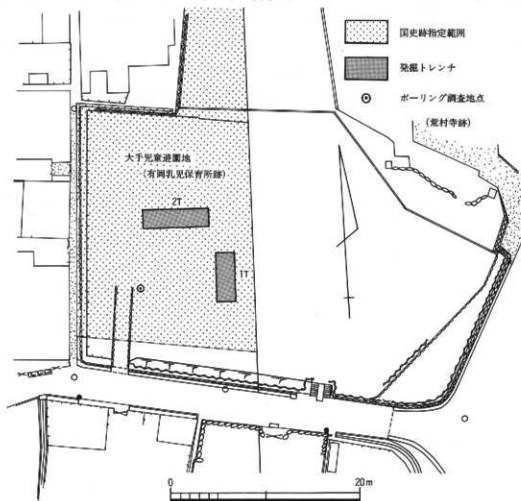


図26 第13次調査トレンチ配置およびボーリング地点図

主郭南西隅で直角に北に折れ曲がり、主郭西側を画して第10次調査で発掘した主郭北西隅の堀跡につながる一連のものとして推定される。この南西隅の屈曲部は周辺の状況などから大手児童遊園地（伊丹2丁目583-8）の史跡指定地内に求められる。そこで、史跡整備にあたり国庫補助金を得て、堀跡の南西隅内側の確認を目的とする調査を実施した。

発掘調査は、堀の屈曲部を有効に検出するためにL字形に2本のトレンチを設定した。トレンチは、南北方向を第1トレンチとし、東西方向を第2トレンチとした。規模は、第1トレンチが長さ6m、幅2mで、第2トレンチが長さ7m、幅2mである（図26、図版7上）。調査面積は24㎡。

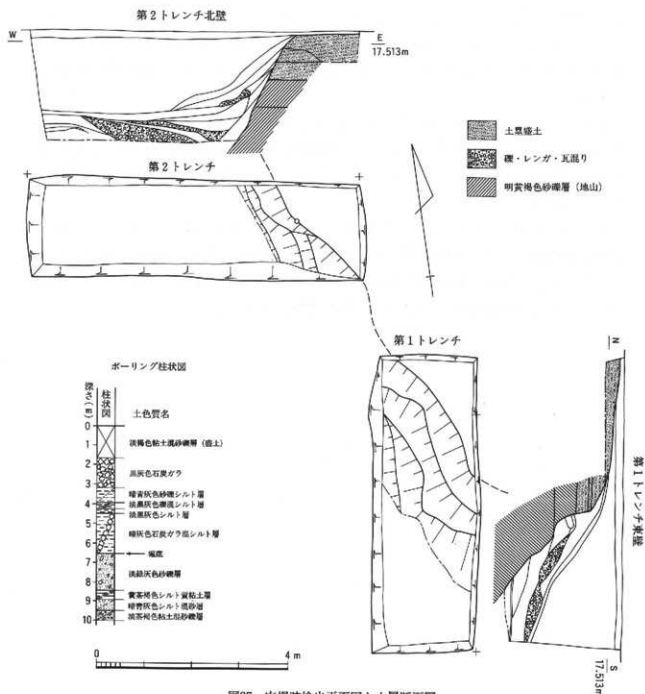


図27 内堀跡検出平面図と土層断面図

さらに、堀の内肩が確認できたところで、堀跡の推定中心部にボーリング調査を実施し、その深さを測定した。

2. 調査概要

調査の結果、南東から北西方向に走る堀肩の線を検出した(図27)。その屈曲角度は、絵地図などからはほぼ直角に折れ曲がるものと推定していたが、予想に反して隅切り状の緩やかな曲線を描いて折れ曲がっていた。

堀の法勾配は、深さ2.4mまで発掘した範囲内で、第1トレンチ東壁で約47度、第2トレンチ北壁で約64度をはかり、第1トレンチでの肩口の崩れが大きいことが窺えた(図版7下・8)。

土塁の残存については、地山から90cmの厚みで土塁盛土が確認された。土塁の積み方は第1トレンチにおいて版築を認めたが、本調査では断ち割をしなかったので詳細は将来の課題として残る。

堀の深さについては、堀の推定中央部に深度10mのボーリングを行なった。ボーリングは、低速ロータリー式ハンドフィード型ボーリング機械を使用し、掘進は無水掘りとした。標準貫入試験はJIS A 1219に従い、9回実施した。その結果、堀底の深さは地表下約6.5m(標高11.94m)の数値が得られた(図28)。

なお、古老の聞き取りによると、この堀は大正11年頃まで痕跡が残っていたが、その頃に大手児童遊園地のところに幼稚園が建てられ、その際堀は埋め立てられて整地され現状のようになったとのこと。事実、堀跡は深さ約1.8mまで新しい埋立て土で覆われ、それ以下には瓦礫やコークスなどで徐々に埋め立てられてきた様子が観察された。

土質調査柱状図

調査名 有國鐵跡南西掘探跡(大寺町児童遊園地)

調査地区

試錐工法 Rotary boring & S. P. T

試錐水位 G L - m (5.65 m)

調査地点 No. 地盤高 OP+18.77 m

株式会社ソイルコンサルタンツ

調査期間 昭和58年 11月 27日 ~ 月 日

調査責任者 佐藤美明

標尺 (m)	標高 (m)	孔内水位 (m)	層厚 (m)	柱状図	色調	土質名	観察	試料		標準貫入試験		相対稠密度	電気探層結果、ベーン試験						
								試料番号	採取深度 (m)	深	N 値		10cm毎の打撃回数	V. T	S. P	P			
0																			
1	12.89	1.70	1.70	⊗		粘土混り砂礫 (盛土)	全体的に粘土混り砂礫 0.5~30mm の円礫 70% あり、20~100mm 程度の円礫 10%、10~20mm の砂礫 20%、2~40mm 間の石炭のガタ等 20%、20~40mm 間の石炭のガタ等 20% あり。	1P	2.51	2.87	2.87	3.46	1/2						
2	15.57	1.20	1.50	⊗		石灰	中砂ややぐら混りシルト	2P	3.49	3.65	3.65	3.65	1/1						
3	14.94	3.65	0.65	⊗		暗青灰色 砂混りシルト	暗青灰色 砂混りシルト	3P	4.46	4.62	4.62	5.1	1/3						
4	15.34	4.05	0.40	⊗		黄褐色 砂混りシルト	黄褐色 砂混りシルト	4P	5.46	5.62	5.62	6	1/1						
5	16.37	4.80	0.76	⊗		黒灰色 砂混りシルト	黒灰色 砂混りシルト	5P	6.48	6.64	6.64	5.3	1/1						
6	12.84	6.53	1.80	⊗		石灰	石灰	6P	7.45	7.61	7.61	28	10/10						
7	10.34	8.45	1.90	⊗		黄褐色 砂	0.2~0.5mm の円礫 70% の花崗岩の礫混在	7P	8.45	8.61	8.61	19	7/8						
8	9.84	8.95	0.50	⊗		暗青灰色 砂混りシルト	全体的にシルトが中心で、上部に砂が多少混在	8P	9.47	9.63	9.63	32	12/3						
9	9.77	9.50	0.23	⊗		黄褐色 砂混りシルト	黄褐色 砂混りシルト	9P	9.95	10.11	10.11	40	11/7						
10	6.77	10.00	0.50	⊗		黄褐色 砂混りシルト	黄褐色 砂混りシルト												

図28 ホーリング調査柱状図

VIII 第14次調査

・調査期間	1984年9月21日～10月1日
・調査地	伊丹市伊丹5丁目620
・調査原因	高層住宅建設
・調査組織	有岡城跡発掘調査団
調査団長	橋本 久
調査主任	浅岡俊夫
補助員	内田好昭 岸本兼英(以上奈良大学) 和田秀寿(龍谷大学) 三輪隆子(主婦)

1. 調査方法

当調査地は、主郭の南250mに位置し、大溝筋で区画された内郭(侍屋敷)の一面にあたる。敷地は南北約22m、東西約20mの方形を呈し、面積は436㎡である。マンション建設に先立ち確認のトレンチ調査を行った。

トレンチは、幅2mで十字に設定した。南北トレンチの長さは20mで、第1(N)トレンチ、第1(S)トレンチに2分した。東西トレンチも同様に第2(E)トレンチ、第2(W)トレンチとし、長さは18.5mである。遺構が密に検出された第1(N)トレンチでは東拡張区を設け、第1(N)トレンチ東拡張区とした(図29、図版9上)。調査面積は81㎡である。

2. 調査概要

(1) 土層(図30)

基本土層は、表土(第1・2層)、淡灰黄色砂泥層(第3層)、地山(第8・9層)になり、北から南へ緩やかに傾斜する地形を呈している。第2(E)トレンチでは第3層と地山の間に暗褐色粘土層(第4層)がはさまっている。また、第2(W)トレンチ東端から第1(S)トレンチにかけての地山上に褐色砂礫土層(第7層)が大きな落ち込み状に間層としてはいる。この褐色砂礫土層は、15～16世紀の瓦器・土師器・瓦などが包含し、城跡に関係する整地層と考えられる。

第3層の淡灰黄色砂泥層は、伊万里焼や丹波焼等の出土遺物および水琴窟遺構との関係から、江戸時代中頃～後期にかけての整地層として捉えられる。

(2) 主な検出遺構

第1(N)トレンチ、同拡張区、第2(E)(W)トレンチから溝状遺構、井戸、土坑、ピツ

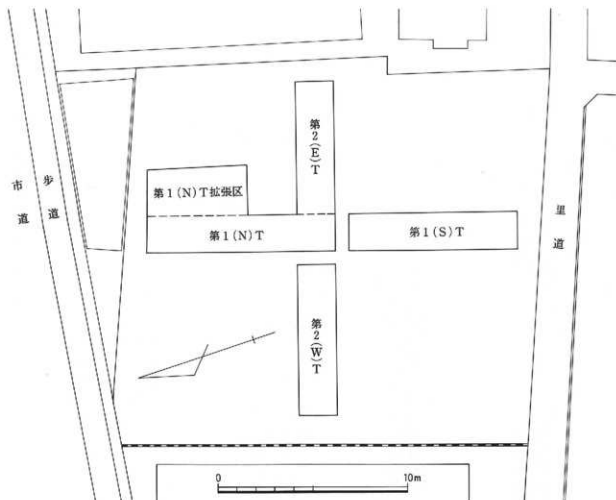


図29 第14次調査トレンチ配置図

トなどを検出した(図31)。しかし、第1(S)トレンチでは顕著な遺構の検出はなかった。それらの遺構は表2に一覧する。

SD-1

第1(N)トレンチの北側で検出した溝状遺構である。南北方向から西方へ隅丸形状に曲がる。幅は40cm~100cm、深さは10cm~15cmをはかる。北側は別の溝SD-2や土坑が切り合っており、さらに木の根で攪乱されている。埋土は暗褐色を呈し、強い有機分を含む。遺物は、土師器高杯や甕などを多数包含するが、風化が著しく残存状況は甚だ悪い。古墳時代前期、布留式に比定される。

SD-2

第1(N)東拡張区で検出した幅25cm~45cm、深さ10cmの溝状遺構。南北方向に走り、検出長は約4mである。瓦器、土師器などが少量出土。

SD-3

第1(N)トレンチ、同東拡張区で検出したT字状を呈する溝状遺構である。南北方向の溝は、幅40cm~80cmで、南すはまりである。東西溝は幅約100cmをはかる。深さは15cmほどである。南北溝の底からはほぼ1.6mの間隔をもって並ぶピットを3本検出した。ピットの直径は約

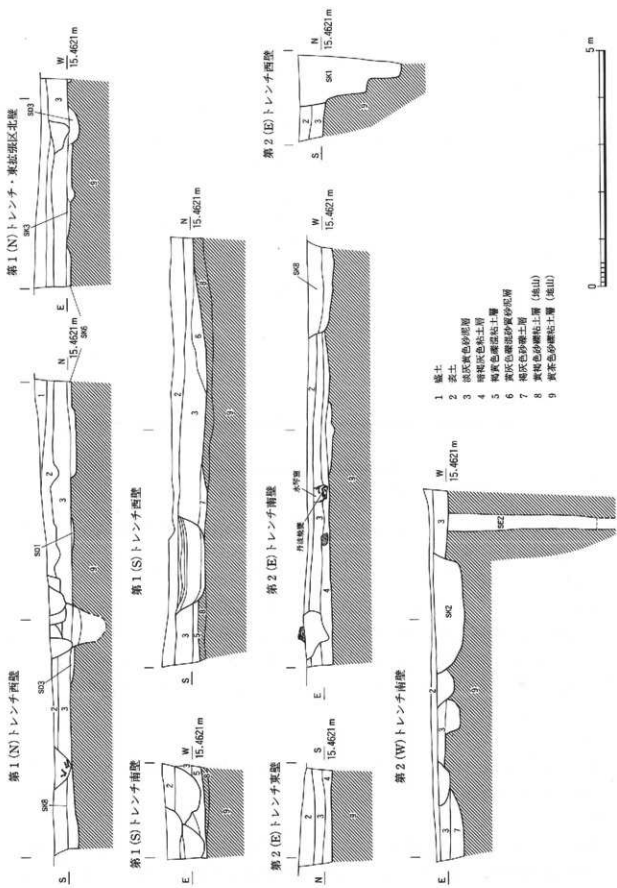


図30 各トレンチ土層断面図

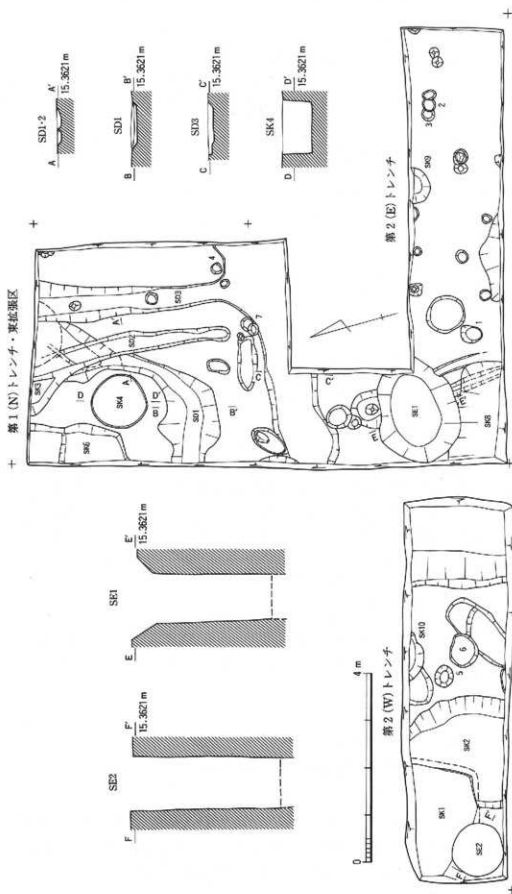


図31 検出遺構平面図と主要遺構断面図

表2 第14次調査検出の井戸・溝・土坑・ビット遺構一覧

遺構番号	地区	形状	大きさ (cm)	深さ (cm)	主な出土遺物	時代	備考
SE-1	1T(N)	円形	222×174	(294)	土師質土器、須恵器、須恵質控鉢、瓦質火舎、信楽播鉢、丹波、備前並・斐播鉢、鉄輪陶器、染付、天日碗、青磁皿、瀬戸皿、瓦、砥石、硯、石臼、一石五輪塔(空風輪)	16c	伊丹廃止の櫓子目タキ・蔵目タキ瓦
SE-2	1T(W)	円形	112×105	(316)	丹波甕、鉄輪陶器鍋、焙烙、硯、土人形	江戸後期	
SD-1	1T(N) 東拡張区		幅102	10	土師器	布留式	
SD-2	1T(N) 東拡張区		幅46	10	土師器、瓦器、瓦	15c～	
SD-3	1T(N) 東拡張区		幅73	14	土師器皿、瓦器、丹波焼	15cか	
SK-1	1T(W)		228×124	215		現代	ゴミ捨土坑
SK-2	1T(W)	不定形	235×196	61	土師器皿、瓦器皿、土師質火舎、瓦質羽釜、陶質火入れ、鉄輪土鍋、焙烙	江戸時代	ゴミ捨土坑
SK-3	1T(N) 東拡張区				土師器皿、須恵器壺、焙烙		
SK-4	1T(N) 東拡張区	円形	117×113	59			
SK-6	1T(N) 東拡張区		211×83	19.5	瓦質火舎、丹波焼、染付、三島唐津鉢	江戸後期	
SK-8	2T(E)	方形か	210×98	55	陶質火入れ、備前播鉢、鉄輪陶器壺、灰輪陶器、染付、瓦	江戸後期	
SK-9	2T(E)	円形	75×-	48.5	染付、瓦	江戸	
SK-10	1T(W)	不定形	102×31	43	灰輪陶器、染付、瓦	江戸	瓦溜めか
SP-1	2T(E)	隅丸方形	44×35	33.5	丹波焼	16c	
SP-2	2T(E)	円形	28×-	19.5	瓦器、青白磁	15c～	
SP-3	2T(E)	円形	27×-	17.5	土師器、瓦器	15c～	
SP-4	1T(N) 東拡張区	円形	23×22	19	土師質土器	16cか	
SP-5	1T(W)	円形	44×38	13	土師器皿	16cか	
SP-6	1T(W)	不定形	70×58	10	土師質土器、備前播鉢、瓦	江戸後期	
SP-7	1T(N) 東拡張区	円形	26×24	6.5	土師質土器、須恵質控鉢	15c～	

深さの()は発掘深さ

25cmである。溝とビットとの関連ははっきりしない。

遺物は土師器皿、瓦器皿、丹波焼陶器などが少量出土した。

SE-1

調査地の中央部で検出した井戸で、上部径170cm×230cmの楕円形を呈す。井戸枠等はなく、素掘りである。本来の井戸径は150cmほどに推定される。井戸の南側に排水用と思われる浅い溝を2本検出したが、その関連は不明である。井戸壁は袋状に抉れて落ちており、3mほど掘り下げたところで発掘を断念した。

遺物は15～16世紀代の備前焼、丹波焼、土師器、瓦質土器などが多数出土し、廃城時もしくは江戸時代の早い時期に埋め立てられたものと思われる。

SE-2

第2(W)トレンチの西端から検出した素掘りの井戸である。直径110cmをはかる。江戸時代の伊万里焼、備前焼、丹波焼、泥人形、硯などが出土し、18世紀頃に廃棄されたと思われる。

伏せ甕遺構 (図32、図版9下)

第2(E)トレンチの南壁断面で確認した遺構である。第3

層から穿たれた直径30cm、深さ28cmほどの土坑に丹波焼甕を伏せて埋設したものである。甕の底には小孔が開けられており、中に5cm大から7～8cm大の川原石を数個入れて、空洞にしていた。同様の遺構は第12次調査でも確認されており、水琴窟に考えられる。

土坑

10基余りの土坑を検出したが、すべて江戸時代～現代のもので、城跡に関連するものはなかった。

ビット

多数のビットを検出した。中にはビット内に石が入れられたものもあるが、建物の柱柱になるものはない。SD-3の溝底から検出したビット3つは1.6m前後の間隔で南北に並ぶ柵列の可能性が高い。

(3) 主な出土遺物

SE-1 出土遺物 (図33 58～77、図34 80～105)

58～60は丹波焼の壺である。口縁は大きく外反して開く。外面には自然釉がかかる。60の頸部にはカキ目が見られる。

61の口縁部は、頸部が垂直に立ち上がり、口縁端部が水平に開く。表面は淡茶灰色、器胎は灰白色を呈し、長石の含有量が多い。信楽焼の壺にならう。

62～66は備前焼の壺類である。62の口縁には片口がつくと思われる。63は徳利の口頸部で、△のヘラ記号がある。65は無頸壺で、66は二環壺にならう。

67・68は備前焼甕の口縁部で、67は間壁編年のIVb期、68はV期に比定される。69・70は小甕もしくは壺の底部である。71は丹波焼の甕の体部下半である。

72・73・77は備前焼の播鉢である。72はIV a期、73はV期に比定される。77の内面には7本単位の条線が施され、底部よりも体部でよく擦り込まれて条線が薄くなっている。

74は丹波焼の播鉢である。器体は口縁部まで直線的に外傾して立ち上がり、口縁部に強いナデを施し、浅い凹線がめぐる。内面にはヘラ先による条線が1本ずつ刻まれる。

75は信楽焼の播鉢と思われる。大粒の長石等を多く含む。内面には5条単位の播り目が施さ

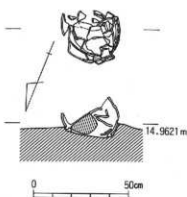


図32 伏せ甕遺構実測図

れる。外面には煤が付着する。

76は東播系須恵器の掬鉢の底部である。

80～87は土師器の皿である。80は底部が窪み、ヘソ皿の系統を引く。80～84は直径が8cm以内の小皿に、85～87は10cm前後の中皿に分けられる。

88は瓦質土器の羽釜の罎部である。89は瓦質土器の茶釜である。

90～93は瓦質土器の火舎の口縁部である。火舎はつぎの3種類に分けられる。その1は、90の薄手で、筒状のもの。その2は、91・92の蓋受けがあり、体部上半部に円形の透かしをもつもの。その3は、93の口縁部に二条の突帯をめぐらし、突帯間にへうで唐草紋をあしらったと思われる彫刻紋様のあるもの。94は火舎の底部である。

95・96は瀬戸焼の灰釉皿で、大小に分けられる。

97は青磁の段皿である。腰部に稜をもち、口縁部が外反する。発色がよく、全面に細かな貫入が見られる。

98～100は瀬戸・美濃製の天目碗である。

101は瓦質の乗燭である。全体の3/4以上を欠損しており全容はつかみにくいが、中央に燭台がつき、周囲の1/4ほどに背がつく。一部に背の取り付けの痕跡が認められる。外周には蓋受けが巡り、蓋と組合わさることが窺える。蓋は出土していないが、蓋の一方に明かり取りの透かし窓があるものと思われる。あまり出土例が無く、時期の限定は難しいが、16世紀後半以降に考えられている。

102は鉄釉の土瓶になろう。

103は軒平瓦で、均等唐草紋を浮き出させる。

104は砂岩製の石臼である。105は花崗岩製の一石五輪塔の空・風輪である。

SE-2 出土遺物 (図33 78・79、図35 106～123)

78・79は堺焼きの播鉢である。7本単位の播り目を密に施す。79には低い高台が造り出されている。

106～112は肥前系の染付碗・鉢である。107は新渡写し花紋をあしらう。108～110の見込みに五弁花紋を描く。108の底部高台内には二重角渦福、111の底部高台内には角福の銘款を有する。112は外面に唐草紋、内面に草花紋を描く。

113は黄褐色の釉を施した碗、114は刷毛目唐津の碗である。115は口縁部を内側に拡張しており、青磁の香炉になろう。

116は鉄釉を施した薄手の筒形陶器である。鉄釉は内面が薄く、外面が厚く施されている。

117・118は鉄釉の鍋で、小型と大型の組み合わせになろう。

119～121は土師質の焙烙である。119は、口縁部が三角に拡張し、鉢形の形状を呈す。

120・121は薄い平底から口縁部が肥厚してほぼ垂直に立ち上がる形式になる。

122は丹波焼甕の底部である。

123は着物姿の女性の泥人形である。首から上を欠損する。素焼きである。

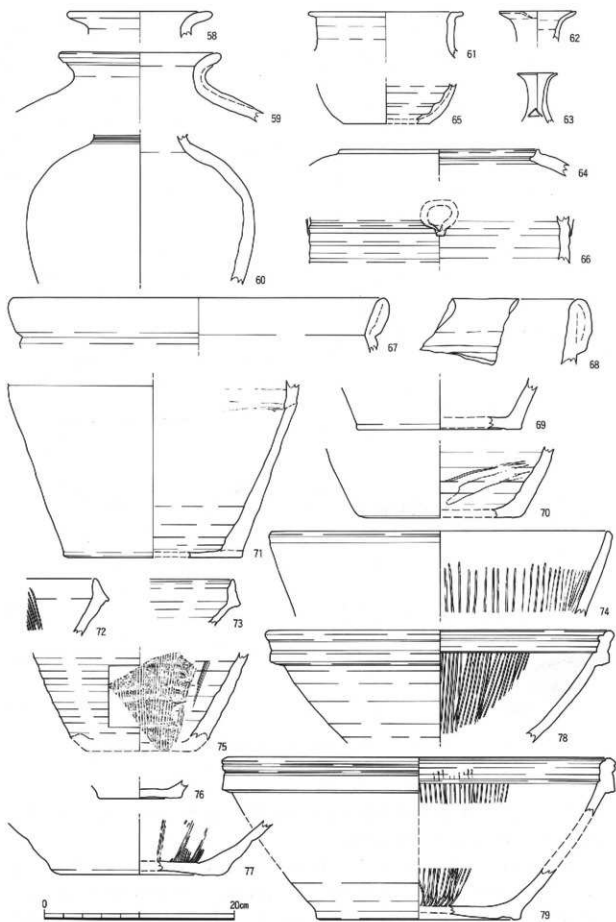


図33 SE-1 (58~77)、SE-2 (78・79) 出土遺物実測図

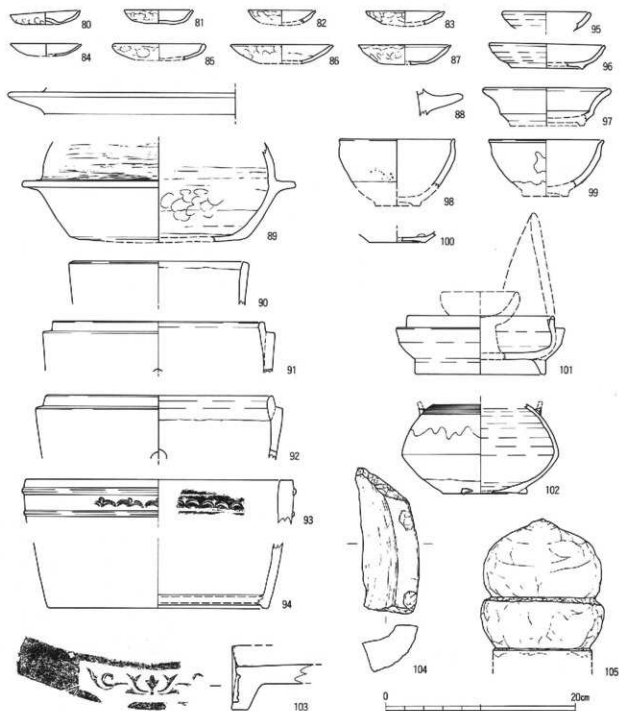


図34 SE-1出土遺物実測図

SK-1・2・6出土遺物(図35 124~135)

124は、SK-1出土の青磁染付の碗である。口縁部内面に菱形紋、見込みに花紋をあしらい、底部高台内には二重角渦福の銘歌を有す。

125~134はSK-2出土である。125は染付碗の底部で、見込みには蛇の目の軸刺ぎがある。126はやや肉厚の染付碗で、外面に草花紋を施す。127は青磁染付の筒形湯飲み茶碗である。128は染付皿で、見込みには蛇の目の軸刺ぎがある。129・130は土師器皿で、口縁端部に煤が付着し

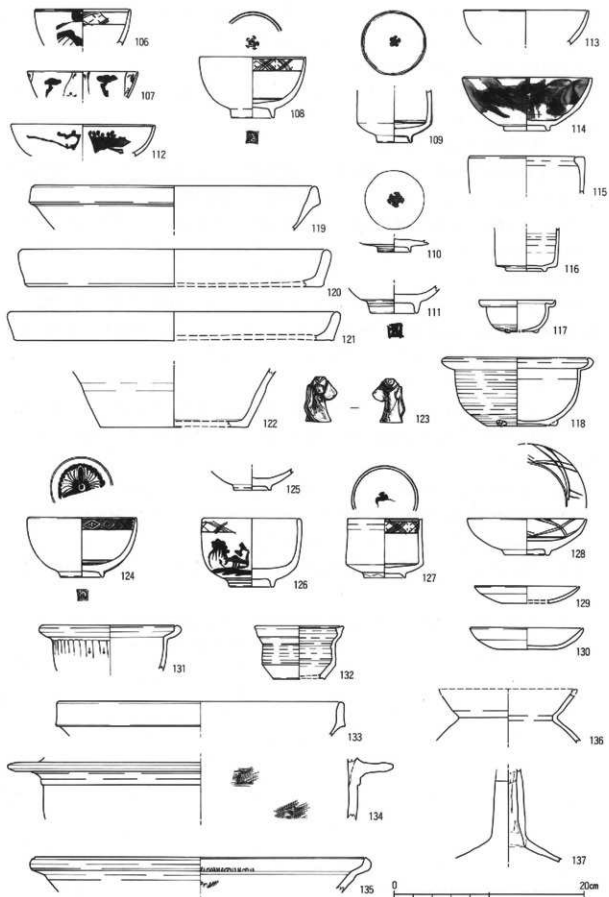


図35 SE-1 (106~123)、SK-1・2・6 (124~135)、SD-1 (136・137) 出土遺物実測図

ており、灯明皿として使用されたものである。131は鉄軸の鍋で、体部上半に指状のもので上から下へなでつけた連続した筋目を付す。132は瓦質の香炉である。133は土師質の焙烙である。134は瓦質の羽釜で、罌下に煤が付着する。

135はSK-6出土の唐津焼の鉢である。内面にはスタンプ紋が象嵌されるが、不鮮明である。上薬の塗布も非常に薄い。

SD-1 出土遺物 (図35 136・137)

136は布留式甕の口頸部である。頸部はくの字に屈曲する。口縁端部を欠くが、内側に拡張し、胴部は球形になるものと思われる。表面摩耗激しく、調整等不明。

137は古式土師器の高杯の脚部である。筒状の脚注部から裾部が大きくハの字に開く。内外面に丹塗りの痕跡が認められる。

伏せ甕 (図36 138)

138は丹波焼甕である。器高よりも胴部の最大径の方が大きい。体部上半にカキ目が施され、全体に施釉されるが、口縁部周辺に釉の行き届かない部分が見られる。底部中央に直径1cmほどの穿孔があり、伏せて水琴窟として利用されたものと思われる。

包含層出土遺物 (図36 139~146)

139~141は土師器の小皿である。139は口縁部と体部の境に段状の沈線がめぐる。第2(W)トレンチ第7層出土。140は手捏ね土器で、第2(E)トレンチ第2層出土。141はへソ皿になり、第3層出土。

142は土師器の中皿で、形態は141と同じである。第1(S)トレンチ地山直上出土。

143は土師器碗である。口縁部がやや肥厚する。第2(W)トレンチ第7層出土。

144は瓦器碗で、第1(S)トレンチ地山直上出土。

145は土師質の火舎になろう。口縁部は内傾し、端部を内側に拡張させて上端面を作る。第2(W)トレンチ出土。

146は備前焼の小壺の体部である。第1(S)トレンチ第3層出土。

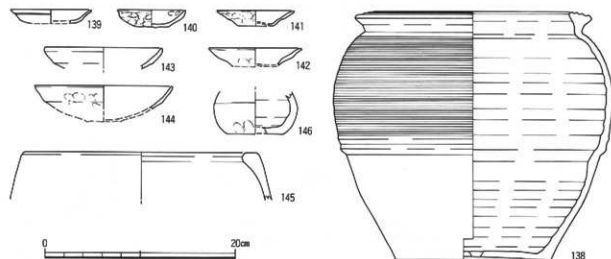


図36 包含層出土遺物実測図

3. 小 結

①第1 (N) トレンチで検出したSD-1は、布留式土器が出土し古墳時代前期の遺構である。溝は隅丸方形を呈し、古墳または周溝墓の周濠の可能性が高いが、遺構・遺物共に残存状態が悪く、断定することはできない。また、これとは別に少量ではあるが、古墳時代後期の須恵器も出土している。

第1次調査、第5次調査でも古墳に関係した埴輪や須恵器、土師器が検出されており、城域内全体に古墳時代の遺構が分布していたことを推測せしめる。

②伊丹城から岡城への変遷は、大きく3期に分けて捉えることができる。I期は伊多美武者所の設置から城としての機能を備えるに至った時期。II期は戦国時代の度重なる戦乱の中で、より強固に城塞化し、外構えが形成される時期。III期は惣構えの完成すなわち岡城の時期である。

そのうちII期は、応仁の乱以後の15世紀後半～16世紀にあたり、この時期に主郭を取り巻く曲輪が拡大され、外構えが形成されたと考えられる。今回出土した遺物の中に、15世紀後半まで遡る土師器、瓦器、備前焼、丹波焼等がかなり含まれていることは、II期の段階にこの地域が外構えに取り込まれたことを物語っているといえよう。

③15世紀から16世紀にかけての時期の備前焼と丹波焼との比率は、丹波焼が備前焼に比べて1/3程度しか出土しない特徴が見られる。

④甕の底に小孔を穿ち、中を空洞に伏せて埋める伏せ甕遺構は、第12次調査でも確認されており、他の類例からも江戸時代後半に集中しているようである。その性格については、最近話題となっている水琴窟の可能性を指摘できる。

水琴窟とは、家の庭先や縁先、あるいは手水鉢の下あたりに底に小孔を穿った甕を伏せて埋め、手水や雨水の水滴が小孔から甕の中に落ち込んだ際、その中にたまった水に跳ね返り、甕に反響した音を楽しむものである。

江戸時代、伊丹は酒造りの町として栄えた。その隆盛期は前後2時期ある。第1期は元禄時代を中心とし、第2期は18世紀末～19世紀にかけての文化・文政期である。そうした繁栄が多くの文化人を伊丹へ呼び寄せたし、多くの文人を輩出させた。水琴窟は、こうした時代の風流を尊んだ遊び心が作らせたといえよう。水琴窟を発掘した折には、風流を楽しんだ江戸時代人の心意気が伝わってくるようである。

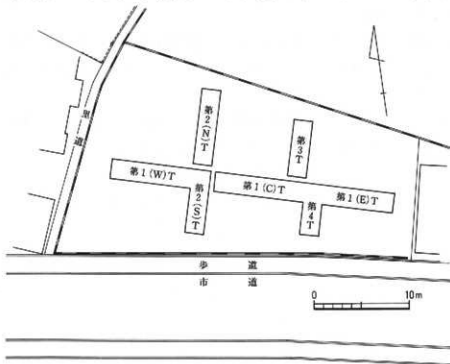
Ⅸ 第15次調査

・調査期間	1984年10月5日～10月20日
・調査地	伊丹市伊丹3丁目621-1
・調査原因	高層住宅建設
・調査組織	有岡城跡発掘調査団
調査団長	橋本 久
調査主任	浅岡俊夫
補助員	内田好昭 岸本兼英(以上奈良大学) 和田秀寿(龍谷大学) 三輪隆子(主婦)

1. 調査方法

当調査地は、第14次調査地の道路を隔てた北隣にあたり、大溝筋で区画された内部に位置する。そこでマンション建設に先立ち遺構確認のトレンチ調査を行った(図版10上)。

トレンチの設定にあたっては、敷地が東西に長い台形状を呈するため、東西に主トレンチを1本設定し、それに直行する南北トレンチを設定した。東西トレンチの長さは30mで、これを第1トレンチとした。第1トレンチは10mごとに区切って3等分し、東から第1(E)・(C)・(W)トレンチとした。南北トレンチは、第1トレンチの10mの区切りから派生させ第2(N)・



(S)トレンチ、第3トレンチ、第4トレンチと命名した(図37)。トレンチの長さは、第2(N)トレンチが8m、第2(S)トレンチが4.5m、第3トレンチが6m、第4トレンチが3.5mである。トレンチの幅はすべて2mである。調査面積は敷地面積634㎡に対し103㎡である。

図37 第15次調査トレンチ配置図

2. 調査概要

(1) 土 層 (図38)

敷地内は全面に厚さ30cm～50cmの盛土がなされており、その直下が旧地表になる。基本土層は、盛土を第1層とし、第2層が黒灰色砂泥層、第3層が灰茶色砂泥層となり、その下が地山である。敷地の中央から西側では地山と第3層の間に褐灰色系の間層(第4・5層)が入る。この第4・5層は厚いところで15cmほどで、15世紀末頃の土師器皿、瓦質土器、灰釉陶器および古墳時代の須恵器が出土している。

(2) 主な検出遺構 (図39)

主な遺構には溝状遺構3本の他に土坑、柱穴ピットがある。それらは表3に一覧する。また先の戦争に伴う防空壕も検出した。

SD-1

第2(N)トレンチの北端で検出した東西方向に走る溝である(図版10下)。幅は110cm～130cm、深さは40cmをはかる。土師質土器、瓦質土器、備前焼、丹波焼、施釉陶器が出土。15～16世紀に比定される。

SD-2

第2(S)トレンチの南端で検出した溝状遺構である。北東から南西方向に伸びる。幅は約100cm、深さは20cmほどである。溝の北東側は土坑などで切られているが、それを延長するとSD-1に直交する関係にあり、区画溝としての可能性が指摘できる。出土遺物は少ないが、瓦質土器鍋、土師器皿があり、SD-1と同時期に捉えられる。

SD-3

第1(C)トレンチで検出した溝状遺構で、トレンチの中央から緩やかに弧を描いてトレンチの外へ伸びる。幅は約50cm、深さ6～7cmである。青磁碗、土師器小片が出土。

土 坑

多数の土坑を検出したが、大部分は出土遺物も少なく性格が不明なものである。出土遺物から伊丹城・有岡城時代に考えられるのは、SK-1・2・10・12・13・14・15・16・17の9基である。つぎに主な土坑の概要を記しておく。

SK-1、SK-2は第1(W)トレンチの西端で検出し、切り合い関係にある。SK-1は円形、SK-2は矩形を呈すようであるが、どちらもトレンチ外に伸びており全容は不明である。出土遺物から15～16世紀に比定される。

SK-5(図40)は第2(S)トレンチで検出した土坑で、西側がトレンチ外に、東側が近代のゴミ捨て土坑で切られているため全容は不詳であるが、楕円形平面を呈すものと思われる。規模は短径1.4m、深さ50cmをはかる。染付などの陶磁器など(図41 165～185)が投棄されており、江戸時代後期のゴミ捨て土坑になる。

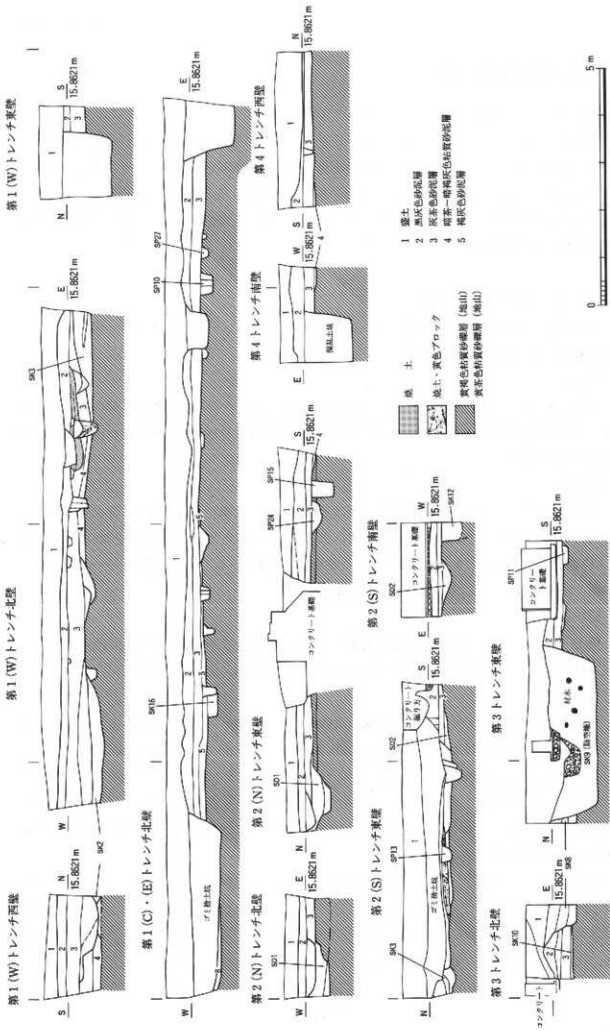


図38 各トレンチ上層断面図

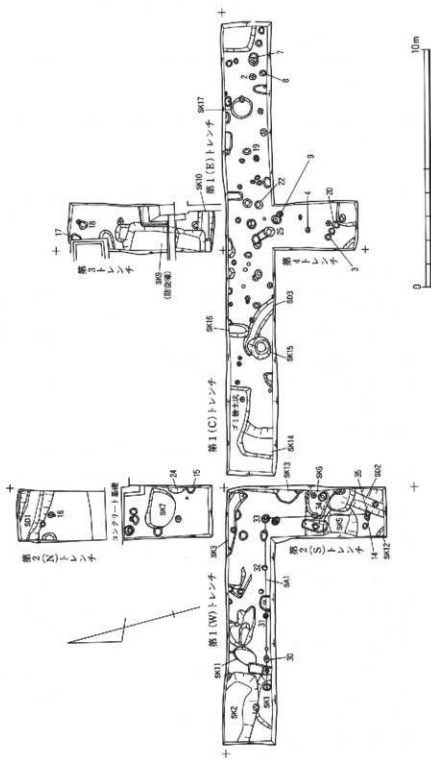


図39 検出遺構展開図

表3 第15次調査検出の溝・土坑・ピット遺構一覧

遺構番号	地区	形状	大きさ (cm)	深さ (cm)	主な出土遺物	時代	備考
SD-1	2T(N)		幅130	38	土師器皿、土師質土器、土師質火舎、 瓦質土器、丹波塗・播鉢、備前壺・甕、 施釉陶器	16c	
SD-2	2T(S)		幅110	20	土師器皿、瓦質鍋	16c	
SD-3	1T(C)		幅55	12	土師器皿、青磁碗	16c	
SK-1	1T(W)	楕円形	227×68	22	土師質土器、土師質火舎、瓦質羽釜、 瓦当	15~16c	
SK-2	1T(W)	楕円形	291×139	22	備前播鉢(V期)、須恵質瓦(縄目・布 目の薄手)、瓦	15~16c	
SK-3	1T(W)・ 2T(S)	不定形	244×57	55	土師質播鉢、瓦	江戸	
SK-4	2T(S)	楕円形	108×50	13	土師質火舎、染付、瓦	江戸後期	ゴミ捨土坑
SK-5	2T(S)	不定形	111×143	50	土師質塩壺、陶質土鍋、丹波壺、備前 播鉢、陶灯明皿受、鉄胎陶器、染付、 瓦	江戸末期	ゴミ捨土坑
SK-6	2T(S)	不定形	119×98	26.5	土師器皿、土師質火舎、信楽甕、瓦		ゴミ捨土坑
SK-7	2T(N)	不定形	167×112	12.5	一石五輪塔(空風輪)	近世か	石溜遺構
SK-8	3T			20	備前甕、染付	近代	
SK-9	3T	方形か		54.5		現代	防空壕
SK-10	3T	溝状	117×60	13	土師器皿、備前焼	16c	溝か
SK-11	1T(W)	楕円形	103×53	14	土師器皿	16c	
SK-12	2T(S)				土師質土器		
SK-13	2T(S)	不定形	100×56	3			
SK-14	1T(C)			33	土師器皿、土師質羽釜	16c	
SK-15	1T(C)	隅丸方形	97×87	23	土師器皿、土師質土器、須恵器控鉢、 銭貨	15~16c	「乾元重宝」 他
SK-16	1T(C)	楕円形	84×56	24.5	土師器皿	16cか	
SK-17	1T(E)	円形	90×87	36.5	須恵器、埴輪か	古墳	
SP-1	1T(E)	不定形	33×25	17	土師器皿	16c	
SP-2	1T(E)	円形	27×25	22	瓦器碗	15c	
SP-3	4T	隅丸方形	27×27	18	土師器皿、須恵器	15~16c	
SP-4	4T	不定形	23×18	18	土師器皿	16c	
SP-5	4T	隅丸方形	38×34	17.5	瓦器碗	15~16c	
SP-6	1T(E)	隅丸方形	37×—	8.5	埴輪か、瓦器	15~16c	
SP-7	1T(E)	隅丸方形	35×—	18.5	土師器皿	16c	
SP-8	1T(E)	不定形	26×23	25	土師質土器、瓦器	15~16c	
SP-9	4T	隅丸方形	24×23	25.5	瓦器	15c	
SP-10	1T(E)		20×20	13	染付	江戸	
SP-11	1T(W)	不定形	33×30	18.5	土師器皿	16c	
SP-12	1T(W)	円形	19×19	17.5	土師器皿、須恵質土器	15c	

遺構番号	地区	形状	大きさ (cm)	深さ (cm)	主な出土遺物	時代	備考
SP-13	2T(S)	円形か	38×-	21	土師器皿、土師質土器(条線)	16cか	
SP-14	2T(S)	不定形	24×18	22	土師器皿	16c	
SP-15	2T(N)	不定形	35×25	47	土師器皿	16c	
SP-16	2T(N)	円形	26×24	13.5	瓦質火舎	16c	
SP-17	3T	不定形	41×25	11	青磁碗	16c	
SP-18	3T	不定形	35×33	29.5	土師器皿	16cか	
SP-19	1T(E)	不定形	25×21	27.5	土師器皿	16c	
SP-20	4T	不定形	31×26	23.5	土師質土器	16cか	
SP-21	1T(W)	楕円形	45×27	27	土師器皿、瓦器	15~16c	
SP-22	1T(E)	隅丸方形	32×31	44	土師器皿	16c	
SP-23	1T(E)	不定形	39×33	25	土師器皿	16c	
SP-24	2T(N)		73×-	22	土師質土器、焼土	16c	
SP-25	1T (C-E)	隅丸方形	44×37	29.5	土師器皿、瓦器	15~16c	
SP-26	1T(E)	不定形	27×19	31	土師器皿	16c	
SP-27	1T(E)	不定形	42×27	15	土師器皿	16c	
SP-28	2T(S)	不定形	28×25	7.5			
SP-29							
SP-30	1T(W)	不定形	27×22	29.5			
SP-31	1T(W)	円形	22×22	17.5			
SP-32	1T(W)	円形	23×21	31.5			
SP-33	1T(W)	隅丸方形	31×30	35			
SP-34	2T(S)	円形	26×25	10			
SP-35	2T(S)	不定形	23×21	16			

SK-7 (図40) は第2 (N) トレンチで検出した石溜土坑である。地上上で図化したため楕円形に見えるが、長さ1.7m、幅1.2mほどの矩形である。江戸時代に捉えられる。

SK-15 (図40) は、第1 (C) トレンチ中央部で検出した直径95cm、深さ25cmほどの円形土坑で、土坑の底から「乾元重宝」等の銭貨が4枚密着して出土した。土器類では須恵器埴鉢や土師器皿の細片が出土し、15世紀代の土坑になろう。

SK-17 (図40) は、第1 (E) トレンチの中央部で検出した直径90cm、深さ35cmの円形土坑である。古墳時代の須恵器と埴輪と思われる土師質土器片が1点ずつ出土した。土坑の時期、性格等は不明。

防空壕は第3 トレンチで検出した。防空壕の西側がトレンチ外になるため全容は不明であるが、おそらく平面形は矩形になろう。南北長3.3m、東西幅1m以上、深さ1mをはかり、東北端に出入口が取り付け。土層断面 (図38) には天井に架けられていた木材の落ち込みが数本認められた。

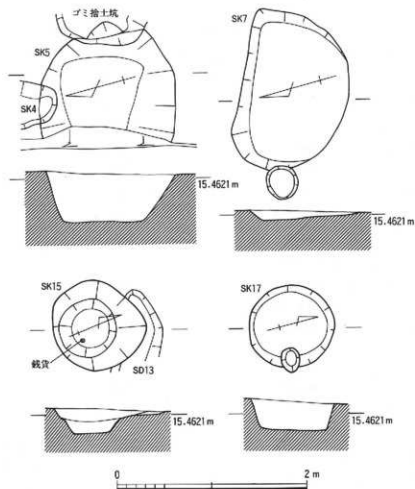


図40 主な土坑実測図

(3) 主な出土遺物 (図41・42)

土師器皿 (147~154)

ヘソ皿系のもと平底のものに分かれる。ヘソ皿は直径7cm~8cmの小皿(147~150)と10cm前後の中皿(151)がある。149は口縁部に1ヶ所煤が付着しており、灯明に使用されている。150は身が深く、底の突起が高くなるものと思われ、古相を呈す。147はSP-21出土、148~151は第1トレンチ包含層出土。

152は口径11.3cm、口縁部が肥厚して外反し、見込みに強いナデによる圏線が認められる。第2(S)トレンチ包含層出土。

153・154は底部と口縁部の境に稜線がめぐる。153の口縁部に1ヶ所煤が付着しており、灯明皿として使われている。第1(C)トレンチ出土。154は第1(C)トレンチSK-15出土。

瓦器・瓦質土器・土師質土器 (155~160)

155・156は瓦器碗である。155は底部を欠くが、体部下半に圏線状の細い稜線がめぐる。口縁部から内面は丁寧なナデ調整。第4トレンチSP-5出土。156は口縁部を欠くが、深みのある体部に形骸化した低平な貼りつけ高台が鉢巻き状に取り巻く。第1(E)トレンチSP-2出土。

157は土師質の火舎で、口縁部に壺受けがつく。端部のつくりはシャープで、外面をミガキ調

ビット

多数のビットの中には柱当たりの痕跡をもつもの、礎石らしき石のあるものがあるが、トレンチ調査では建物としての組み合わせをつかむことは困難であった。第1(W)トレンチと第2(S)トレンチで検出したSP-11・30~35はSP-33を軸にトレンチに沿って直角に柱通りをたどることができ、建物または柵列として捉えられるようである。柱間の間隔は2m~2.2mをはかるが、SP-11とSP-30の間隔は1.2mと狭い。建物とすれば底になろうか。SA-1とした。

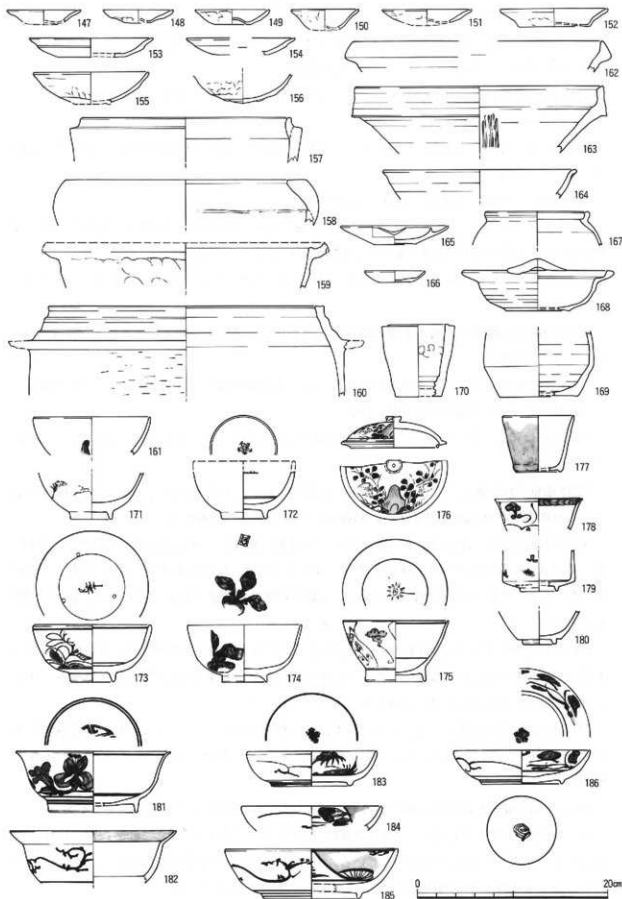


图41 出土遺物実測図(1)

整する。SK-1出土。

158は瓦質の火舎である。口縁部は内彎し水平な面を作る。外面は丁寧なミガキ調整を施し、黒漆の光沢をもつ。第1(C)トレンチ包含層出土。

159は瓦質の鍋で、端部を欠損するが、口縁が大きく外へ開き、蓋受けを形作る。第2(S)トレンチSD-2出土。

160は瓦質の羽釜で、鏝部を欠損する。口縁部は内傾し、強いナデ調整される。体部外面は横方向のケズリが施される。SK-1出土。

施釉陶器・須恵器・備前焼・青磁(161~164)

161は第2(N)トレンチから出土した施釉陶器である。精選された陶胎に、暗緑色の釉で口縁部内外面と体部外面に紋様を施すが、紋様構成ははっきりしない。

162は東播系須恵器捏鉢の口縁部である。口縁部は三角形を呈し、上方へ拡張する。第1(C)トレンチSK-15出土。

163は備前焼の播鉢で、6本単位の播り目が施される。間壁編年のV期にあたる。第1(W)トレンチ包含層出土。

164は青磁鉢の細片である。淡青色に発色する。中国製であろう。第3トレンチSP-17出土。

江戸時代の土器・陶磁器類(165~186)

165~185は第2(S)トレンチSK-5から出土したものである。186は第2(S)トレンチ第2層出土である。

165は施釉の灯明皿で、二重口縁を作る。内側の口縁に片口が切られている。166は柿釉の施された灯明皿で、底部系切りである。口縁部にわずかに煤が付着する。

167は口縁部内面に蓋受けのある壺である。口縁部に施釉し、外面は茶色に発色する。168は取っ手付鍋で、赤茶色を呈す。体部下半はヘラケズリされ、煤が付着する。169は丹波焼の徳利か、壺である。外面に茶褐色釉が施される。170は土師質の塩壺である。口縁上面に蓋受けの隆起がある。

171~175は伊万里系の染付碗である。172は見込みに五弁花紋、底部高台内に角満福の銘款がある。173は見込みに寿の銘款をもち、重ね焼きの目跡が3ヶ所見られる。174は見込みと外面にかぶら紋を、175は新渡写し花紋をあしらう。

176は伊万里系の染付鉢の蓋になり、外面に岩と秋草紋をあしらう。177は外面に藍色釉を塗布したそば猪口である。178は端反りの湯飲み碗で新渡写し花紋をあしらう。179は筒形湯飲み碗である。

180は白釉を施した湯飲み茶碗で、高台を削り出し、底部は露胎である。産地は不明。

181・182は伊万里系染付鉢で、181は草花紋、182は唐草紋をあしらう。182の口縁部内面には墨はじき(蠟抜き)技法が採用されている。183~186は伊万里系染付皿である。183・186の見込みには五弁花紋、186の底部壺付内には満福の銘款が施されている。

瓦(図42 187)

SK-1から出土した右巻き三つ巴紋の瓦当である。焼成は須恵質で、巴の尾は長く三重にめぐる。巴の周囲には珠紋をめぐらす。

五輪塔(図42 188)

花崗岩製の一石五輪塔の残欠である。空・風輪と火輪の上部が残る。第2(N)トレンチ出土。

銭貨(図42 189)

拓墨で示したのは、SK-15から4枚重ねて出土した内の1枚である。4枚の銭貨はこびりついて剥がせず、両側の2枚を解説した。1枚は図示した「乾元重宝」で、もう1枚は「元」「宝」の2字しか判読できなかった。「乾元重宝」は唐の銭貨で、初鑄年は758年である。

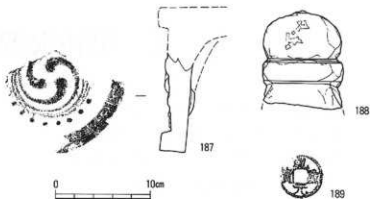


図42 出土遺物実測図(2)(銭貨は1/2)

3. 小 結

諸般の事情により全面調査におよばなかったが、SD-1・2のように城内を区画したと思われる溝をはじめ、15～16世紀の城関連遺構を確認した。その結果、第14次調査で確認した遺構ともあわせて、伊丹城の外構え形成時期や遺構を考える上で補強資料が得られたと確信する。

X 第16次調査

・調査期間	1984年11月19日～1985年3月31日
・調査地	伊丹市伊丹1丁目（史跡指定地内）
・調査原因	土塁石垣の再掘と写真測量図化
・調査組織	有岡城跡発掘調査団
調査団長	橋本 久
調査主任	浅岡俊夫
補助員	内田好昭 岸本兼英（以上奈良大学） 三輪隆子（主婦）
写真測量	国際航業株式会社

1. 調査目的

昭和51年度に有岡城跡第2次発掘調査で検出した主郭北西部の石垣遺構（図43）を有岡城跡保存整備事業の一環として、国庫補助金を得て再調査した。その目的は石垣の保存整備の手懸かりを得るため、前回の調査で発掘していなかった石垣の根石を検出し、その積み方や遺存状況を調べることで、そして、再発掘した石垣遺構を写真測量によって図化することにある。写真測量図の作成は国際航業株式会社に委託した。調査範囲は48㎡である。

2. 調査概要

(1) 石垣遺構（図44～47、図版11～14）

石垣遺構は主郭北西隅に残る土塁の内側に、ほぼ直角に入角に遺存する。その規模は、第2次調査で検出された当時のままに残っており、石垣基底部での長さは東面側で5.5m、南面側で7.5mである。石垣遺構の残存最高点は入角部にあり、高さ2.65mをはかる。東面石垣遺構の見かけの残存高は1.3m～1.9mであるが、入角の東面石垣に最高点が求められる。南面石垣遺構は入角部の残存最高点から東へ行くに従い漸次高さを減じ、その東端部では根石1個分が残るだけである。

石垣の傾斜角は、東面側が76度～77度、南面側が72度～73度をはかり、直線的に傾斜する。

石積みの方は、桐木を使用せずに根石を直接地山に設置し、長さ50cm～90cmの横長の石材を交互に算木状に積みこんだ野面積みである。ただし、南面石垣の下半部は少し様相が異なり、比較的丸みのある石材が使われている。また、石積みの間には目地留めの小石が多く詰められているのも、この石垣遺構の積み方の特徴である。石垣の石材に五輪塔や宝篋印塔、石仏、礎石などを多用しているのも当時の時代背景を反映しているといえよう。石材の石質は花崗岩、砂岩が主である。

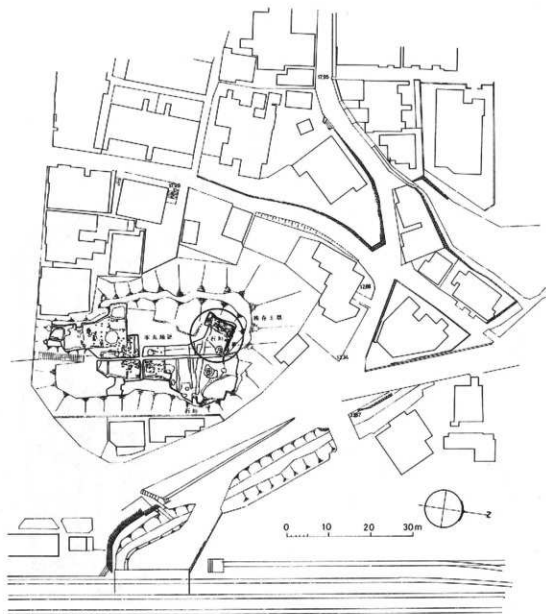


図43 第16次調査地点図（「伊丹城跡発掘調査報告書Ⅱ」より）

入角における東面石垣と南面石垣との取り付き方は、角部の強度を保持するため、普通、井桁に組むが、ここではそのような方法は採られていない。まず、東面の石垣を積み上げた後に、南面の石垣を東面の石垣にもたせさせて構築する二段階の方法が採られているのである。そのため、東面の石垣は南面石垣の面より2石以上奥まで積まれているのであるが、その尻は土塁の中になり確認できなかった。

このような一方の石垣を積み上げた後、もう一方を積み上げるといった単純な積み方は、二面の石垣が同時に積まれたのではなく、ある一定の時間を置いたためにそうせざるを得なかったのか、それとも技術的な問題でそうする必要があったのか、このたびの調査ではその点を解明する手懸かりを得ることはできなかった。

つぎに第2次調査でも確認されている石列についてみておく。その石列は、東面石垣の全面

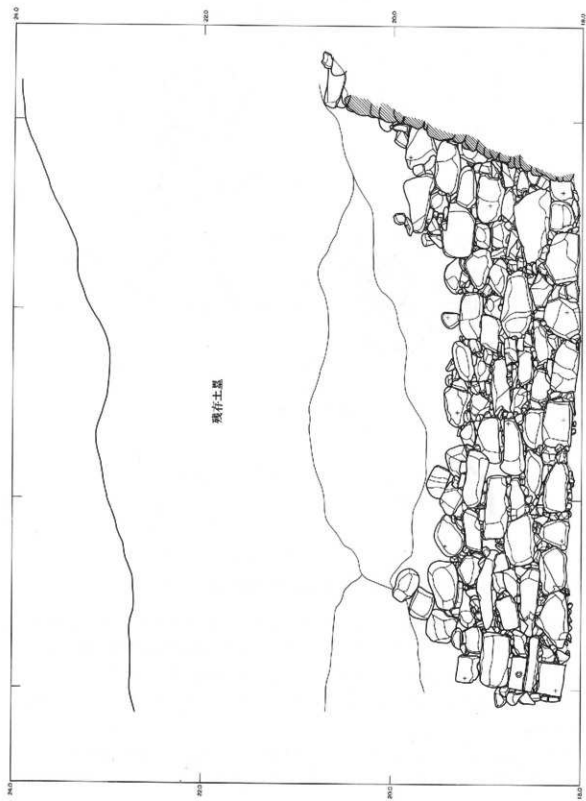


図44 有岡城跡主郭北西隅石垣(東面)写真測量図

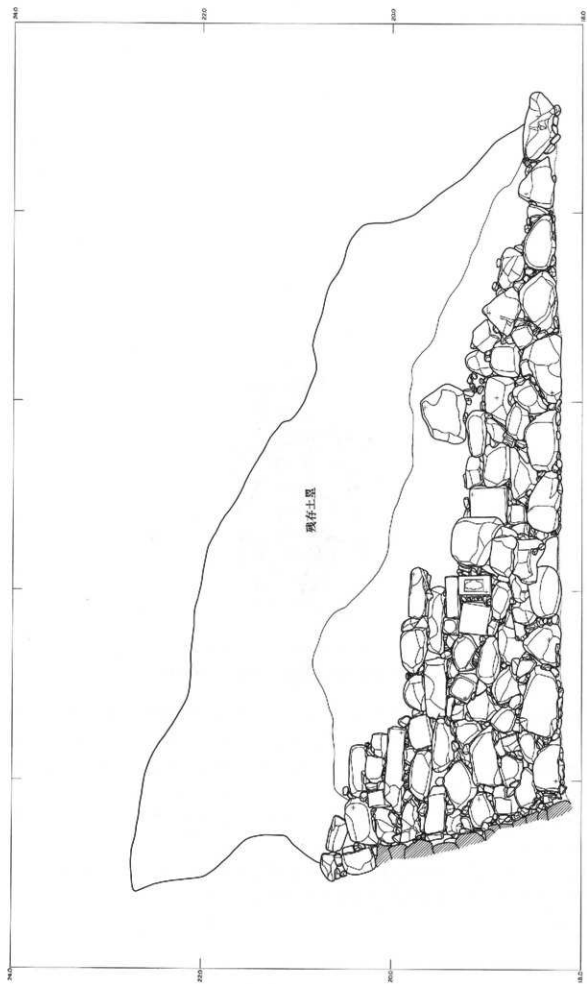


圖45 有阿城跡主郭北西隅石垣(南面)写真測量圖

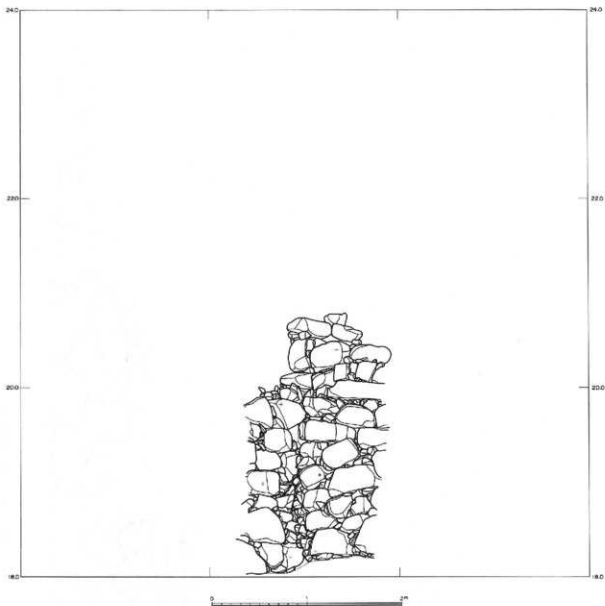


図46 有岡城跡主郭北西隅石垣（接合部）写真測量図

約2.8mのところに、東面石垣と平行に検出された。残存長は、南面石垣から南へ3.8mであるが、1.7m南へ行ったらとこで70cmの間、石列が途切れている。その途切れたところには石を置いた痕跡は確認できなかった。石列のほとんどは最下段の1石しか残っていなかったが、南面石垣との取り付き部には三段分が南面石垣にもたれかかるように遺存しており、ある一定の高さまで積み上げられていたものと思われる。この石積みが何のために積まれたのか、その性格は不明である。

なお、これらの石垣や石積み遺構は、有岡落城の際、城全体がものすごい炎に包まれたはずであるにもかかわらず、火熱を受けた徴候は認められなかった。

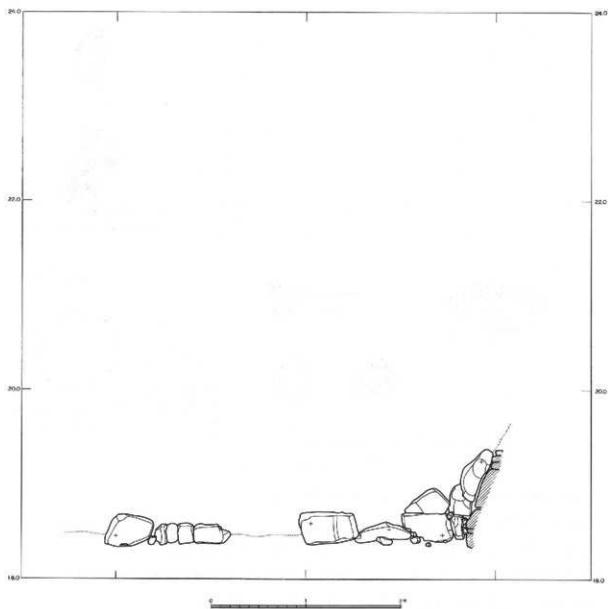


図47 有岡城跡主郭北西隅石垣（東面前石列）写真測量図

(2) 出土遺物 (図48)

未発掘土層からは少量ではあるが、土器・陶磁器類、銭貨、金属製品などが出土した。土器類のほとんどは細片である。

190～193は土師器皿の細片である。191の口唇部には煤が付着しており、灯明皿として利用されたものであろう。

194は瓦質の火舎である。外面は入念なミガキにより黒漆状の光沢をもつ。

195は備前焼の播鉢、196は備前焼の鉢である。いずれも細片である。

197・198は中国明代の青華である（図版27）。198は輪花皿で、見込みに魚紋などがあしらわれている。

199は白磁の底部で、皿になろう。

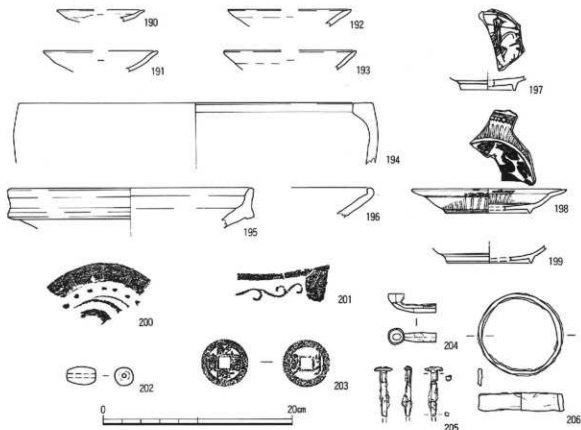


図48 出土遺物実測図（銭貨は1/2）

200は連珠左巻き三つ巴瓦当、201は唐草紋軒平瓦の細片である。

202は土師質の土鍾である。

203の銭貨は「乾隆通宝」で、初鋳年は清朝1736年である（図版30下）。

204は青銅製のキセルの火皿・雁首で、雁首の内側に羅字の木質が残る。長さ50.3mm、火皿内径13.6mm、外径16.2mm、雁首内径7.4mm、外径9.2mm（図版30中右）。

205は鍛造の角釘である。頭はL字に折り曲げ、左右に遣り出す。残存長51mm。身は頭部側が5mm×2mmの矩形、中央部が3.5mm角（図版27）。

206は鉄製の輪で、内径7.8cm、外径8.6cm、厚さ3mm～4mm、高さ18mmをはかる。つなぎ目が無く、鑄造品と思われる。用途不明（図版27）。

3. 小 結

今回の調査を通して若干の考察をしてみたい。

石垣遺構の高さについては、入角部の奥で検出した東面石垣の頂上が2.65mの高さがあり、南面石垣の全面より後ろにあって崩落した状況が見られないことから、石垣の高さを2.7mほどに求めることができる。土塁の残存高は最高で6mほどあり、石垣が積まれた高さは土塁の半分以下であったと思われる。

ところで、東面石垣と平行する石積み遺構と石垣との関係について、それを有機的に繋がる

ものとして捉えるならば、三方が石積みで囲まれた長方形の空間ができあがることになる。四方が石積みで囲まれていたかどうかについては、南側にその徴候が残っておらず、不明としかいいようがない。しかし、東面石垣の残存する南端部のまとまり方に不自然さがあることに着目してみたい。東面石垣が、さらに南へ伸びていたと考えるのが普通であるが、残存部の終わりが石垣の隙間を埋める目地留め石を縦に積み上げた状態にあり、しかも下から上へ順に大きくなっているのである。普通に石垣を積んでいく分には、よほど積み方を変えない限りこのような状況は起こらないであろう。おそらく東面石垣はここで終わっていて、それに直交する石積みなどの構築物があったと考えた方が良さそうである。とすれば、南側を画する構築物との隙間に埋められた目地留めと解釈でき、四方を石で囲まれた南北長5.5m、東西幅2.8mの空間を想定することができる。東面石垣に平行する石積み遺構の一部に石が抜けたところがあり、その部分がもともと開いていたとすれば、そこを入口に想定でき、石室的な建造物の存在を考えることが可能であろう。今のところその性格について断定することはさけるが、石室的な建造物の可能性を示唆しておきたい。

最後に、有岡城跡を史跡公園として整備するにあたって、この石垣遺構を実際に露頭させて整備する案もあったが、その積み方から見て露出させたままでは崩壊の危険が大きいと判断されたため、これを埋め戻して現状保存した上で別の整備方法を採用することになった。埋め戻しにあたっては、6ヶ所ほど目地留め石の抜けた箇所新たな石を補充し、その上で石垣遺構の表面を真砂土で保護した。

XI 第18次調査

・調査期間	1985年6月19日～6月26日
・調査地	伊丹市中央1丁目428-4
・調査原因	遊技場建設
・調査組織	有岡城跡発掘調査団
調査団長	橋本 久
調査主任	浅岡俊夫
補助員	玉田芳英(京都大学)

1. 調査に至る経緯と調査方法

有岡城跡西側隣接地の一面に遊技場建設計画が持ち上がり、事前協議の席上、文化財保護の立場から有岡城跡の外堀が敷地内にかかっている可能性があるため、確認調査の必要性を申し入れた。しかしながら、当該地区の遊技場建設は市環境条例により認められず、開発の是非をめぐって折り合いがつかないまま工事は見切り発車されたのである。

これに先立って、事業主側から文化財保護法の趣旨に乗取り、昭和60年6月13日から発掘調査を行う旨の一方的通知があった。事実、当日は早朝から機械による発掘が開始されていた。その発掘とは幅2m、深さ1mのトレンチを機械的に入れたもので、教育委員会が朝一番に現場へ急行した時にはすでに長さ約25mにわたって掘削されていた。この憂慮すべき事態に対して、専門家や専門職員のいない発掘調査は認められない旨事業者に通知し、即刻発掘の中止を申し入れ、早急に緊急調査を行うことで合意した。

有岡城跡は伊丹台地の中でも台地東縁部によく発達した加茂面に立地しており、その西側を取り巻く中野面との2mほどの段差を利用して堀をめぐらし、惣構えを形作っている。そこで調査にあたっては、当該地は国史跡指定である有岡城跡惣構え外郭線の西側に隣接しているため、敷地内における外堀の確認とそれに付帯する施設の有無の確認を目的とした最低限の調査を行うことにした。調査は、事業主側によってすでに掘られたトレンチをさらに東へ10m程度延長し、ほぼ敷地いっぱいにトレンチを設定した。トレンチの規模は長さ35m、幅2mで、地山面まで遺構の追究を行った(図49)。調査面積は70㎡である。

2. 調査概要

(1) 土 層 (図50)

当調査地は、有岡城跡が立地する加茂面台地より2mほど下がった中野面にあたっている。基本土層は、敷地全体に第1層とした盛土が25cm前後の厚さでなされており、その下に第2

層耕土(10cm)以下、若干土層の出入りがあるものの、東から西へ層を増しながら平行堆積する土層が見られる。第3層は灰褐色砂泥層(15cm)で、伊万里系磁器(図51 215)や焙烙が出土し、江戸時代～近代の土層である。第4層は黄灰色泥混砂礫層(15cm)で、近世の瓦が出土し、やはり江戸時代の土層として捉えられる。第5層は灰褐色粘質砂泥層(15cm)、第6層は灰茶色砂泥層(10cm)、第7層は黄茶色粘質砂泥層(10cm)で、これらの土層には遺物の包含は見られなかった。第8層は有機質を含む褐灰色砂泥層(10cm)で、土師器と瓦器を包含し、中世の土層として捉えられる。第9層は黒褐色砂質粘土層(10cm)で、泥炭化している。第10層は地山直上に堆積する灰白色砂質粘土層(10～25cm)である。トレンチ東端部には、第3層と地山との間に第11層暗灰茶色砂泥層と第12層灰茶色泥混砂礫層の堆積が見られる。第12層からは白釉陶器が出土している。第13層地山は淡黄灰色ないし青灰色砂礫層(伊丹礫層)である。第9層以下は無遺

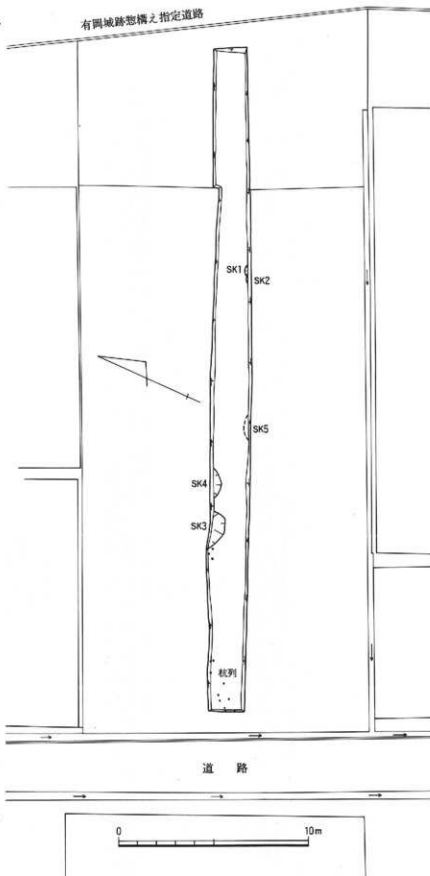


図49 第18次調査トレンチ配置図

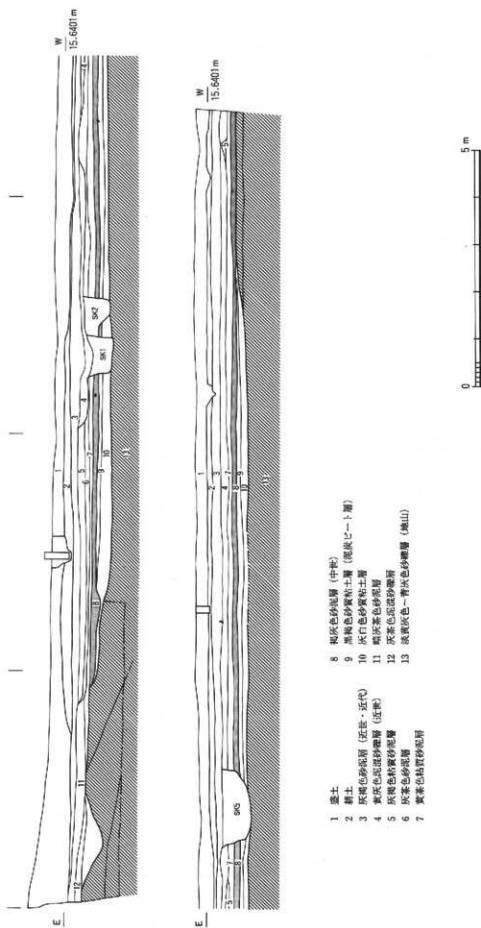


図50 トレンチ土層断面図

- | | |
|------------------|---------------------|
| 1 盛土 | 8 靑灰色砂泥層 (中世) |
| 2 粘土 | 9 黒褐色砂質粘土層 (縄文ピート層) |
| 3 灰褐色砂泥層 (法隆・法代) | 10 灰白色砂質粘土層 |
| 4 黄灰色泥質砂泥層 (法隆) | 11 靑褐色砂泥層 |
| 5 灰褐色粘質砂泥層 | 12 灰褐色泥質砂泥層 |
| 6 灰褐色砂泥層 | 13 靑黄灰色-靑灰色砂泥層 (龜山) |
| 7 黄褐色粘質砂泥層 | |

物層になり、中世の地山になる。なお、伊丹礫層の地山は東側の加茂面に向かって上昇しており、第3層から第10層はトレンチ東端部で消滅する。

(2) 遺構と主な遺物

事業主側がすでに掘削していたトレンチ部分から、図49のように断面にかかった5基の土坑を確認した。それらの土坑は、土層断面で確認したところ第4層と第5層面から掘り込まれていた。また、トレンチ西端部において地山上から杭列を検出したが、どの土層から打ち込まれたものかは不明である。なお、当初予想した堀跡の確認はトレンチ内ではできなかった。主な出土遺物は図51に示した。

SK-1は、直径約90cm、深さ55cmの土坑で、遺物の出土はなかった。

SK-2は、トレンチにかかっている部分が少なく、全体の大きさはよく分からないが、深さ約50cmの土坑で、2段に掘られており、SK-1によって切られている。遺物の出土は多く、丹波焼甕(208)や壺、唐津焼鉢(209)、伊万里系染付碗・皿(210・211)、淡波焼鉢、信楽焼、土師器皿、焙烙、瓦などがある。伊万里系碗の底部には「大明年製」を模写したのが見られる。

SK-3はかなり大きな土坑で、須恵器の短頸壺(207)や伊万里系染付碗(213)、刷毛目唐津碗(212)・鉢、鉄釉陶器、瓦などが出土。江戸時代後期のものである。

SK-4は、SK-3の東側から検出した直径約80cmの土坑である。伊万里系染付碗(214)や唐津焼鉢が出土し、江戸時代後期に比定される。

SK-5は、第3層面から掘られた土坑で、直径約160cm、深さ約60cmになる。伊万里系半筒湯飲み碗、土師質火舎が出土。江戸時代末から近代の遺構であろう。

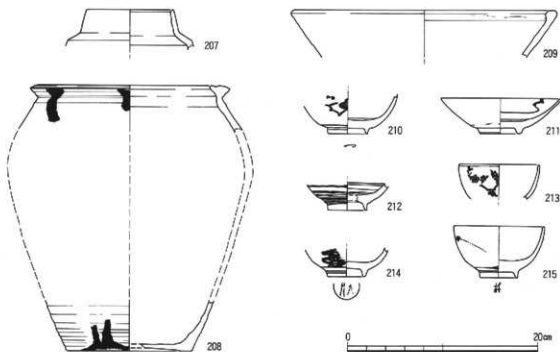


図51 出土遺物実測図

3. 小 結

有岡城跡惣構えの外堀は検出できなかったが、中世の遺物包含層を確認した。このことは、城外にも何らかの開発が行われていたことを示唆するものであり、今後、城周辺の発掘調査も積極的に進める必要があろう。

検出した土坑は、近世以降の民家に伴う遺構としての性格が強く、江戸時代後期になると、町家が有岡城域を母胎とする伊丹郷町の範囲を越えて進出、拡大されたことを物語っている。

XII 第19次調査

- ・調査期間 1985年10月4日～10月7日
- ・調査地 伊丹市宮ノ前3丁目5-7
- ・調査原因 社屋新築工事
- ・調査組織 有岡城跡発掘調査団
 - 調査団長 橋本 久
 - 調査主任 浅岡俊夫
 - 調査員 木下亘 稲村繁 (國學院大学大学院)

1. 調査に至る経緯と調査方法

事業主から社屋の新築工事に際して埋蔵文化財存否の確認が教育委員会にあり、それに対し、当該地は国史跡有岡城跡惣構之外郭線の内側に隣接し、岸砦跡である猪名野神社にも隣接しており、遺跡存否の確認調査を実施の上、場合によっては全面発掘調査が必要になること、それにかかる費用は原因者負担であること、調査にあたっては文化財保護法の発掘届出が必要であること等を申し入れた。事業主からは事前に文化財保護法に基づく発掘届出がなされたが、費用負担や調査期間のことで発掘調査実施協議がまとまらず、10月1日に強行着工されたのであ

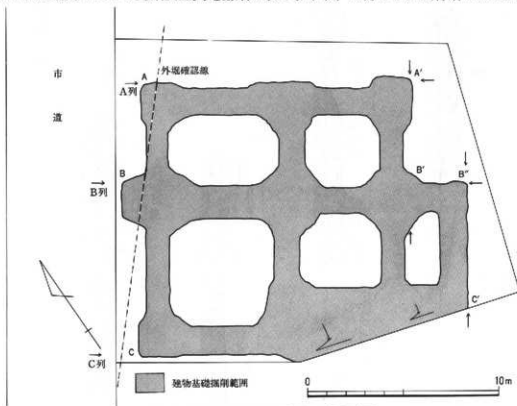
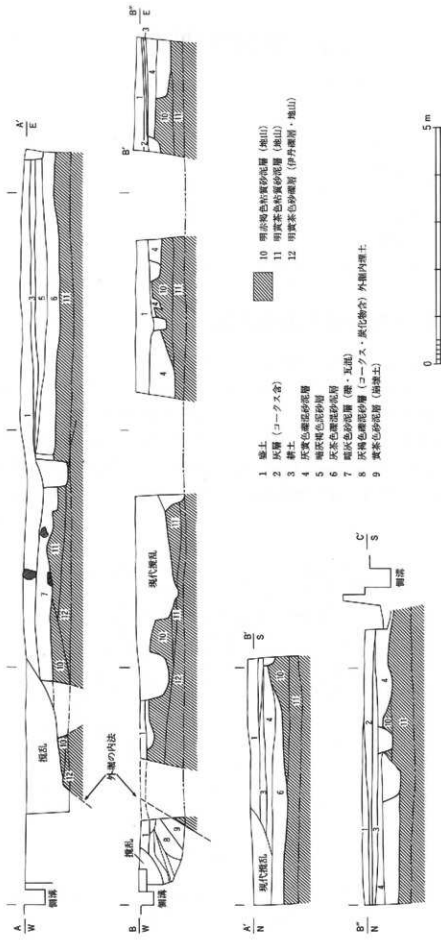


図52 第19次調査地の基礎掘り方平面図



る。10月4日、事業主から着工した旨の通知があり、現場へ急行し、その事実を確認した。

工事は深さ90cm～100cmの基礎溝が図52のように田の字に掘られ、すでに捨てコンが打たれた後であった。そこで10月5日、工事の中止と確認調査の実施を申し入れた。調査にあたっては、すでに基礎溝の掘削が完了し、その底に捨てコンが打たれていることを考慮し、基礎溝の断面観察と断面実測、写真撮影を行うこととし、7日に調査を行った。調査対象範囲は210㎡。

2. 調査概要

当調査地は、猪名野神社の南に隣接し、国史跡惣構之外郭線に接している。猪名野神社は有岡城の北を守る岸砦に比定され、境内を囲んで残存土塁がめぐっており、その土塁を延長すると、調査地の敷地の西半分が土塁にかかることになる。そこで土塁の痕跡とその外側をめぐる外堀の確認に重点をおいて断面観察を行った。

断面観察にあたっては、東西方向の断面に主眼をおき、北からA列、B列、C列とし調査した(図52)。その結果、地山は最も良好に残っているところで土層断面B-B'間の地表下10数cmにあるが、土塁の盛土は確認できなかった。しかし、A列とB列において外堀の内法を確認することができた。A列では道路境界より2.2m、B列では1.6m敷地に入ったところで確認した(図53)。ところがA列では地山が攪乱等で低く掘り下げられ、B列では南北の基礎溝で破壊されており、実際の地山の高さまで内法を引き上げると、さらに道路境界より数10cmほど入ったところに外堀の肩を求めることができる。なお、基礎溝内では捨てコンが打たれていたために、外堀を平面で確認することはできなかった。外堀の法勾配は約56度である。

そのほか、土塁削平後に穿たれた土坑や落ち込みをいくつか確認したが、それらは城に関連したものではなく、大半が近・現代のものであった。

XIII 第20次調査

・調査期間	1985年10月11日～12月10日
・調査地	伊丹市中央6丁目509
・調査原因	シティホテル建設
・調査組織	有岡城跡発掘調査団
調査団長	橋本 久
調査主任	浅岡俊夫
補助員	尾崎久至 後神泉 佐伯二郎 関野豊 宮本勝裕 山本大治 (以上神戸大学) 伊藤潔 田中賢人 樽井正 濱野俊一 森川壯一(以上大阪経済法科大学) 八瀬正雄 和田秀寿(以上龍谷大学) 河野克人(関西大学) 橋本教子 福井千代子(以上主婦)
調査協力	木下亘 稲村繁 松田調 宮本博 井上洋介(神戸大学) 遠藤昭浩 春日井亘 北沢武志 平川裕介 丸山雄二 山岸洋一(以上奈良大学) 矢野健一(京都大学) 泉本美奈 井上光子 今井直美 大野友世 熊田真子 佐藤あゆみ 島田聖 谷口美恵子 辻初美 寺田雅子 萩野典子 藤川京子 細川佳子(以上大手前女子大学) 森本徹(県立伊丹高校)

1. 調査方法

当調査地は、伊丹警察署の跡地にあたり、シティホテル建設予定全敷地の南半分である。この地は有岡城跡の外郭(町家)の西縁中央に位置している。南隣には墨染寺があり、墓地の入口に「女郎塚」の碑が祀られている。この「女郎塚」の碑は、もとは墨染寺の近くに祀られていたといひ、上臈塚砦の犠牲者供養のために建てられたといわれている。女郎塚は上臈塚が訛ったもので、墨染寺の近辺、とりわけ伊丹警察署跡地を中心とする場所に上臈塚砦が構えられていたと推定されている。上臈塚砦は、有岡落城に際し、最初に開かれた砦である。そのため、砦を思わせる痕跡は何も残されていない(図版15)。

そこで、シティホテル建設に伴い上臈塚砦の確認と有岡城跡の外郭の構造などを調査する必要性があった。しかし、工期を急ぐため、十分な調査予算と期間が保証されず、しかも調査期間中に工事の地鎮祭が行われることや敷地の北半分が調査対象から除外されたこともあって、結果として調査対象面積約3000㎡の内728㎡ほどの調査しかできなかったのである¹⁰⁾。

調査は、まず地鎮祭に影響のない警察署跡地の西縁と南縁に沿って長さ45m×25m、幅2mのトレンチをL字形に入れ、遺構の遺存状況を見ながら条件の許される範囲内で幅10mに拡張



図54 第20次調査トレンチ配置図

を行った。この南北トレンチを第1トレンチ、東西トレンチを第2トレンチとする。そして第1トレンチの中央部に第3トレンチ、北端部に第4トレンチを設定した。第3トレンチの規模は長さ14m、幅5mで、第4トレンチは長さ13.5m、幅3mである(図54)。さらにトレンチの設定を行った上で、トレンチの軸にあわせて調査地に5m方眼を組んだ。方眼は西から東へアルファベット、南から北へ数字を付し、方眼の南西交点を基準としてA-1、B-2、C-3と調査地区を表した(図57・58)。

2. 調査概要

発掘調査は、シティホテル建設予定地の南半分の内、西側道路に面したところを重点的に行ったが、古墳時代から近代に至る遺構・遺物を検出した。それを時代ごとに振り分けてみると、古墳時代、有岡城時代、近世・近代の3期に分けることができる。つぎに、土層およびそれぞれの時代に伴う主な遺構・遺物についてみる。

(1) 土層(図55・56)

土層は、基本的に近現代の盛土・整地層、近世～近代の堆積層、古墳基底部の埋土、そして地山からなる。盛土・整地層(第1層)は敷地全体に50cm～70cmの厚さで見られ、その下部には部分的ではあるがコークス層など(第2・3層)が薄く敷かれているところがある。この層中からは警察署の建物基礎や土管溝などが穿たれている。

近世～近代の堆積層は、盛土整地層の直下から古墳基底部埋土と地山の間に、薄い層が幾層にもほぼ水平に50cm～100cmの厚さで堆積している(第5層～第19層)。伊丹郷町として栄えた時期の土層である。間に焼土や灰層を挟むところもあるが、火災にとまなうものかどうかは不明である。第3・4トレンチでは警察署関連の基礎や攪乱により、この土層のほとんどが失われていた。遺構はこの層の下部に位置する層、地山面、古墳基底部埋土上面から検出した。

古墳基底部の埋土は、第1トレンチの中程から南にかけて地山が一段低くなったところに見られる。埋土は大きくⅠ～Ⅳの4層に分けられ、古墳の葺石と埴輪が多量に包含されていた。遺物の包含は、Ⅰ・Ⅱ層よりもⅢ層が圧倒的に多く、破片も大きいのが目立つ。葺石の包含もⅢ層が量的に圧倒している。しかし、最下層のⅣ層には全くといってよいほど含まれていなかった。また、有岡城期を中心とする土器・陶磁器や瓦類も少なからず出土したが、その大部分が最上層のⅠ層からの出土で、Ⅱ層からの出土はわずかで、Ⅲ層にはほとんど含まれない。こうした遺物の出土状況などから見て、Ⅳ層は古墳造築時の地山になる可能性があり、このⅣ層を別にして上3層は有岡築城時もしくは落城時に埋め立てられたものと思われる。中でもⅡ・Ⅲ層は城存続期の遺物が少なく、有岡築城時の髷構築のために古墳の一部を削り取って埋め立てられた可能性が高い。Ⅰ層については、落城時に髷の物見台として残されていた古墳を完全に削平して整地されたのではないかと考えられる。

地山は、伊丹台地の礫層が主体で、西から東へわずかに高くなっている。地山面から検出し

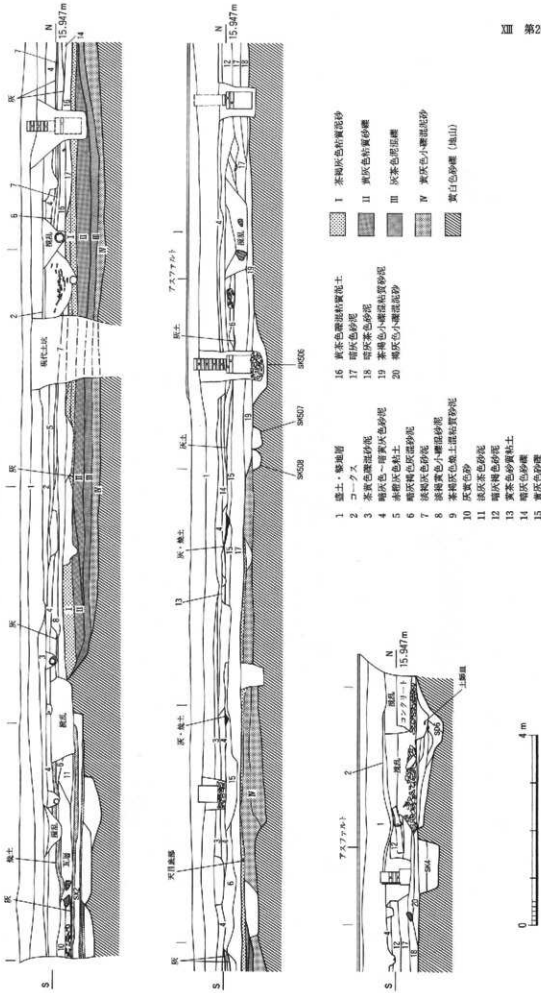


図55 第1トレンチ西壁土層断面図

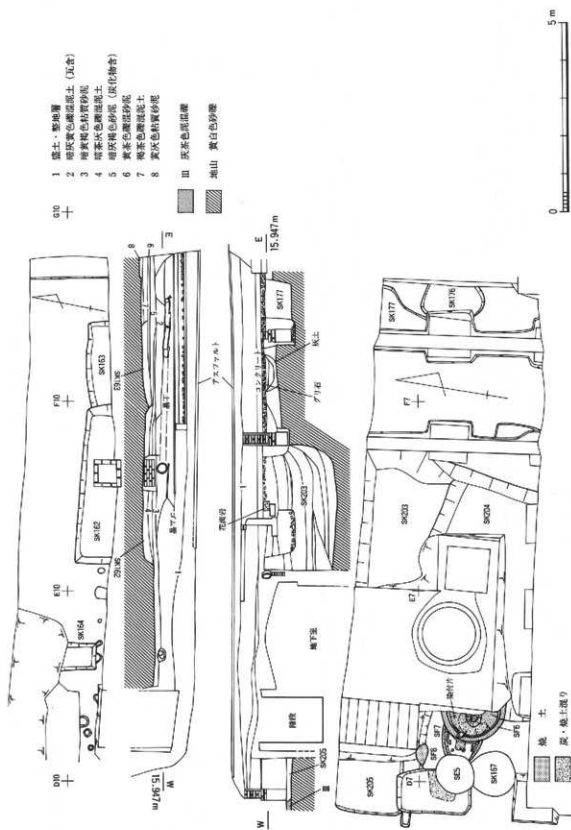


図56 第3・4トレンチ遺構平面図と土層断面図

た遺構には、江戸期の土坑などもあるが、有岡城期以前の遺構が遺存する。

(2) 主な検出遺構

検出した遺構は、古墳跡、有岡城関連の堀跡や溝状遺構、伊丹郷町の町家・酒蔵関連の竈や土坑などである。これらの遺構の前後関係は、古墳跡や有岡城関連の遺構の上に伊丹郷町関連の遺構が乗っており、よって有岡城期以前と以後に遺構を分け、有岡城期を含めた以前を下層遺構(図57)、以後を上層遺構(図58)とする。ただし、図57の第1トレンチ南端部のSK-511などの土坑は上層遺構の下から検出された伊丹郷町関連の遺構である。

イ 下層遺構

古墳跡(図59、図版16下)

第1トレンチの南半部において地山が鈍角に開いた逆L字形の落ち込みを検出した。落ち込みの深さは40cm～50cmあり、土層の項で述べたように直径10cm～20cm大の葦石や埴輪で埋め立てられていた。その範囲は、周溝の範囲と思われる南北15m、東西7m～8mにおよんでいる。逆L字形の検出長は、東西が7mで直線的に伸び、南北が13mで緩やかに弧を描いて外彎する。外彎する延長線は第3トレンチに向かって伸びているが、その線にあたる場所は地下室などのため確認できなかった。また、調査区の東側では地山が高くなっており、古墳の輪郭が残っていない状況が読みとれた。そのほか古墳の形状などを知る手懸かりは得られなかったものの、逆L字形の形状と出土物から前方後円墳のくびれ部にあたると判断した。検出したくびれ部は地山が低かったため辛うじて古墳の基底部が遺存したものであろう。

古墳の大きさについては、基底部の弧から直径40mの後円部に復元でき、前方部の長さについては手懸かりがないが、全長70mほどに推定した(図61)。主軸の方位は磁北に対して東へ40度の傾きをもち、猪名野古墳群(塚口古墳群)の最北端にあって同古墳群に対し右側面を見せるように造られている。

古墳に関連する遺物には埴輪のほかガラス製の小玉が1点、古墳主体部の石室に積まれたか、葦石と共に積まれたか判然としないが、安山岩を主体とする板石が出土している。

古墳名については、上賜塚(後に「女郎塚」の字があたられている)砦推定地にあり、古墳の高まりを利用して砦が築かれたことが容易に推測できることから「上賜塚古墳」と命名した。有岡城の南端を守る鶴塚砦も古墳が利用されていたことが、その後の伊丹市教育委員会の調査で確かめられており、古墳の高まりを利用した砦造りが積極的に採用されていたことを知るのである。

堀跡(図62、図版17上)

第2トレンチで検出した有岡城関連の堀跡である。西南西から東南東へ、やや東よりに角度を変えながら第2トレンチを斜めに横切る。検出長は北岸が13.5m、南岸が3m、幅は4m～4.5m、深さは1m～1.5mをはかる。断面形は逆台形を呈す。深さはやや浅い観があるが、堀幅は有岡城では中規模にあたり、中堀としての機能を有していたものと考えられる。

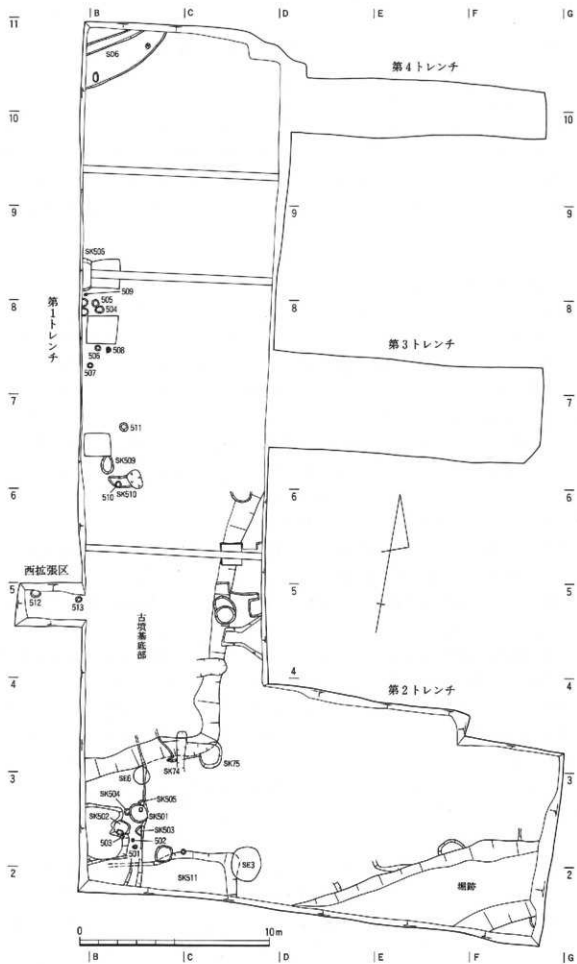


図57 下層遺構展開図

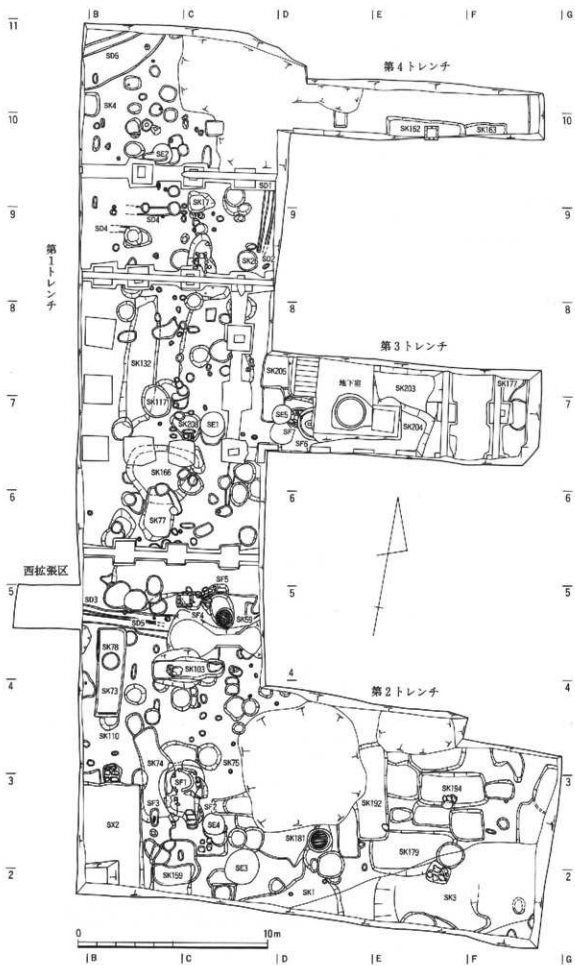


図58 上層遺構展開図

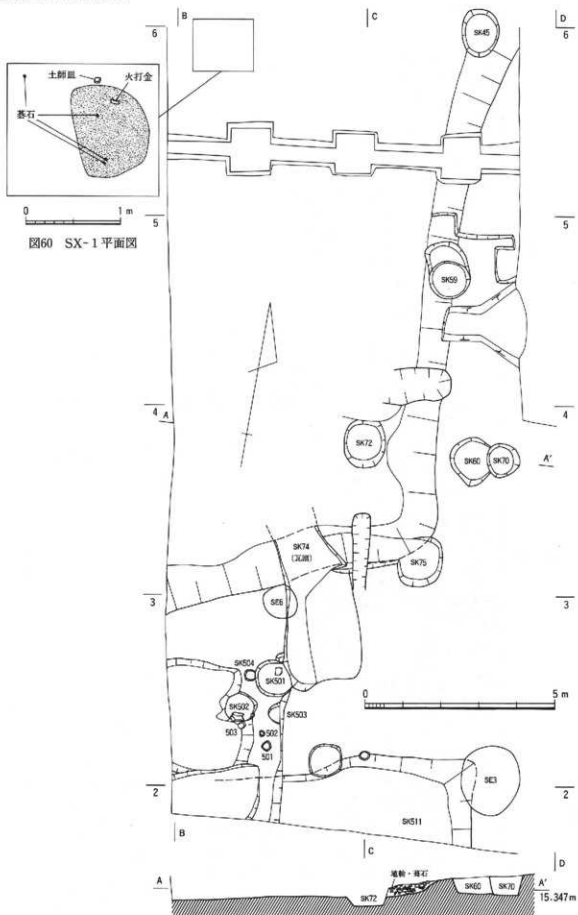


図59 古墳基底部検出平面図

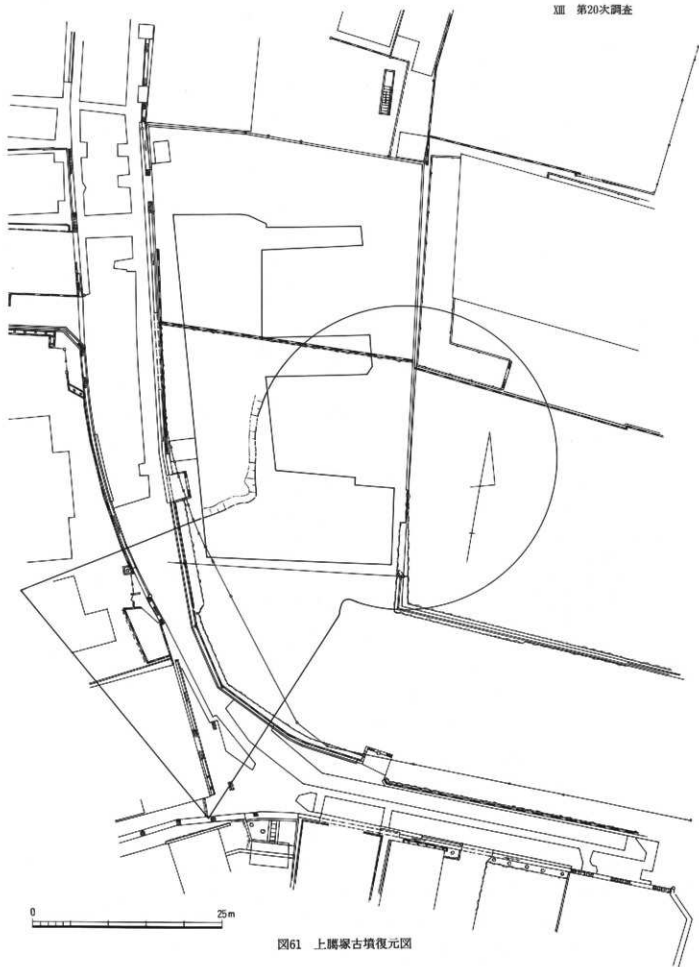


図61 上馬塚古墳復元図

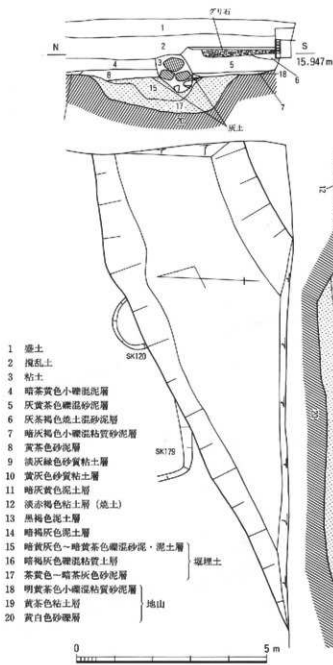


図62 堀跡平面図と土層断面図

- 1 盛土
- 2 攪乱土
- 3 粘土
- 4 暗茶黄色小礫混泥層
- 5 灰黄茶色礫混砂泥層
- 6 灰茶褐色土礫砂泥層
- 7 暗灰褐色小礫混粘質砂泥層
- 8 黄茶色砂泥層
- 9 淡灰綠色砂質粘土層
- 10 黄灰色砂質粘土層
- 11 暗灰黄色粘土層
- 12 淡赤褐色粘土層 (焼土)
- 13 黒褐色泥土層
- 14 暗褐色泥土層
- 15 暗黄灰色~暗茶黄色礫混砂泥・泥土層
- 16 暗褐色礫混粘質土層
- 17 茶黄色~暗茶灰色砂泥層
- 18 明黄茶色小礫混粘質砂泥層
- 19 黄茶色粘土層
- 20 黄白色砂礫層

堀埋土

地山

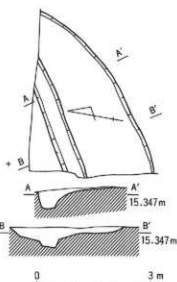


図63 SD-6 平面・断面図

出土遺物は少なく、15~16世紀の備前焼、白磁、土師質土器、瓦などがあるが、小片である。ただし、古墳に関係した埴輪や葺石は全くといってよいほど出土しなかった。

SD-6 (図63、図版17下)

第1トレンチの北西隅で西南西から東南東に斜めに横切って検出した溝状遺構である。前述の堀跡とほぼ平行関係にあり、その間隔は約45mである。溝は二段

に掘られており、検出長は3mである。溝中心部の幅は50cm、深さも50cmである。

SX-1 (図60)

古墳基底部埋土I層を発掘中、B6杭の東南部で検出した炭化物の広がらな面である。炭化物の厚さは薄く、0.8m×1mの半円形の範囲に集中し、その周辺を含めて基石4点、火打金、土師器皿が同一面から出土した。検出面の高さはほぼII層上面に一致する。

炭化物が面的に広がり、ある特定の遺物が伴うことは、ある時期、II層面が生活面をなしていたことを意味すると同時に、火を囲んで碁などの遊びに興じていた様子を窺わせるものとして捉えられよう。戦争という緊張の合間、一息の安らぎを得た姿があったのかもしれない。

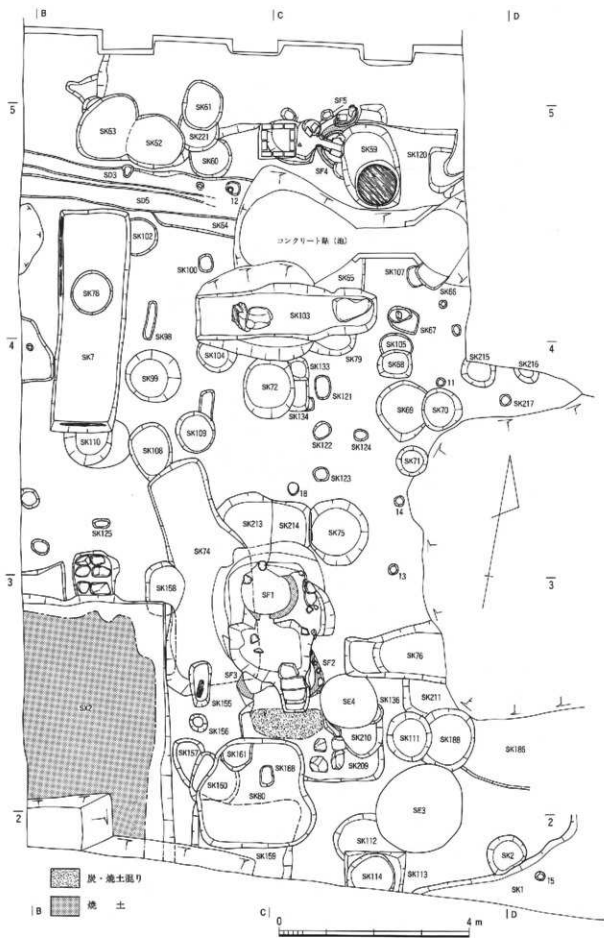


図64 第1トレンチ上層遺構平面図(1)

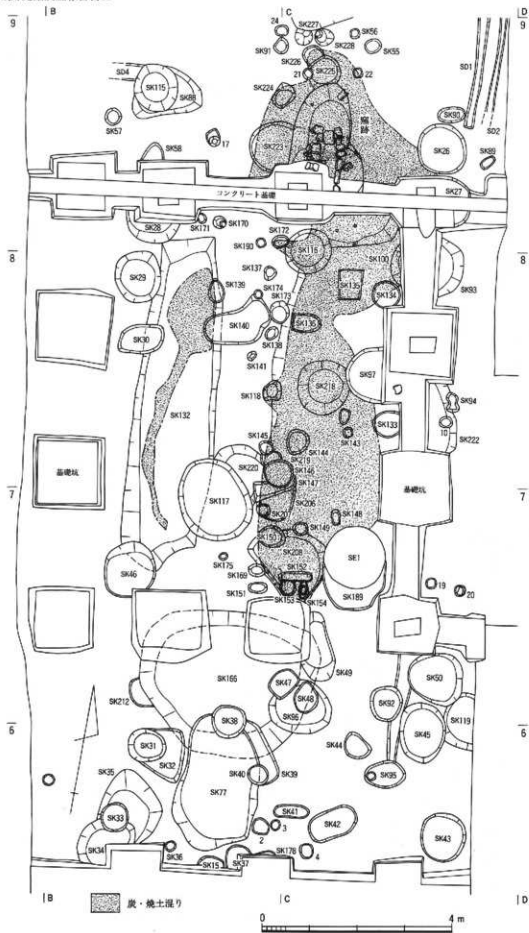


図65 第1トレンチ上層遺構平面図(2)

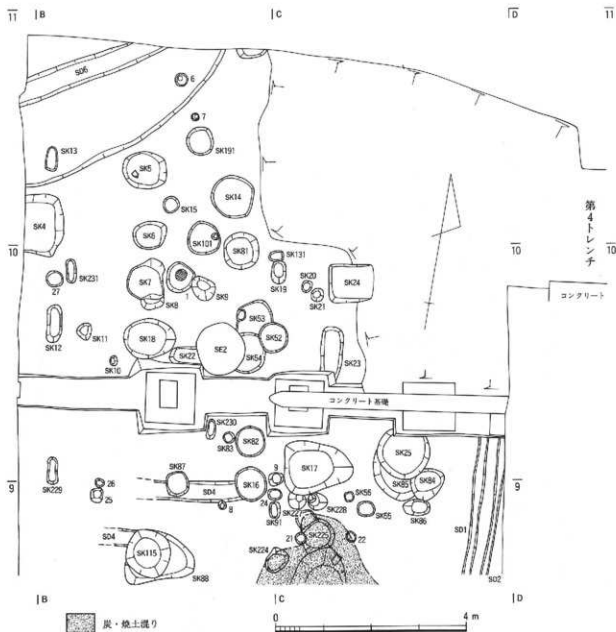


図66 第1トレンチ上層遺構平面図(3)

ロ 上層遺構

上層遺構の拡大平面図は図56および図64～67に示した。遺構には釜跡、電跡(SF)、井戸跡、埋桶土坑、瓦溜め土坑などが所狭しと遺存していた(図版16上)。当調査地は江戸時代の絵図に照らしてみると、紺屋町、材木町、中小路村に属し、道路沿いに数個の町家が建ち並んでいたようである。また、調査地の南隣には刺菱酒造の酒蔵があったという。酒蔵が当調査地にまで及んでいたのかどうかは詳らかでないが、酒造り用の電や数ヶ所ではあるが酒蔵の礎石ではないかと思われるものなどが検出されたことは注目すべきである。ここでは釜跡と電を中心に記述し、井戸や溝、土坑などは表4の一覧にまとめておく。

窯跡(図68、図版18)

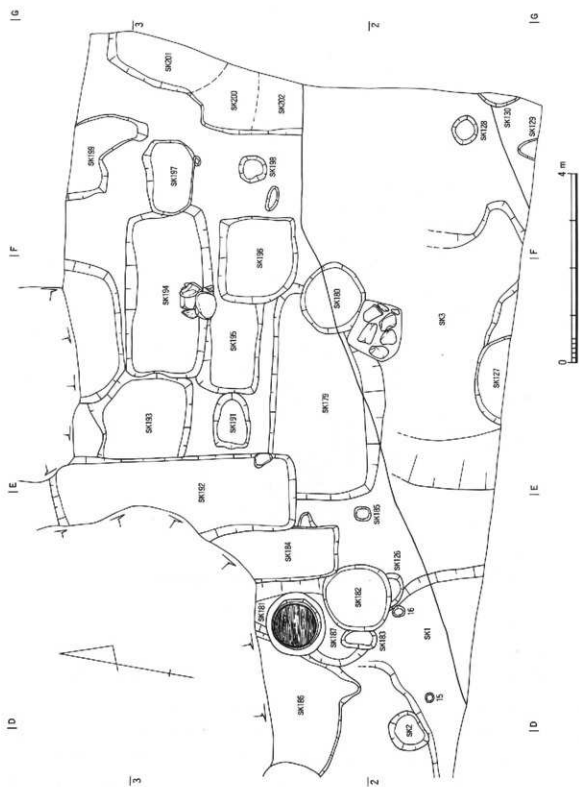


図67 第2トレンチ上層遺構平面図

窯跡は第1トレンチの中央北寄りで見出したが、窯体そのものは遺存せず、焚口部分と窯体部と思われる範囲に炭・灰の広がりを認めた。炭・灰の広がりは、焚口部周辺を含めて南北約12m、東西5mの範囲に卵形に広がる。

焚口部は1ヶ所で、窯体の北側に設けられている。焚口部の平面形は口字形に掘り窪められ、20cmの間隔において2本の石柱が立てられ、床石が敷かれている。焚口の側壁は石を並べ、お

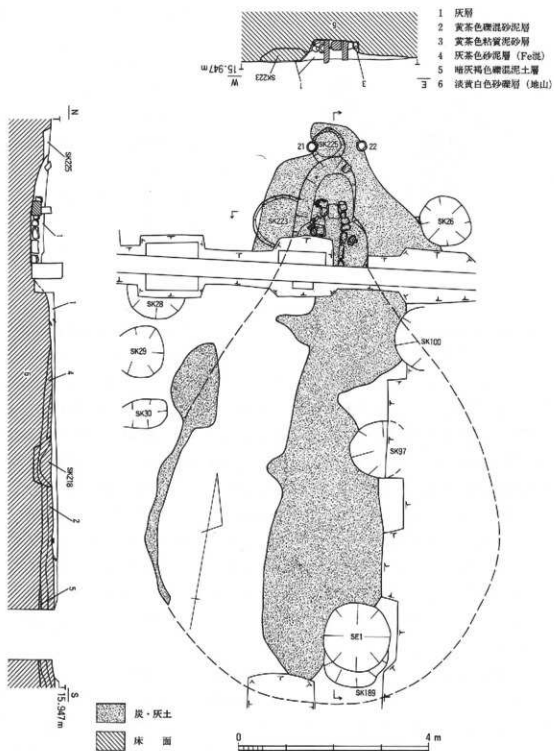


図68 窯跡平面・断面図

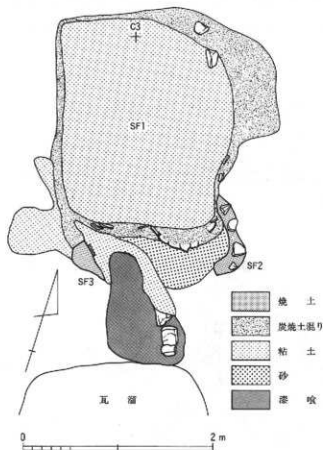


図69 SF-1・2・3検出状況平面図

そらくその上に石を積み上げて壁を造っていたと思われるが、石積みは最下段の一段しか残っていない。焚口部と焼成部との取り付け部分は警察署の基礎で破壊されているため、その構造や焚口部の全長は不明である。焚口部の残存長は1.3mである。

窯全体の構造についてはそれを知る手懸かりはないが、炭・灰の広がりから全長11.5m、焼成部長8m、幅7.5mほどの規模をもつ無花果形の窯体が想定できよう。

周辺には瓦の散乱が激しい。この瓦と窯跡との関係はよく分らないが、町家もしくは酒蔵用の瓦を焼成したのではないかと考えられる。

SF-1 (図版・70、図版19)

第1トレンチ南端部中央で検出した半地下式の竈である。ほぼ完全な形で残っ

ていた。というのは、竈を廃棄するにあたり、無碍に放棄するのではなく砂で丁寧に埋め、その上に瓦を敷き、さらに表面を粘土で覆い、保護されていたためである (図69)。

SF-1は竈本体と前庭部からなり、残存深さは1mである。竈本体の直径は105cmの円形を呈す。焼壁の表面は、かなりの部分が崩落している。前庭部は1m×1.3mの隅丸方形で、床一面に灰が薄く堆積する。東南隅には4段の階段が設けられ、下2段は石段である。

この竈の特色としては、竈構築に際し、竈本体の東側に長さ2.2mにわたって石垣が築かれていることである。石垣は30cm～40cm大の花崗岩などで積み上げられ、6段分の一部まで残存していた。西側にはそのような構築物がなく、なぜ東側にだけ必要なのか、その理由や効用などは不明である。5段目にあたる石の一つには、その上面に墨書が認められた。墨書はしっかりした筆圧で2文字が書かれ、上の字は「尾」、下の字は判読が難しいが「月」とも読め、「尾月」と書かれていたようである (図版20)。

竈の構築は、まず掘り方に沿って粘土の間に瓦を積み込んで外壁をつくり、つぎに粘土だけで内壁をつくりながら、内壁と外壁との間に黄茶色礫混砂泥を挟んで造られている。内壁には、円周の8等分にあたる位置に立石が埋め込まれていたらしく、竈廃棄の際、石は抜き取られたようで、その抜き取り穴が認められた。おそらく、石の抜き取りの際に焼壁の大部分が崩落したと思われる。

この竈は、直径が1 mもある大きなもので、おそらく酒造用（蒸米用）の竈と思われる。「摂津名所図会」や「日本山海名産図会」に伊丹の酒造りの様子が描かれており、その中に同様の半地下式の竈が見られる。そこに描かれてある竈は連鎖式で2基が連なったものであるが、SF-1の単独式のものも同じ性格の竈と見て間違いあるまい。

SF-2・3（図70、図版19）

SF-2・3は、SF-1の構築により大部分が破壊されており、SF-1の前庭部の左右より検出された。SF-2がSF-1の東側、SF-3が西側に位置する。検出当初、SF-2とSF-3は円形につながり、一連のものと思われた（図69）が、発掘の結果、一連のものとなれば長径150cmの長大な楕円形の竈になり、その深さなどから見て別々の竈とした方が妥当であるという結論に至った。

SF-2・3ともに竈の壁体は、粘土に10cm～20cm大の石を埋め込んで造られている。竈の底は、SF-2が水平であるのに対し、SF-3は船底状を呈す。残存の深さは、SF-2が20cm、SF-3が30cmである。竈の復元直径はどちらも60cm～70cmほどになり、SF-4・5と同じように一部壁体を共有して二つの竈が一组として機能していたと推測される。

SF-4・5（図71）

SF-4・5は、第1トレンチの中央部南寄り、C-4区で2基が併設して検出された。どちらも円形の竈であるが、土坑や攪乱のため、SF-4は奥壁側半分が、SF-5は焚口部から左壁側にかけて3/4が破壊されている。

竈の規模は、SF-4は直径約60cmを測り、SF-5もほぼ同じ大きさに復元される。

SF-4の焚口部は2本の丸瓦の背を向かい合わせに立ててつくり、燃焼部には焚口部の幅にあわせて丸瓦2本を平行に列べて一段落ちこんだ火床をつくっている（図版21上）。SF-5は右壁から奥壁にかけて1/4が遺存し、焼成部はやはり丸瓦でもって火床がつくられるが、丸瓦は左側が遺存せず、右側と奥壁側がL字に残る。SF-4の奥壁部は土坑で破壊されており、奥壁側の丸瓦は無くなっているが、SF-5同様に2本の丸瓦に直交する丸瓦があったものと思われる。したがって、SF-4・5の火床は丸瓦をコの字に配して、焚口部も丸瓦2本を立てて、同じ形態につくられていたと推定される。

前庭部は、隅丸長方形に一段掘り窪められていたと思われるが、SF-5側が完全に破壊され、SF-4側も一部レンガ造りの集水枡で壊されている。床には薄く灰が堆積する。

SF-6（図72、図版21下・22上）

SF-6は、SF-7・8とともに第3トレンチの西端部、第1トレンチとの接点近くで検出された。コンクリート製の地下室によって竈の東半分が破壊されている。残存側には焚口が無く、破壊された東側に焚口が設けられていたものと思われる。竈は円形を呈し、直径135cmを測る。

竈の中央に直径40cm、深さ15cmほどの窪みが設けられている。この窪みは、当初、機能していたようであるが、後に灰で埋められており、最終的には機能していなかったようである。SF-6は、その規模からしてSF-1同様、酒造りに関係した竈に推定されるが、残存深さが40cmほ

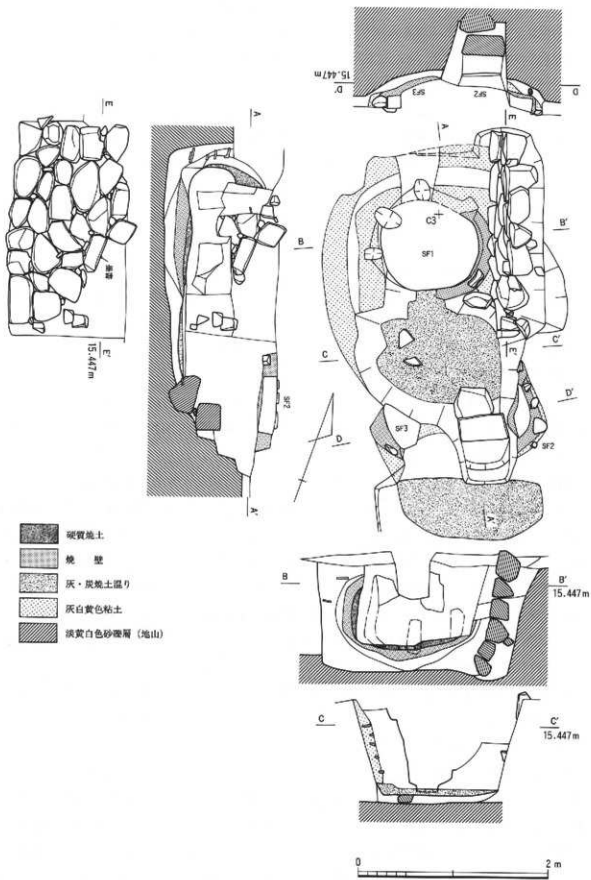


图70 SF-1・2・3平面・断面图

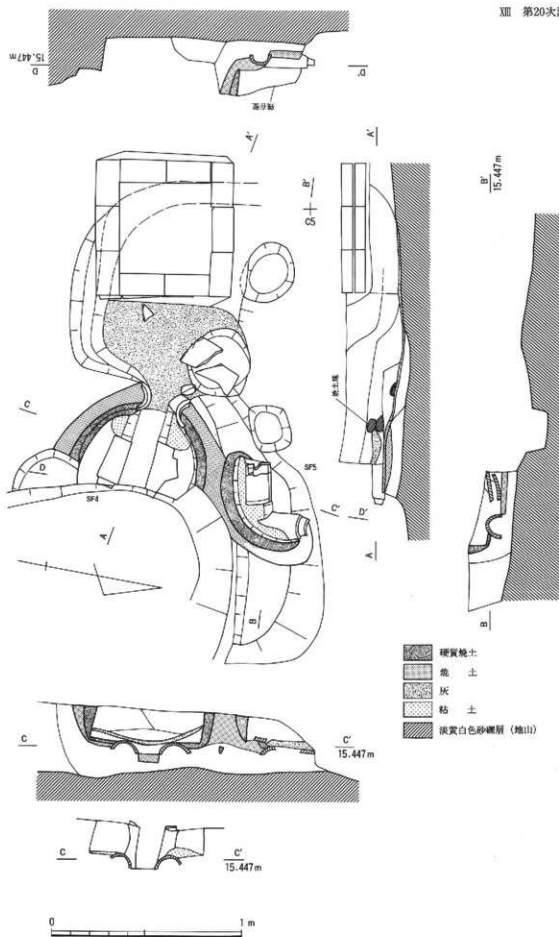


图71 SF-4・5平面・断面图

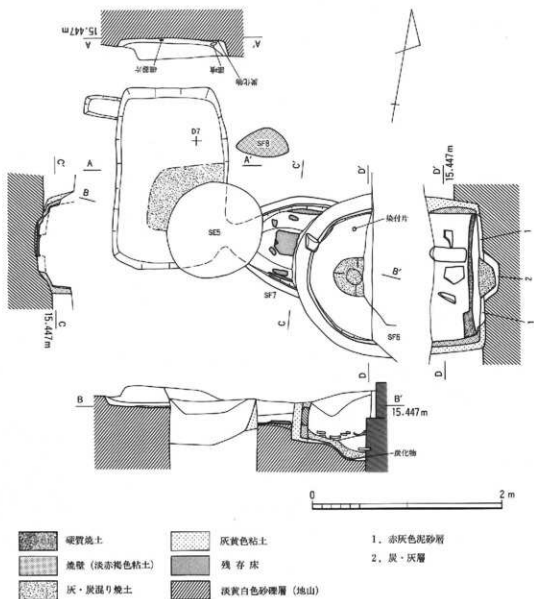


図72 SF-6・7・8平面・断面図

どしもなく、SF-1のように深い半地下構造をとらずに、どちらかといえば地上構造に近いものであったと思われる。

SF-7 (図72、図版21下・22)

SF-7は、奥壁側がSF-6に、焚口がSE-5によって切られており、その全容は不明であるが、竈本体は卵形を呈するようである。その短径は90cmを測り、残存深さは35cmほどである。床は、中央が幅20cm、深さ10cmほどに窪んだ火床をつくっていたと思われる。

SF-7の西には、長さ約190cm、幅120cm、深さ20cmの矩形の土坑があり、その一部に灰・炭の堆積があり、SF-7の前庭部を形成していたと思われる。SE-5が、丁度その取り付け部を破壊しているが、土坑の東南隅にSF-7の焚口が取り付けくものと見てよからう。

SF-8 (図72)

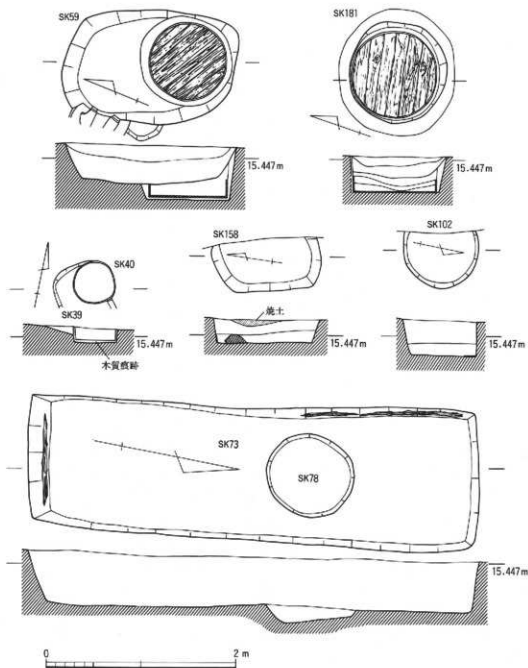


図73 埋桶や木枠をもつ土坑平面・断面図

SF-7の北側に竈と思われる焼土痕が遺存するが、竈の形態や規模、特徴は全く不明である。
SX-2 (図55・64)

第1トレンチの西南隅で検出した方形の三和土状遺構である。南北5m、東西3mの範囲を検出したが、西側と南側が調査区外に延びており、正確な規模や形状は詳らかでない。構造は、深さ20cmに掘り込み、底に薄く焼土を敷き、その上に厚さ10cmほどに粘土で固め、さらに焼土を数cm敷いたものである。用途はよく分からないが、酒造りに関係した遺構と思われる。

土坑・ピット・井戸・溝状遺構

数多くの土坑・ピットのほかに井戸6本、溝状遺構6本があるが、それらは表4にまとめて

表4 第20次調査検出の井戸・溝・土坑・ピット遺構一覧

遺構番号	地区	形状	大きさ (cm)	深さ (cm)	主な出土遺物	時代	備考
SE-1	C6	円形	132×130		土師灯明皿、丹波壺・播鉢・徳利、青磁、染付碗・鉢・銚子・くらわんか、石臼、貝殻、瓦	明治	
SE-2	B9	円形	108×101		丹波壺、施釉陶器、白磁皿、染付碗・皿、焙烙I類、角釘、瓦	幕末	
SE-3	C1・2	円形	183×180		丹波播鉢、施釉陶器碗、染付碗・皿、瓦	幕末	
SE-4	C2	円形	117×114		土師器皿、土師灯明皿、陶器甕・鉢・播鉢、施釉陶器、青磁鉢、染付碗、焙烙I類、瓦	18c	
SE-5	C・D6	円形	100×102		瓦		
SE-6	B2・3	円形	90×87				
SD-1	C8		幅25	8	瓦		
SD-2	C8		幅25	6	瓦		
SD-3	B4		幅35	13	施釉陶器碗、染付碗・皿、瓦	18c	
SD-4	B8		幅45	10	刷毛目唐津鉢		
SD-5	B4		幅87	18	土師器皿、埴輪、瓦		
SD-6	B10		幅302	52	土師器皿		
SK-1	C・D1				土師灯明皿、丹波播鉢、備前大甕(V期)、施釉陶器、青磁染付碗、染付碗・皿、焙烙I類、ミニチュア土人形、瓦	18c	
SK-2	C・D1	隅丸方形	83×75		備前大甕(V期)、染付碗、焙烙I類	18c前半	
SK-3	E・F1				土師器灯明皿、高台付播鉢、施釉陶器、刷毛目唐津碗、染付碗、磁器油壺、焙烙I類、砥石、瓦	18c前半	
SK-4	A・B10			38	丹波甕、瓦		
SK-5	B10	隅丸方形	82×76	22	土師質播鉢、丹波播鉢、塙播鉢、瓦		
SK-6	B10	隅丸方形	71×57	14	陶器火入れ、磁器銚子、瓦		
SK-7	B9	不定形	86×74	25	施釉陶器、染付、焙烙I類、鉄釘、瓦		
SK-8	B9	円形か	50×-	15	瓦		
SK-9	B9	隅丸方形	54×41	16	番線	現代	
SK-10	B9	隅丸方形	20×15	8			
SK-11	B9	不定形	34×29	18			
SK-12	B9	楕円形	80×32	11			
SK-13	B10	楕円形	49×24	20			
SK-14	B10	円形	94×82	18	土師器灯明皿、陶器甕・播鉢、染付、焙烙I類、鉄貨、瓦	江戸後期	寛永通宝3枚
SK-15	B10	円形	35×34	7			
SK-16	B8・9	円形	71×65	32	土師器皿、刷毛目唐津碗・鉢、唐津碗、青磁、染付碗、焙烙I類、キセル雁首	江戸中期	
SK-17	C8・9	不定形	142×102	56	丹波甕、陶器播鉢、塙播鉢、磁器銚子、刷毛目唐津、三島唐津鉢、染付碗・角皿、焙烙I類、砥石、御影石、瓦	江戸後期	
SK-18	B9	隅丸方形	107×85	20	土師器、丹波甕、陶器播鉢、瓦		
SK-19	C9	楕円形	48×30	18	染付、焙烙I類		

遺構番号	地区	形状	大きさ (cm)	深さ (cm)	主な出土遺物	時代	備考
SK-20	C9	隅丸方形	24×20	16	青磁碗、染付碗、瓦		
SK-21	C9	円形	27×26	12	土師器、磁器		
SK-22	B9	楕円形	133×39	56	陶器播鉢、染付、針金、鉄線	現代	
SK-23	C9	楕円形	46×一	27	瓦		
SK-24	C9	長方形	78×一	56	瓦	現代	
SK-25	C9	円形	111×一	58	土師器皿・灯明皿、柿輪皿、丹波甕、陶器播鉢・急須、褐釉陶器茶瓶、施釉陶器京焼系?、染付碗・皿、焙烙Ⅱ類、鉄貨、鉄釘、瓦	近世	寛永通宝5枚
SK-26	C8	円形	108×102	26	土師器皿、磁器、染付碗、瓦	江戸後期	
SK-27	C8	円形か			備前大甕 (V期)、瓦		
SK-28	B8	円形か	119×一	58			
SK-29	B7	隅丸方形	104×96	35	土師器皿、陶器播鉢、瓦		瓦溜め
SK-30	B7	楕円形	91×60	16	施釉陶器碗、染付碗、瓦		
SK-31	B5	隅丸方形	80×68	12	土師器皿、施釉陶器、瓦		
SK-32	B5		100×一	28	埴輪、瓦		
SK-33	B5	円形	64×60	16	白磁、赤絵、染付碗、瓦	江戸後期	
SK-34	B5		120×一	65	陶器播鉢、染付碗、瓦	幕末	瓦溜め
SK-35	B5		126×一	48	丹波播鉢、施釉陶器、染付碗・皿、埴輪、瓦	江戸後期	
SK-36	B5	円形	24×23	6	瓦		
SK-37	B5		53×一	12	陶器播鉢、瓦		
SK-38	B5・6	円形	72×69	25	土師器灯明皿、丹波甕・播鉢、染付碗、銅板、瓦	江戸後期	
SK-39	B5	楕円形	56×一	20	土師器皿、丹波播鉢、染付碗、瓦		
SK-40	B5	円形	44×43	16	土師器皿、染付碗、瓦	江戸後期	
SK-41	B・C5	楕円形	76×27	10	土師器皿、焙烙Ⅰ類		
SK-42	C5	楕円形	107×60	10	施釉陶器碗、染付碗、焙烙Ⅱ類、瓦	江戸後期	
SK-43	C5	円形	102×83	18	染付碗、瓦		
SK-44	C5	隅丸方形	62×46	16	丹波播鉢、瓦		
SK-45	C5・6	隅丸方形	126×96	47	土師器皿、柿輪皿、丹波甕・甕、播鉢、陶器壺・蓋、染付碗・鉢、焙烙Ⅱ類、面子、瓦	江戸中～後期	瓦溜め
SK-46	B6	円形	116×108	33	土師器皿、陶器小壺、播鉢、施釉陶器、染付碗・鉢、焙烙Ⅰ類、瓦	江戸中～後期	
SK-47	B・C6	方形	63×52	10			瓦溜め
SK-48	C6	不定形	66×51	8			瓦溜め
SK-49	C6	楕円形	146×一	18	丹波甕・播鉢、施釉陶器、陶器蓋、染付朱播碗、染付碗・鉢、焙烙Ⅱ類、巻貝、瓦	江戸	
SK-50	C6	隅丸方形	116×104	47	陶器播鉢、施釉陶器碗、染付碗、銅製コマ、瓦	18c中頃	
SK-51	B5		58×一	9			
SK-52	B・C9	円形	64×60	13			

遺構番号	地区	形状	大きさ (cm)	深さ (cm)	主な出土遺物	時代	備考
SK-53	B9	方形か	75×	18	陶器播鉢、染付碗・鉢、瓦	18c 前半	
SK-54	B9	円形	85×83	41	土師器皿、丹波甕、信楽?播鉢、施釉陶器、刷毛目唐津鉢、染付碗・皿、焙烙I類	18c 前半	
SK-55	C8	円形	35×31	20	瓦		
SK-56	C8	円形	20×20	7			
SK-57	B8	円形	34×34	12			
SK-58	B8		45×	16			
SK-59	C4	楕円形	178×120	54	土師器皿、陶器播鉢・急須、施釉陶器京焼碗、青磁染付皿、染付碗・皿、瓦	18c	埋桶土坑
SK-60	B4	円形	88×	34	土師器灯明皿、施釉陶器、染付碗、焙烙I類、瓦	18c 前半	
SK-61	B5・4	楕円形	103×84	22	施釉陶器、色絵碗、白磁、染付碗、焙烙I類、埴輪、瓦	18c 後半	
SK-62	B4	円形	118×114	15			
SK-63	B5・4		156×	17	陶器播鉢、染付碗・皿・鉢、仏飯、瓦	17c 末 ~18c	
SK-64	B4		88×	15	丹波甕・甕・播鉢、施釉陶器、染付碗・皿、白磁皿、焙烙I類、角釘、瓦	幕末	
SK-65	C4				土師器灯明皿、高台付播鉢、白磁、染付碗、瓦		
SK-66	C4		64×	31	土師器灯明皿、陶器甕・播鉢、施釉陶器、染付碗、土人形、瓦		
SK-67	C4	方形	70×50	40	磁器		瓦溜め
SK-68	C3	隅丸方形	72×60	20	施釉陶器、青磁染付、染付碗、焙烙I類、瓦	18c	
SK-69	C3	円形	114×	42	丹波甕、灰釉陶器、施釉陶器壺・皿、陶器播鉢、青磁染付、染付碗、石臼、瓦	18c 後半	
SK-70	C3	円形	89×88	52	柿釉皿、施釉陶器壺、陶器播鉢、染付碗、瓦	18c	瓦溜め
SK-71	C3	円形	67×67	26	瓦		
SK-72	B・C3	隅丸方形	107×	94	備前甕、陶器播鉢、染付碗・皿、瓦	17c 後半	
SK-73	B3・4	長方形	473×138	54	土師器皿、柿釉皿、施釉陶器、陶器播鉢、磁器碗・鉢、染付碗、焙烙I類、土製コマ、ガラス瓶、瓦	幕末~昭和	
SK-74	B2・3	不定形	477×123	80	須恵器、土師灯明皿、柿釉皿、紅皿、丹波甕、播鉢、備前大甕(V期)、施釉陶器、刷毛目唐津鉢、染付碗・坏、青磁染付、赤絵小坏、焙烙II類、石臼、瓦	18c 前半	瓦溜め
SK-75	C3	隅丸方形	138×123	51	丹波甕、播鉢、施釉陶器、刷毛目唐津鉢、色絵磁器碗、染付碗、焙烙I類、瓦	18c	
SK-76	C2		113×		瓦		
SK-77	B5	不定形	285×158	42	土師器皿・灯明皿、丹波甕、磁器碗、埴輪、瓦		瓦溜め
SK-78	B4	円形	91×89	18			
SK-79	C3・4			18	陶器播鉢、染付碗、瓦	江戸 ¹⁾	
SK-80	B・C1・2	不定形	229×210	26			

遺構番号	地区	形状	大きさ (cm)	深さ (cm)	主な出土遺物	時代	備考
SK-81	B9・10	円形	76×72	41	土師器皿、染付、瓦		
SK-82	B9	円形	64×62	17	染付皿		
SK-83	B9	円形	24×24	30	備前甕、焙烙Ⅰ類、瓦		
SK-84	C8・9	不定形	72×60	13	染付碗、瓦		
SK-85	C8・9			22	染付皿、瓦		
SK-86	C8	楕円形	56×34	35			
SK-87	B8・9	円形	52×49	10			
SK-88	B8	不定形	102×-	45	陶器掻鉢、施釉陶器、染付碗、瓦		
SK-89	C8	楕円形	33×22	7			
SK-90	C8	楕円形	58×34	6	瓦		
SK-91	B・C8	隅丸方形	25×30	21	丹波壺、染付碗		
SK-92	C6	円形	75×69	15			
SK-93	C7・8	円形	130×-	43	土師器皿、施釉陶器、染付碗、瓦	17c 末か	SK100と同じか
SK-94	C7	不定形	42×18	20	陶器掻鉢、焙烙Ⅰ類、瓦		
SK-95	C5	隅丸方形	84×58	6			
SK-96	C・B5・6	隅丸方形	132×115		土師器皿、白磁小坏、瓦		
SK-97	C7	円形	120×116	36	土師器灯明皿、丹波壺・掻鉢、施釉陶器碗、唐津鉢、染付碗・皿、焙烙Ⅰ類、瓦	18c 前 ～中	
SK-98	B4	楕円形	82×20	10			
SK-99	B3	円形	116×114	40	土師器灯明皿、備前甕、施釉陶器、土人形、キセル火受け・雁首・吸口、銭貨、瓦	18c	寛永通宝2枚、不明3枚
SK-100	C7	円形			土師器灯明皿、染付碗、瓦		SK93と同じか
SK-101	B9・10	円形	70×66	10			
SK-102	B4	円形	78×-	37	土師器皿・灯明皿、陶器甕、高台付掻鉢、施釉陶器、刷毛目唐津碗、染付碗、焙烙Ⅰ類、銅製おろし金、瓦	江戸後期	
SK-103	B・C4	長方形	381×109	174	土師器皿・灯明皿、丹波壺・掻鉢、陶器火入れ、刷毛目唐津碗、白磁鉢、青磁碗、赤絵碗、染付碗・壺、瓦	18c 前 ～中	
SK-104	B3	円形	84×-	35	施釉陶器碗、焙烙Ⅰ類		
SK-105	C3・4	円形	69×-	8			
SK-106	B4	隅丸方形	37×32	16			
SK-107	C4	隅丸方形	46×-	15	土師器皿、瓦		
SK-108	B3	楕円形	86×-		丹波掻鉢、染付碗、焙烙Ⅰ類、瓦	18c 初	
SK-109	B3	円形	89×80	32	丹波壺、施釉陶器、染付碗、瓦	18c	
SK-110	B3		96×-	36	土師器皿、染付皿、瓦		
SK-111	C2	円形	103×94	30			
SK-112	C1			31	土師器皿、施釉陶器皿、刷毛目唐津碗、染付碗、焙烙Ⅰ類、瓦	18c 中	

遺構番号	地区	形状	大きさ (cm)	深さ (cm)	主な出土遺物	時代	備考
SK-113	C1	方形か	121×-		土師器皿、丹波甕・播鉢、施釉陶器皿、刷毛目唐津碗、青磁染付碗、染付碗・皿・鉢、焙烙Ⅰ類	18c	
SK-114	C1	円形	102×-		土師器灯明皿、丹波甕・播鉢、施釉陶器、染付碗、瓦	18c	
SK-115	B8	円形	105×96	47			
SK-116	C7・8	円形	97×96	37	土師器皿、刷毛目唐津鉢、染付碗・瓶、瓦	18c	瓦溜め
SK-117	B6・7	隅丸方形	181×149	200	土師器灯明皿、丹波壺・甕・播鉢、陶器急須、施釉陶器、唐津碗、刷毛目唐津碗、青磁染付蓋、青磁碗、赤絵碗、白磁、染付碗・鉢子、焙烙Ⅰ・Ⅱ類、土人形、鉄釘、銭貨、瓦	18c	寛永通宝1枚
SK-118	B7	不定形	42×40	30			
SK-119	C5・6		-×118	27	瓦		
SK-120	C4		96×-	34			
SK-121	C3	隅丸方形	50×35	6			
SK-122	C3	不定形	37×36	4			
SK-123	C3	隅丸方形	32×30	6			
SK-124	C3	隅丸方形	30×24	8			
SK-125	B3	槽円形	33×20	9			
SK-126	D1		72×-		丹波播鉢、瓦		
SK-127	E1						
SK-128	F1		-×62				
SK-129	F1		48×-				
SK-130	F1						
SK-131	C9	不定形	30×22		丹波甕、染付、瓦		
SK-132	B6・7	長方形	668×171	172	丹波甕・播鉢、備前壺・甕、陶器火入れ、四耳壺、施釉陶器、褐釉陶器、刷毛目唐津鉢、青磁碗、染付碗、焙烙Ⅰ類、一石五輪塔、瓦	18c	軒瓦(有岡城か)
SK-133	C7	槽円形	55×-	23	染付碗、瓦	18c	
SK-134	C7	円形	58×-	41	陶器播鉢、磁器、染付碗、瓦	19c初	
SK-135	C7	長方形	63×50	4	土師器皿・灯明皿、磁器、瓦		
SK-136	C7	不定形	60×39	12			
SK-137	B7	隅丸方形	30×24		施釉陶器、瓦		
SK-138	B7	槽円形	30×22	8			
SK-139	B7	不定形	48×32				
SK-140	B7	不定形	144×74	11	土師器灯明皿、青磁、瓦		
SK-141	B7	不定形	20×19	5			
SK-142	C7	不定形	32×19				
SK-143	C7	円形	21×20				
SK-144	C7	隅丸方形	52×46	10	施釉陶器、染付碗、瓦	18c後半	
SK-145	B7	円形	30×29				

遺構番号	地区	形状	大きさ (cm)	深さ (cm)	主な出土遺物	時代	備考
SK-146	B・C7	円形	62×60	18	瓦		
SK-147	C7	長方形	92×34	10			
SK-148	C8	隅丸方形	30×18	8	染付碗	江戸	
SK-149	C8	円形	32×28	12			
SK-150	B8	隅丸方形	59×46	20	施釉陶器、瓦	江戸	
SK-151	B6	不定形	83×24	10			
SK-152	C6	楕円形	73×22	9			
SK-153	C6	円形	36×-		染付碗		
SK-154	C6	不定形	20×-	24	磁器		
SK-155	B2	楕円形	95×39	19	鉄製品		
SK-156	B2	円形	40×36	35			
SK-157	B2		—×117		染付碗、色絵、焙烙Ⅰ類、瓦	江戸	
SK-158	B2・3		72×46	27	土師器皿、陶器摺鉢、染付碗、鉄製品	江戸	
SK-159	B・C1		220×-	55	土師質火舎、丹波摺鉢、施釉陶器、染付碗・色絵、キセル、瓦	18c	
SK-160	B2	不定形	104×-	25	磁器、焙烙Ⅰ類		
SK-161	B2	不定形	64×-				
SK-162	E9	長方形か	—×416		土師器皿・灯明皿、丹波壺、施釉陶器、三島唐津鉢、青磁、白磁、染付碗、焙烙Ⅰ類、瓦	幕末	
SK-163	F9	長方形か			丹波摺鉢、施釉陶器鉢、染付碗・皿・鉢、焙烙Ⅰ類、瓦	18c後半	
SK-164	D9	長方形か	70×-				
SK-165					丹波摺鉢、青磁染付碗、染付碗、瓦	18c	
SK-166	B・C5・6	不定形	172×-	97	丹波摺鉢、備前大甕(V期)、筒形陶器、陶器火入れ、施釉陶器、染付碗、焙烙Ⅰ類、瓦	18c後半	
SK-167	C・D6	円形	118×-	98	土師器皿、丹波摺鉢、染付碗・坏、瓦		
SK-168	B・C2	隅丸方形		22	土師器皿		
SK-169	B6	円形	33×29	19	丹波焼、焙烙Ⅰ類		
SK-170	B8	円形	16×16	25			
SK-171	B8	円形	21×20	16			
SK-172	B・C8	円形	32×28	16			
SK-173	B・C7	隅丸方形	46×40				
SK-174	B7	円形	18×17	14			
SK-175	B6	円形	18×18	12	染付碗、瓦	18c前半	
SK-176	F6		—×160		丹波壺・摺鉢、刷毛目唐津鉢、染付碗・色絵蓋、瓦	明治以降	
SK-177	F7	不定形			土師器皿・灯明皿、丹波摺鉢、染付碗、瓦	18c初	
SK-178	B5						

遺構番号	地区	形状	大きさ (cm)	深さ (cm)	主な出土遺物	時代	備考
SK-179	E2	不定形	452×240	16	弥生土器壺・高坏、土師器皿・灯明皿、丹波擂鉢、施釉陶器碗・皿、刷毛目唐津、三島唐津鉢、染付碗・皿・壺、焙烙I類、磁石、鉄製品、瓦	18c	
SK-180	E2	円形	145×141	18	丹波擂鉢、施釉陶器碗・皿、青磁染付、染付、ガラス小玉	幕末	
SK-181	D2	円形	134×120	36	丹波擂鉢、施釉陶器、紅皿、染付碗、キセル雁首、瓦	18c前半	
SK-182	D1・2	隅丸方形	140×138	26	土師器灯明皿、陶器壺、染付碗、瓦	江戸	
SK-183	D2	横円形	—×76	20			
SK-184	D2	長方形	114×—	19			
SK-185	D2	円形	34×29		瓦		
SK-186	C・D2	不定形			施釉陶器碗・鉢・壺、染付碗、埴輪、瓦	江戸	
SK-187	D2				土師器皿、柿輪皿、丹波甕、陶器火入れ、染付碗、瓦	18c後半	
SK-188	C2	円形	122×—		丹波甕・鉢、陶器甕・蓋、施釉陶器碗(京焼系)、紅皿、三島唐津、染付碗	18c	
SK-189	C6		131×—		伊万里色絵鉢、焙烙II類、瓦		
SK-190	B8	円形	20×19	8			
SK-191	E2	不定形	117×78	13	土師器皿・灯明皿、丹波擂鉢、施釉陶器碗、染付碗、鉄製品、瓦	幕末	
SK-192	D・E2・3	長方形	514×—	57	土師器皿・灯明皿、丹波甕、施釉陶器、青磁碗、染付色絵、染付碗、焙烙I類、歌骨、瓦	幕末	
SK-193	E2・3	不定形	199×—	20	施釉陶器、染付、瓦	18c	
SK-194	E・F2	長方形	363×189	64	土師器皿・灯明皿、陶器火入れ、施釉陶器碗・皿、唐津碗、染付碗、焙烙I・II類、石材、瓦	18c	
SK-195	E2	長方形		34	土師器皿・灯明皿、陶器火入れ・擂鉢、染付碗・鉢、焙烙I類、硯、角釘、瓦	幕末	
SK-196	E・F2	不定形	182×166	24	陶器甕、施釉陶器行平鍋、火舎、染付碗、モルタル碗、瓦	18c	
SK-197	F2	隅丸方形	161×101	22	瓦		
SK-198	F2	円形	58×58	16			
SK-199	F2・3	不定形	152×—		古式土師器甕、丹波擂鉢、施釉陶器碗、染付碗、焙烙I類、瓦	江戸	
SK-200	F2						
SK-201	F2・3				土師器皿・灯明皿、丹波甕、染付碗、瓦	幕末	
SK-202	F2				土師器皿・灯明皿、備前甕、筒形陶器、染付碗、瓦	幕末	
SK-203	E6・7				土師器皿・灯明皿、備前大甕		
SK-204	E6			95	土師器皿・灯明皿、丹波擂鉢、耳付陶器、施釉陶器皿、染付碗・色絵碗、瓦	18c	
SK-205	C・D7				土師器皿・灯明皿、陶器擂鉢、磁器、染付碗	現代	昭和20年以降
SK-206	B・C6・7	不定形	78×—		瓦		

遺構番号	地区	形状	大きさ (cm)	深さ (cm)	主な出土遺物	時代	備考
SK-207	B6	円形	27×26		丹波摺鉢、陶器、瓦		
SK-208	B・C6	不定形	179×134		瓦		
SK-209	C2	長方形	301×-		陶器鉢、染付碗、瓦	江戸	
SK-210	C2	不定形			染付碗、瓦	江戸	
SK-211	C2				陶器摺鉢、染付碗、瓦	18c初	
SK-212	B6				土師器皿、瓦		
SK-213	B3				施釉陶器碗・鉢、染付碗、瓦	江戸	
SK-214	C3				丹波摺鉢、染付碗、ミニチュア土製品、瓦	江戸	
SK-215	C3	隅丸方形	72×-		瓦		
SK-216	D3		-×55		土師器灯明皿		
SK-217	C3	円形	24×22				
SK-218	C7	円形	114×110				
SK-219	B7	隅丸方形	44×40				
SK-220	B7		132×-				
SK-221	B4		91×84				
SK-222	C7						
SK-223	B・C8		113×-	27	埴輪、瓦		
SK-224	B・C8	不定形	54×37	20			
SK-225	C8		-×70	14			
SK-226	C8		45×-	8			
SK-227	C8	不定形	37×-	21			
SK-228	C8	不定形	41×37	38			
SK-229	B9	槽円形	57×21				
SK-230	B9	槽円形	40×18		染付皿		
SK-231	B9	槽円形	50×19				
SK-501	B2	円形	96×-	26	備前甕、施釉陶器碗、天目碗、瓦	江戸	
SK-502	B2		77×-	23			
SK-503	B2		57×-	25			
SK-504	B2	隅丸方形	-×29	8	瓦		
SK-505	B2			16			
SK-506	B8			21	瓦		
SK-507							
SK-508							
SK-509	B6	槽円形	64×-	22	埴輪		
SK-510	B6	不定形	60×-	13			
SK-511	B・C1・2	不定形					
SP-1	B9	不定形	62×55	60	染付、柱材、鉄製品、瓦		
SP-2	B5	不定形	35×34	18			

遺構番号	地区	形状	大きさ (cm)	高さ (cm)	主な出土遺物	時代	備考
SP-3	B5	円形	23×20	12			
SP-4	C5	隅丸方形	32×29	23			
SP-5	B5	円形	24×24	14			
SP-6	B10	円形	16×15	15			
SP-7	B10	円形	17×16	13			
SP-8	B8	円形	18×17	7			
SP-9	B・C8・9	隅丸方形	30×28	13			
SP-10	C7	不定形	29×13		瓦		
SP-11	C3	円形	18×17	10			
SP-12	B4	不定形	29×26	32			
SP-13	C3	隅丸方形	22×20	22			
SP-14	C3	円形	22×20	31	瓦		
SP-15	D1	円形	20×20				
SP-16	D1	円形	26×26				
SP-17	B8	不定形	35×28	27			
SP-18	C3	隅丸方形	25×23	49			
SP-19	C6	円形	22×22				
SP-20	C6	円形	22×22				
SP-21	C8	円形	29×19	9			
SP-22	C8	円形	20×20	21			
SP-23							
SP-24	B・C8	隅丸方形	28×22	22	丹波摺鉢、施釉陶器		
SP-25	B8・9	隅丸方形	31×26				
SP-26	B8	円形	19×18				
SP-27	B9	円形					
SP-28							
SP-29					丹波摺鉢、施釉陶器		
SP-501	B2	不定形	23×23	9			
SP-502	B2	不定形	14×11	10			
SP-503	B2	不定形	18×18	20			
SP-504	B7	隅丸方形	46×38	67	瓦		
SP-505	B7	隅丸方形	37×35	35			
SP-506	B7	円形	30×29	20			
SP-507	A・B7	円形	28×28	57			
SP-508	B7	不定形	30×22	8			
SP-509	A8	不定形	20×16	16			
SP-510	B6	円形	33×29	32			
SP-511	B6	円形	42×41				
SP-512	A4	隅丸方形?	—×46	53	土師器皿		
SP-513	A4	円形	30×30	17			

一覽とする。土坑の内、埋桶や木枠をもつものは図73に示した。また、溝状遺構の内SD-6は有岡城跡に伴う可能性が高いため、下層遺構の項で記述してある。

(3) 主な出土遺物

イ 上舘塚古墳関連の遺物

① 埴輪 (図74～76、図版27・28・29下)

埴輪には朝顔形埴輪を含めた円筒埴輪と形象埴輪があるが、形象埴輪は量的に少なく、器形に分かるものが少ない。埴輪各部位の名称などについては、『京都府平尾城山古墳』(近藤ほか1990)報告書に準拠する。

円筒埴輪 (216～318・329～333)

形態

全体を知りうるものはなく、240の突帯4本五段分を復元できたのが最大である。その最下段は器壁の厚さから第一段目に考えられ、基底部として307が取り付くものと思われるが、接合点を持たず、第一段目の高さは割り出せない。五段目の最上段には突帯貼りつけに伴うナデが認められるため、そのまま口縁部に移行するのではなく、さらに1本以上の突帯をもつものと思われる。全体としては六段構成になる可能性が高いが、七段構成の可能性も捨てきれない。六段構成の場合、口縁部には胎土の特徴と色合いから217が取り付くものと思われる。もしも七段構成になるならば、239が六段目にあてはまる可能性がある。

器壁の厚さについては、第一段目基底部を除く上部の器厚がおおむね8mmほどのものが最も多く目に留まる。しかし、1cm以上の厚手になるものや、5mm前後の薄手のものが含まれている。破片の中には突帯を境に厚さを減じるものがあり、口縁部に近い胴上半部を薄作りされたと思われるものがある。また、基底部の厚さが1cm以内のものがあり、全体を薄手に作ったものもあり、薄手のものが厚手のものを凌駕している。薄手のものは全体にシャープ観がある。

法量

口縁部、胴部、底部ともに全周する個体は1点もなく、すべて復元径である。それぞれの直径はつぎに示すとおり、おおむね大・中・小に分けて捉えることができる。口縁径は大が38.5cm、中が31.5cm～33.5cm、小が26.5cmに、胴径は大が35cm～37cm、中が25cm～32cm、小が21cm～24cmに、底径は大が26cm～29cm、中が22cm～25cm、小が17cm～18cmになる。

全体の高さについてもそれを知りうるものはないが、比較的残りのよい240を中心に推測が可能である。240の復元高は64cm、胴径は上部で30cm、下部で24.7cmを測る。突帯の間隔は、突帯の貼りつけ中点間で測って13cmである。口縁部については、240の口縁部と思われる217の口径が33.5cmを測り、最上段の突帯の痕跡が認められず突帯までの高さが10cm以上になる。最上段の突帯の痕跡を残す唯一の218は、口径31.6cm、突帯までの高さ8.5cmである。基底部については、240の基底部になるとと思われる307の高さが13.5cmまで残っており、底径は25cmを測る。ほかに基底部の高さがよく残っているものとしては304の13.5cm、305の15cmをあげることがで

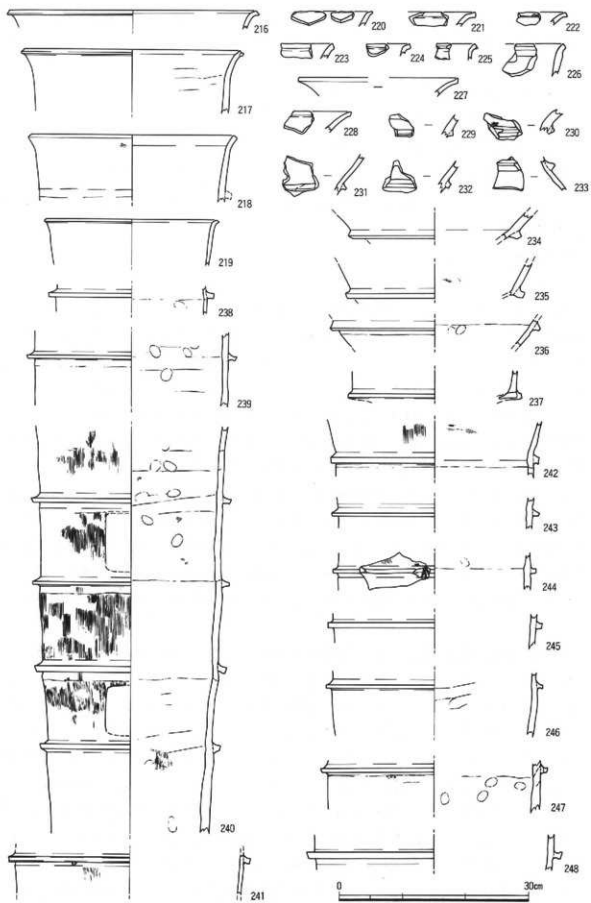


图74 上臈塚古墳埴輪実測图(1)

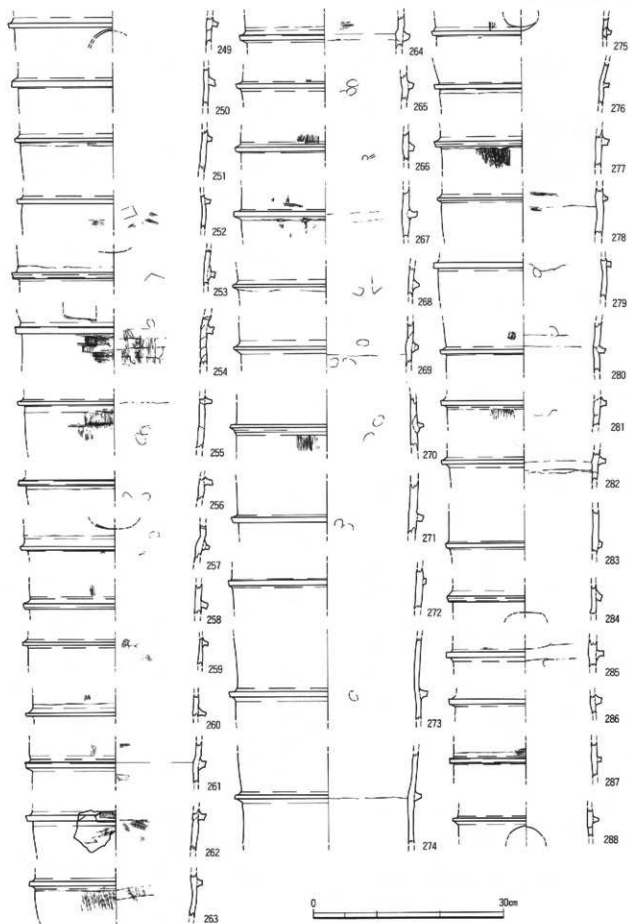


图75 上冢塚古墳埴輪尖刺图(2)

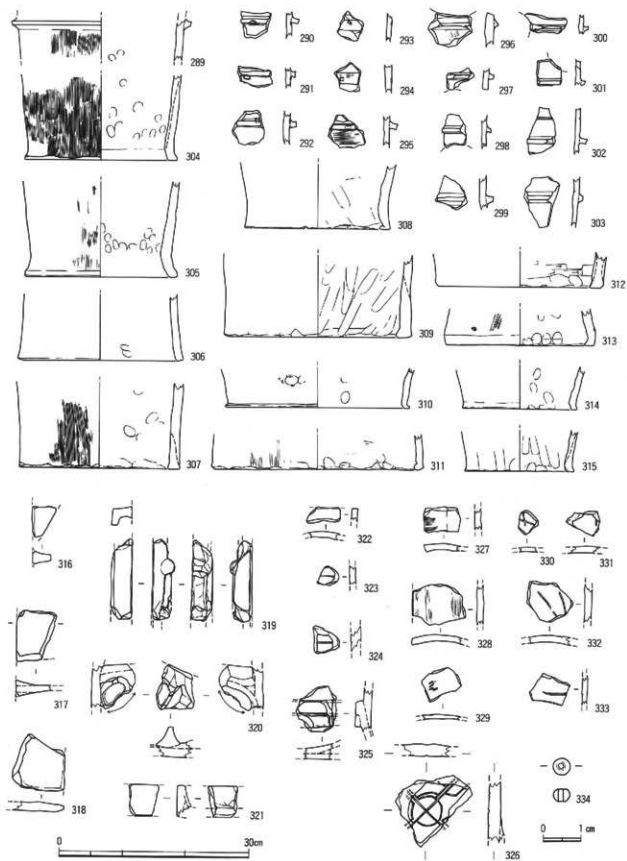


図76 上講塚古墳埴輪尖測図(3)・ガラス小玉尖測図

き、第一段目の高さは15cm以上に考えられる。以上のことから勘案して全体の高さを求めると、六段構成の場合と七段構成の場合とで13cmの差があるが、おおよそ80cm～95cmの間に復元できよう。

成形と調整

第一突帯まで残り基底部全体の分かる資料はないが、304は幅13.5cmの粘土帯を内側から積み上げて基底部をつくっている。ほかに10cmおよび6cm以上の粘土帯を積み上げているものもあり、304に代表されるように幅広い粘土帯を積み重ねて基底部を成形するのが一般的と思われる。積み上げ方は、304・315のように内側から積み上げるものと、307・309のように外側から積み上げるものがある。基底部の器壁は、1.5cm以上に厚くつくるのが一般的のようであるが、厚さ1cm前後で口縁部と見間違ふほど薄作りのもの(310・314・315)がある。313のように基底部の内側を指で押さえて底面を作るものも見られる。308の底には、成形後、丸い棒状の上に置かれたのか、半円形の線状窪みが認められる。

胴部の粘土紐巻き上げの痕跡を顕著に留めているのが254である。幅1.5cmの粘土紐を巻き上げて成形しており、これほど顕著なものほかに見られない。そのほか、幅3cm～5cmの粘土紐を積み上げた状況が読みとれるものが若干ある。今のところ胴部成形には粘土紐巻き上げと粘土帯積み上げの二種が認められるが、これが工人・工房差なのかは検討課題である。

つぎに調整については、表面の摩耗が激しく調整の不明なものが多いが、外面調整は縦ハケを基本とする。胴部のハケ目は、7～8条/cmが大部分を占め、10～12条/cmの細かいものがそれに次ぎ、4～5条/cmの粗いものは少ない。基底部のハケ目は、7～8条/cmの細かいものと、4～5条/cmの粗いものがあり、粗い方が多いように見受けられる。一部にハケ原体の幅が2.2cm～3cmに看取できるものがある。縦ハケは、ほとんどが一次調整であるが、267の突帯下部に二次調整の縦ハケ痕が見られるように、一部に二次調整のものがある。254には突帯の下側に一次調整の横ハケが認められる。量的には少ないが二次調整のA種横ハケが部分的に見られるもの(252・254・255・262)がある。

内面調整はナデを基本とするが、部分的に縦ハケ、横ハケを施す。基底部には縦ないし斜めに指ナデの強い条痕をもつもの(309・311・313・315)があり、312には底面から2cmのところより上に右回りのケズリが認められる。

口縁部の形態

器壁の厚さがすべて8mm以内と薄いためか、ほとんど細片ばかりである。口縁部の長さの分かるものは218だけで、突帯上部付け根から8.5cmを測る。217は残存長が10cmで、残存部には突帯接合痕が無く10cm以上になる。しかし、口縁部の長さが5cm前後の短いものがあるかどうかは、現資料からは不明である。

口縁部のまともな方法は、端部を外反、外傾させるのが一般的であるが、端部を外へ角度をつけて折り曲げるもの(224・225)がある。口唇部は、強いナデにより上部につまみ上げるようになるものと下方に拡張気味になるものがある。220は口唇部を外側へ水平に引き出しているた

め上端面をもつが、それ以外はすべてしっかりした外端面を形成する。217の外端面には細い粘土紐を貼り巡らし、外下方への拡張が見られる。

突 帯

突帯は全体に突出度が高く、端部の鋭いものが多い。突帯の形態は、肉薄で高く突出させて端部をつまむもの、やや肉厚で台形状を呈するもの、突出度はそう高くないが端正な箱形をなすもの、軽くM字状をなすものなどがある。240では第一突帯が肉厚の台形状を呈し、第二・第三・第四突帯が肉薄の高い（肉厚の2倍の高さがある）突帯をもつように、下と上では突帯の形態に変化が見られる。また、230・247・253・257・269・270・278の突帯は二重に粘土を積み上げてつくり出している。

241の突帯下部には、突帯の接合を補強するために5mm～6mmの粘土粒を充填している。さらに図示しなかったが、突帯の下部に粘土を補充したのも見られる。

突帯位置設定痕

突帯の貼りつけ位置を明示するために施したといわれている方形刺突のある小破片が5点(290～294)認められる。290～292の突帯の貼りつけは、方形刺突の上部か下部に片寄っている。293・294の方形刺突は突帯の剝離痕の中に位置する。

また、方形刺突と同じ意味をもつ「突帯間隔設定技法の断続横線」（竹谷・廣瀬2000）が262の突帯剝離部に認められる。断続横線は、長さ1.5cm、幅6mmで下向きに緩やかな弧を描く。

透 孔

透孔には、縦と横に切りきり込まれた直線のものと同弧を描くものがある。すべて破片のため、その全容を知りうるものはないが、直線ものは方形ないし矩形になり、弧を描くものは円形に想定される。これ以外に三角形や半円形、鉤形などに特定できる要素をもつものは現資料の中には見られない。240には二段目と四段目にあたる胴部に方形もしくは矩形の透孔があるが、段ごとの配置間隔などは不明である。

鱗

鱗が円筒部に取り付いたものはないが、244には突帯を切断し鱗を貼った痕跡、すなわち突帯の切り取り部にへら状工具で刻まれた深い切り込みが3条認められる。鱗付円筒埴輪の存在が窺える唯一の資料である。316～318は、鱗を構成すると思われる板状の破片で、このほかにもいくつか散見される。

へら描き線等

へら先状のもので線刻したもの（330～333）、水滴状に刺突したもの（329）の破片が少量出土しているが、全容の分かるものが無く、その構図や意味は分からない。

形象埴輪（319～328）

家形（図版27 319）、盾（325）、鞆（図版28 326）と思われる小片があるものの、ほとんど器種を特定できないものである。326には直弧紋が施されており、ここではそれについて記述する。因みに蓋形埴輪の出土は見られない。

326は、8cm×12cm大、厚さ1.7cmの板状の破片で、直交する斜交軸の交点を中心に円弧と直線を組み合わせた直弧紋が線刻されている。直弧紋はへら先状のもので深くしっかりと刻まれている。同様の紋様は、八尾市萱振1号墳（広瀬・高橋1992）、宇治市庵寺山古墳（高橋1988）、御所市室宮山古墳（秋山・網干1959）、上野市石山古墳（京都大学1993）の鞍形埴輪に見られる。それらの古墳の直弧紋は、小林行雄分類のC型直弧紋（小林1976）の構図を模倣あるいは表現しようとしている。それに対し、本資料の構図は本来の直弧紋からかけ離れ、変形したものになっている。それが洗練された図形かどうかは、破片が小さく、ほかに同一個体になるものが無く、紋様の全容を把握できないことに加えて、管見では同じ構図の類例もなく、直ちに決めつけられない。しかし、鞍形埴輪の中心を構成する紋様が直弧紋であることは前記の類例から捉えることができ、変形した直弧紋とはいえ、これを鞍形埴輪の中心を構成する紋様と考えられるのである。よって、この資料が鞍形埴輪になる可能性が高いといえよう。ただし、裏側に幅2.5cmほどの粘土帯の貼りつけが認められ、その取り付け方いかんによっては盾形埴輪になる可能性も残されている。

埴輪の胎土・焼成・色調

胎土は石英、長石、チャート、金雲母など1mm以下の細かい砂粒を多く含むが、クサリ礫を含むものはそう多くはない。含んでも細粒を少量含む程度である。焼成は黒斑を有する土師質で良好なものが多く、中には薄手で硬質を保っているものがある。表面の色調は淡橙色、黄橙色、黄灰色、黄褐色、橙褐色など明るい暖色系のものが多く、しかし暗灰色、灰褐色、灰白色系のものも見られる。

②ガラス玉（図76、図版27 334）

直径4.6mm、厚さ3.2mmのガラス製の小玉である。中央に直径1.3mmの孔が貫通する。色調は澄んだ水色を呈す。出土は古墳基底部の埋土ではなく、第2トレンチ検出のSK-180から検出された。これが上臈塚古墳に結びつく手懸かりはないが、おそらく上臈塚古墳に埋葬された主人公が着けていた装身具ではないかと思われる。

③板状の石材（図77 335～358）

板状剥離した扁平な石材が30点出土した。そのほとんどが古墳基底部の埋土から埴輪や葦石に混じって検出されたものである。30点中、24点を図示した。大きさは、大きなもので13cmほどしかなく、大部分が10cm以下の小片で、厚さは1cm前後から2.5cmである。石材は、335が緑色片岩で、ほかに図化していない黒色片岩の小片が1点あるが、残る28点はすべて安山岩である。

これらの石材はあまりにも小さく、その使用目的がはっきりしないが、古墳主体部の石室に積まれた石材の断片か、またはその余材が葦石とともに葺かれていたものと考えられる。葦石とともに板材が一ヶ所に固めて葺かれていた例は、神戸市所在の五色塚古墳がある。

□ 中・近世の主な出土遺物（図78・79）

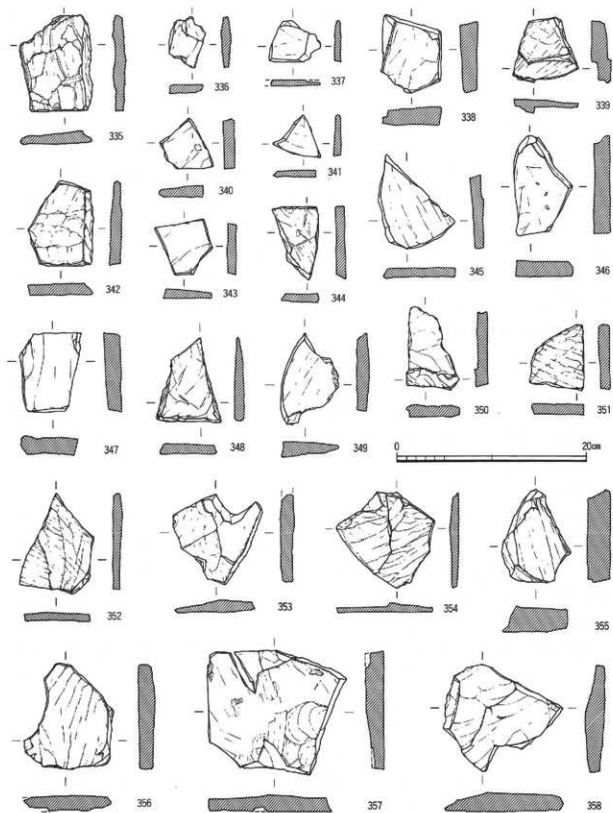


図77 上馬塚古墳関係の板状石材実測図

①土師器皿 (359~412)

54枚の土師器皿を掲げたが、その大半にあたる46枚は古墳基部埋土Ⅰ層上層からの出土である。残る8枚の内5枚は、381・394・397の3枚がⅠ層下層、362がⅡ層、383がⅢ層出土になり、古墳基部埋土では下層にいくほど極端に少なくなる特徴があげられる。しかもⅡ層、Ⅲ層からの出土は破片である。残る3枚は、390・391が第1トレンチB-3区のSK-110、412が第1トレンチ西拡張区の地山面検出のSP-512(図57)からの出土である。

土師器皿は、底部が内側に窪むへソ皿形のもの、窪まない丸底、平底のものがある(図版30上)。量的には半々の比率である。大きさは、口径が8cm以内の小皿が圧倒的多数を占め、続いて口径9cmほどのやや大きめのものが加わる。411は、口径10.2cmあり、中皿になる。

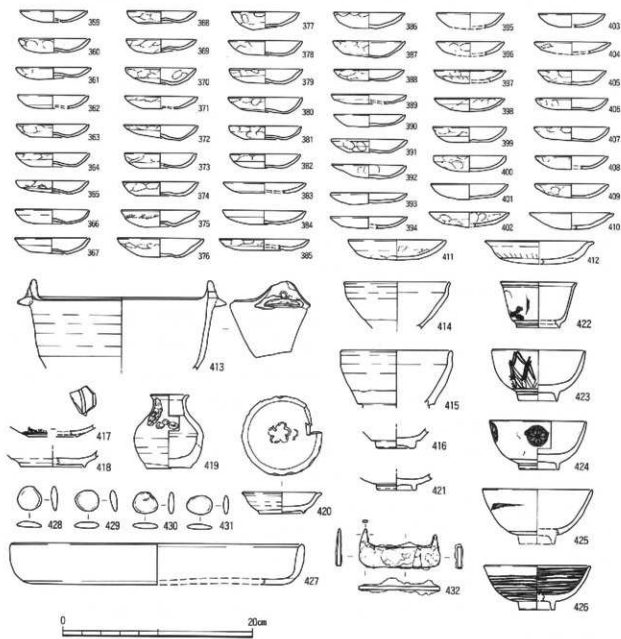


図78 中・近世遺物実測図

412は、口径11.4cm、厚手で硬質に焼かれている（図版27）。口縁部は横ナデされ、端部を外反させる。底部と口縁部の境には下から上へのヘラケズリが施されている。全体に丁寧な成形である。口唇部から内面全体に煤が付着しており、灯明として用いられたものであろう。

②瓦質土器鍋（413）

古墳基底部埋土I層上層から出土。復元径18cmを測り、取っ手孔の部分を山形につくる。取っ手孔の下には鈎が貼り付けてある。底部を欠くが、底部と口縁部の境はわずかに角度をもつて屈折する。器面は全体に横ナデ調整される。底部は火を受けている。

③天目碗（414～416）

414・415は古墳基底部埋土I層上層から出土し、416は同下層から出土した。414は薄手で、口唇部は茶褐色、体部は黒褐色釉が施されている。415は厚手につくられ、茶灰色釉が施されている。416は茶褐色釉である。いずれも瀬戸・美濃製であろう。

④中国製磁器（417・418）

417・418ともに古墳基底部埋土I層下層から出土した中国製磁器の底部である。417には青花の紋様が残るが、418は強い二次火を受けて表面の釉が完全に変色しており、青花なのか青磁なのかははっきりしない。

⑤陶器壺（419）

古墳基底部埋土III層から出土。備前焼の子壺で、口縁部の厚さに比べ底部の厚さが3倍もあり、ずっしりとした重さを感じる。底部は糸切り。体部上半から頸部にかけて敲打による剝離が数ヶ所あり、頸部に1ヶ所、数mmの穴があいている。内面には薄く鉄分の付着が認められ、お歯黒壺として使われていた可能性が高い（図版27）。

⑥施釉陶器（420・421）

420は、第1トレンチB-3区のSK-110から出土した瀬戸焼の灰釉小皿である（図版27）。見込みに印花紋を施す。高台内底部は無釉。皿の口縁部には敲打による剝離がほぼ全体に見られる。

421は、第3トレンチD-6区のSE-5出土の施釉陶器である。釉は灰白色を呈す。施釉は高台付け根の5mm上から内面にかけて行い、高台を含む底部は露胎である。

⑦伊万里染染付・唐津焼碗（422～426）

422・423・425は、第1トレンチC-3区のSK-214出土の染付碗である。422は端反りの湯飲み碗で草花紋をあしらっている。423は二重網目紋である。

424の染付碗は大きく真ん中で二つに割れており、第3トレンチのSF-7前庭部とSE-5から出土した2片が接合してほぼ完形となる。体部外面にコンニャク印判の花紋をあしらう。畳付は露胎。

426は、第1トレンチC-7区のSK-97出土の刷毛目唐津碗である。全体の色調は暗褐色を呈し、白色のハケ目を施す。高台の作りは高いが、体部は浅手である。畳付は露胎。

⑧焙烙（427）

第1トレンチSF-1の石積み裏の裏込めから出土。土師質で、口縁部は底部から肥厚しながら直

立し、口縁端部を尖り気味に丸くまとめる。底部は粗目に作られており、煤ける。

焙烙は町家遺構からたくさん出土しており、427と同形態のものには口縁部が内彎するもの、底部が弧を描いて深みを増すものなどもあり、小分類が可能である。また、この形態のほかに、口縁部を三角形にまとめ、そのまま緩やかに弧を描いた底部に直結する形式のものがある。口縁三角形のものも小分類が可能であるが、どちらかという、前者は身の深い型式になり、後者は身の浅い型式として捉えられる。そこで前者をⅠ類、後者をⅡ類に大別し、表4の一覧にその分類を記載しておく。

⑨碁石 (428～431)

古墳基底部埋土Ⅰ層の下層SX-1から火打金とともに面的に4点出土。すべて黒色で、直径2.5cm前後、厚さ0.6cmほどの自然石である(図版30中左)。

⑩火打金 (432)

碁石とともにSX-1から出土。長さ8.5cm、幅2.2cm、厚さ4mmほどを測る。木質部に装着する先端部にはわずかに木質が観察される(図版27)。

⑪瓦 (433～445)

おびただしい量の瓦が出土したが、ここでは緑釉瓦が出土した瓦溜土坑SK-132(第1トレンチB6～B8区)の瓦を取り上げておく。

433～440は軒丸瓦である。軒丸瓦はすべて左巻き巴紋で、周囲に珠紋を巡らす。441～443は軒平瓦で、瓦当に均等唐草紋を施す。

444は鬼瓦の断片で、鼻から右顔面の一部が遺存する。板状に成形された表面に鼻、髭を貼り付けて隆起させる。鼻筋には雑な刺突がほぼ一面に施されている。髭は弧状に跳ね上げた2本の隆起を貼り付ける。2本の髭は鼻筋の一所から派生して別れ、その2本の隆起の間に稜線から谷に向かってへら先で鋭い線刻を入れる。

445は緑釉の軒丸瓦になるが、瓦当部を欠損する。丸瓦部の凸面は丁寧にヘラケズリされ、緑釉が施される。緑釉は大部分が風化し、わずかに薄緑色に残る程度である。凹面には布目が観察されるが、瓦当との接合付近はナデにより布目が磨消されている。瓦の厚みは厚く、丸瓦部で2.3cm～2.7cmを測る。胎土にはチャート砂を多く含み、黄灰色を呈す。緑釉瓦は有岡城関連の瓦ではなく、平城京や平安京などの宮都または周辺の古代寺院から収集家によって拾われてきたものであろう。因みに、古代寺院に出土を求めるとすれば、伊丹市、尼崎市、芦屋市、川西市、豊中市の近隣寺院には緑釉瓦の出土例はなく、近隣以外に求めなければならないだろう。おそらく平城京か、平安京から運ばれた可能性が高いように思われる。

⑫銭貨 (図版30下 446～452)

446は北宋銭の「元符通宝」。初鑄年は1098年。古墳基底部埋土Ⅰ層下層出土。

447は北宋銭の「紹聖元宝」。初鑄年は1094年。古墳基底部埋土Ⅰ層下層出土。

448は「寛永通宝」。第3トレンチ出土。

449は「寛永通宝」のようであるが、よく分からない。第1トレンチB-6区のSK-117出土。

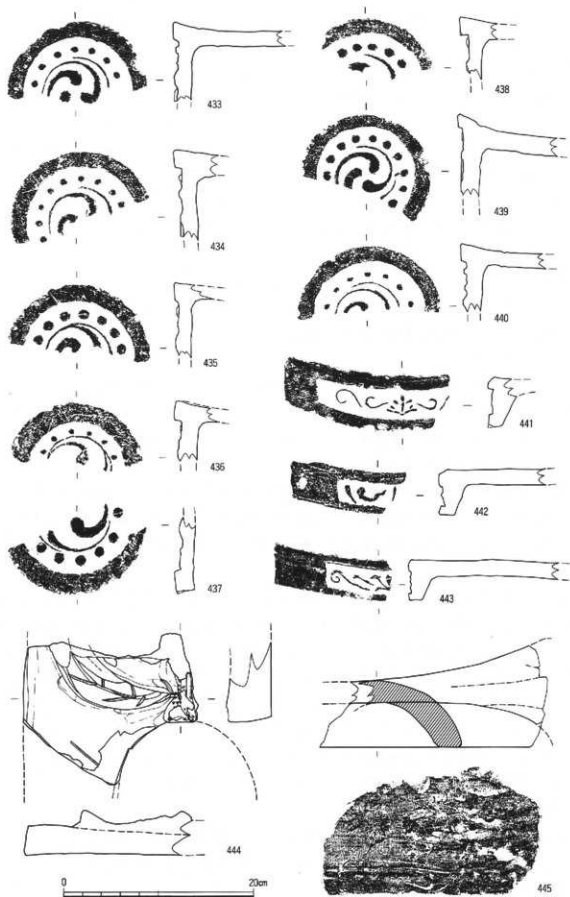


图79 SK-132出土瓦片测图

450は不明。第2トレンチD-2区のSK-181出土。

451は「寛永通宝」。第1トレンチC-1区のSK-114出土。

452は「寛永通宝」。第1トレンチ第5層出土。

3. 竈出土木炭・土の液体シンチレーション¹⁴C年代測定

京都産業大学理学部山田治教授にSF-1・4・5から採取した木炭・土の液体シンチレーション¹⁴C年代測定を依頼した結果は次の通りである。

(1) 測定試料

SF-1	木炭および土
SF-4	木炭および土
SF-5	木炭および土

(2) 測定番号

SF-1	KSU-1322
SF-4	KSU-1323
SF-5	KSU-1324

(3) 測定結果

SF-1	120±10BP	絶対年代 (A) AD1680~1730年 (B) AD1780~1830年
SF-4	260±15BP	絶対年代 (A) AD1540±15年 (B) AD1640±15年
SF-5	290±15BP	絶対年代 AD1520~1610年

4. 小 結

(1) 上臈塚古墳

このたびの調査で図らずも上臈塚古墳の跡が検出された。古墳はくびれ部の一方が遺存しており、後円部直径40mほどの前方後円墳であることが分かった。古墳基底部からは多量の埴輪と葺石と思われる川原石などが出土した。埴輪には朝顔形埴輪を含む円筒埴輪と家形・盾形・鞍形などの形象埴輪で構成されている。

円筒埴輪は、黒斑を有する土師質で、突帯の突出度が大きく、端部が鋭くまとめられ、第一次・第二次調整ともに縦ハケを主体とする。部分的に見られる横ハケはA種断続的なものである。こうした埴輪の特徴は、古墳時代前期に遡る特徴として捉えられよう。そして、鱗付円筒埴輪や、変形的とは云えしっかりとした図形の直弧紋が施された鞍形埴輪の存在に加えて、円筒埴輪の突帯直下に見られる円筒部の膨らみ、総体的な器壁の薄さ、外反して端部に面をもつ口縁部の形態などの諸要素は、川西編年(川西1978)のII期に比定できるものである。それは前期古墳の埴輪をA~Cの三様式に設定した都出比呂志のC様式にあたる(都出1981)。

埴輪の年代観については、同じくⅡ期に捉えられている鳥居前古墳と長法寺南原古墳の埴輪を比較することにより検討しよう。鳥居前古墳の埴輪は、突帯がやや鋭さを欠く台形を呈し、二次調整の横ハケが一部不規則ではあるが静止するものがあり、前期末から中期初頭の4世紀末～5世紀初に考えられている(福永ほか1990)。長法寺南原古墳の埴輪は、それより一段階古く捉えられている(都出・福永ほか1992)。上鷹塚古墳の埴輪は、鳥居前古墳のものよりは～二段階古い形態を備えており、長法寺南原古墳に近いが、それよりやや遡るものと思われる。年代的にはⅡ期前半の4世紀後半に比定されよう。

上鷹塚古墳の東方には猪名川をはさんで豊中台地上に大石塚・小石塚古墳がある。両古墳とも前方後円墳で、大石塚古墳の埴輪は川西編年のⅠ～Ⅱ期に、小石塚古墳は大石塚古墳よりやや新しくⅡ期に捉えられている(豊中市1980)。上鷹塚古墳の埴輪と大石塚・小石塚古墳の埴輪とを比較すると、上鷹塚古墳は突帯や透孔の形状などに大石塚古墳より新しい要素が多く含まれているのに対し、小石塚古墳とは器壁の厚さや透孔の形態、器壁調整などかなり共通する要素が認められる。小石塚古墳の段階、対岸の伊丹台地上の猪名野に拮抗する勢力が台頭し、猪名野古墳群(塚口古墳群)の盟主として上鷹塚古墳は君臨したものと思われる(浅岡2001)。

(2) 有岡城跡の遺構

有岡城跡に関連する遺構としては、丁度このあたりに上鷹塚砦の存在が推定されていた。上鷹塚砦は、有岡落城に際し、内応により最初に開かれた砦であり、その痕跡を留めていない。江戸時代、上鷹塚砦の悲劇を引って「女郎塚」の石碑が建てられたが、後に近くの墨染寺境内に移されて祀られるにいたり、砦跡はさらに不確かなものとなっていったのである。

本調査では、直接、砦跡に結びつく遺構は検出されなかったが、上記の古墳跡が検出されたことにより、それが「上鷹塚」と呼ばれていた古墳であり、古墳を利用して砦が築かれ、よって「上鷹塚砦」と呼ばれていたと推定された。古墳はそのまま利用されるのではなく、かなりの部分は削平され、物見台として利用された部分は高く盛り上げるなどし、大きく改変されていたものと思われる。第2トレンチで検出した堀跡は古墳推定範囲を縦断するように穿たれていて、この堀が砦に関連したものとすれば、古墳の半分近くは砦築造の折り、すでに削平されていたことになる。しかしながら、この堀跡が落城とともに埋め立てられたとすると、古墳に伴う埴輪や葦石がほとんど出土せず、砦に伴う堀跡かどうかは検討の余地がある。

有岡城期に属する遺構としては、堀跡のほかにSD-6の溝状遺構がある。どちらも東北東から西南西方向に延びている。砦跡の範囲や構造が分からない現状では、これらの遺構を即そのまま砦に結びつけるわけにはいかず、将来の課題として残さざるを得ない。

(3) 酒造用関連遺構

有岡城は、伊丹が豊臣秀吉の天領となると同時に廃城となった。そして、伊丹は工商人の町として復興し、特に酒造の町として知られるようになったのである。町には活気があふれ、雲

正坂から猪名川を下って江戸へ送られた酒は、武士階級を中心に「丹醗酒」としてはやされた。こうした江戸時代の伊丹の姿を雄弁に物語ってくれるのが酒造関係の遺構である。

調査地区からは、江戸時代以降の電や土坑、井戸などが多数検出されたものの、警察署の建物基礎以外は明確な建物は確認できず、酒蔵の規模や構造なども分からないのが実状である。しかし、SF-1やSF-6は酒造用の電になるであろうし、そのほかの小さな電もそれに付帯するものかもしれない。SF-2の南西にある、焼土と粘土で固められた方形の三和土状遺構SX-2も酒造りに関係した遺構の可能性が高い。

今後、伊丹郷町の調査が進行していく中で、町家と酒蔵との関係なども明らかになっていくことを期待する。

〔註〕

- (1) 当初、市教育委員会は敷地の南半分に3ヶ所の2m四方の掘りを行ない、それで調査完了とする無茶苦茶な指示を出し、社会教育部長以上の上層部はそれを強行しようとする方面に画策を行なったが、徒勞に終わった。ようやく最低限の発掘調査にこぎつけたにもかかわらず、表土掘削の重機の前に立ちただかる基準に出、開発部局からたしなめられる一幕もあった。

〔主要参考文献〕

- 秋山日出雄・網干善教 1959「室大墓」『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告18』奈良県教育委員会
浅岡俊夫 2001「信長に消された猪名野の前期古墳—上賜塚古墳—」『実証の地域史—村川行弘先生頌寿論集』大阪経済法科大学
川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会
京都大学考古学研究室 1993『紫金山古墳と石山古墳』京都大学文学部博物館
小林行雄 1976「直弧文」『古墳文化論考』平凡社
近藤喬一ほか 1990『平尾城山古墳』（古代学研究所研究報告第1輯）財古代学協会
高橋克壽 1988「器財埴輪の編年と古墳祭祀」『史林』71巻2号
竹谷俊夫・廣瀬覚 2000「天理西山古墳外堀出土の埴輪棺墓について」『天理参考館報』第13号 天理大学出版部
都出比呂志 1981「埴輪編年と前期古墳の新古」『王陵の比較研究』（昭和54年度科学研究費補助金（総合A）研究成果報告書）京都大学文学部考古学研究室
都出比呂志・福永伸哉ほか 1992『長法寺南山古墳の研究』（大阪大学文学部考古学研究報告第2冊）大阪大学南原古墳調査団
豊中市教育委員会 1980『史跡大石塚・小石塚古墳』（豊中市文化財調査報告第6集）
難波洋三 1992「徳川氏大坂城期の焙烙」『難波宮址の研究』第九（財大阪市文化財協会）
広瀬雅信・高橋克壽 1992『壹振遺跡』（大阪府文化財調査報告書第39輯）
福永伸哉ほか 1990『鳥居前古墳—総括篇—』（大阪大学文学部考古学研究報告第1冊）

XIV 第21次調査

・調査期間	1986年2月5日～3月31日
・調査地	伊丹市伊丹1丁目578・579・583、2丁目579～583
・調査原因	国鉄伊丹駅前市街地再開発事業
・調査組織	有岡城跡発掘調査団
調査団長	橋本 久
調査主任	浅岡俊夫
補助員	熊田真子 佐藤あゆみ 高橋里美 谷のりえ 谷口美恵子 辻初美 萩野 典子 姫路真保 細川佳子 (以上大手前女子大学) 逸見雅之 和田秀寿 (以上龍谷大学) 河野克人 (関西大学OB) 伊藤潔 濱野俊一 (以上大阪 経済法科大学) 福井千代子 (主婦)

1. 調査方法

昭和54年12月、有岡城跡は主郭の一部と惣構え外郭線の道路敷きが国史跡に指定されたのであるが、国鉄伊丹駅前市街地再開発事業遂行の絡みの中で、主郭の西側を取り巻く内堀跡を整備し、史跡に追加指定する問題が提起された。それを受けて、国庫補助事業として内堀の外側西辺範囲確認調査を実施した(図版23上)。確認調査は補助金事業に係る文化財の設計書にもとづき、家屋立ち退きの完了したところに、当初、3本のトレンチを設定し、南から第1・第2・第3トレンチと命名した。さらに、調査の過程で堀跡の方向を詳細に検討するため、第2トレンチの北側5mに、立ち退き未完了の家屋に沿って4本目のトレンチを設け、これを第4トレンチとした。また、堀の深さを測定するために第3トレンチの東側、堀跡の中央に深度11mのボーリング調査を実施した。ボーリング調査は㈱ソイルコンサルタンツに委託した。各トレンチ、ボーリング地点は図80のとおりである。発掘調査面積は184㎡である。

第1トレンチは、設定場所が主郭の西南部に位置し、主郭を取り巻く内堀が南北方向から東西方向に折れ曲がる付近にあたるため、10m×10mの正方形に設定した。

第2トレンチは第1トレンチの北側37.5mに設定した。規模は東西長18.5m、幅3mである。

第3トレンチは第2トレンチから北へ58mのところに設定した。そこは主郭の西北部にあたり、東側に残存土塁がみられる。規模は東西長9m、幅2mである。

第4トレンチは長さ3.5m、幅0.8mである。

2. 調査概要

調査の結果、検出した遺構は城に伴う堀跡の他に、町家の土坑や井戸などがある。堀跡は内

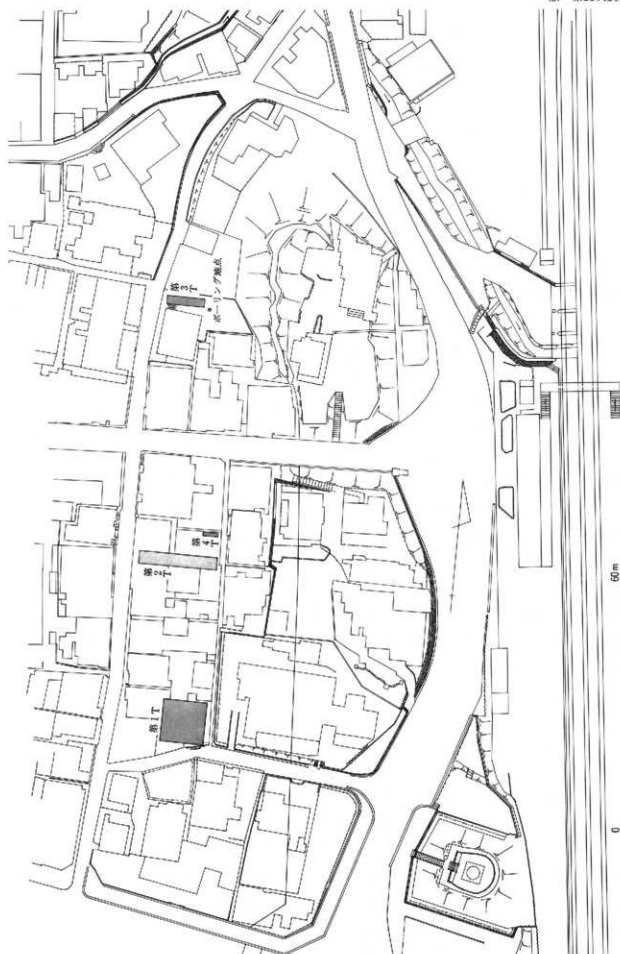


図80 第21次調査トレンチ配置およびボート・リング地点図

堀以外に、堀1、堀2とした小堀を2本検出した。堀1は第1トレンチ、堀2は第2トレンチからの検出である。しかし、当初の目的が内堀の範囲確認にあるため、ここでは城に関係した堀跡を中心に記すこととする。

(1) 第1トレンチ (図81、図版23下)

内堀 (図版24上)

内堀の外肩は、第1トレンチの北東杭から西へ2.2mのところから南東杭に向かって緩やかに弧を描くように検出した。そのラインはトレンチの南東隅を越えたあたりで東へ大きく折れ曲がって、第5次調査で検出したラインへとつながるのである。内堀は肩から深さ1mしか発掘しなかったが、ほぼ垂直に近い勾配でもって落ちている。

堀1 (図版24下)

堀1は、内堀が東へ折れ曲がる南東角から西南西方向に伸びる小堀である。しかし、堀の大部分は調査区外にあり、片側の肩を検出したにとどまり、堀幅など全容は不明である。深さは約2mである。すぐ近くに住む古老の話では、子供の頃、深く下がった通路になっていて、母親などが石炭殻や練炭殻などで徐々に埋めていたのを思い出す、ということであった。その話の内容から、堀1の南側のラインは現在市道となっている幅員3mの南端に沿うものと思われる。とすれば、堀幅は5mほどになる。

内堀と堀1との接続については、ちょうどその部分にコンクリート枠の井戸(SE-1)があり、その部分を思うように発掘できなかったため詳らかでないが、堀2の底がそのまま内堀につながるのではなく、堀底から1.5mほど地山が盛り上がり水が溜まるようになっていたようである。

SK-48

堀跡以外に城跡に関係する遺構・遺物としては顕著なものは見られないが、礫溜土坑であるSK-48から瓦質羽釜、天目碗、白磁、鉄釉陶器、備前焼甕・播鉢、瓦など、城存統期の遺物が少量出土した。

(2) 第2トレンチ (図82)

内堀 (図版25上)

内堀は第2トレンチの東端から西へ約1.5mのところ、トレンチの東西軸に直交して検出された。その延長線は第1トレンチ検出線とはほぼ直線で結ばれる。なお、堀の肩から内側へ1mほど入ったところに、後世に積まれた石垣が遺存していた。石垣はトレンチの北辺から南へ2mのところまで終わっており、もともとそこで終わっていたのかどうかは確認できなかったが、廃城後、堀が埋め立てられ、狭められていった新たな土地利用の様子を窺わせるものである。石垣は、20cm～30cm大の礫を野面に積み上げたもので、江戸時代末の絵図には描かれている。おそらく江戸時代後期に積まれたものであろう。

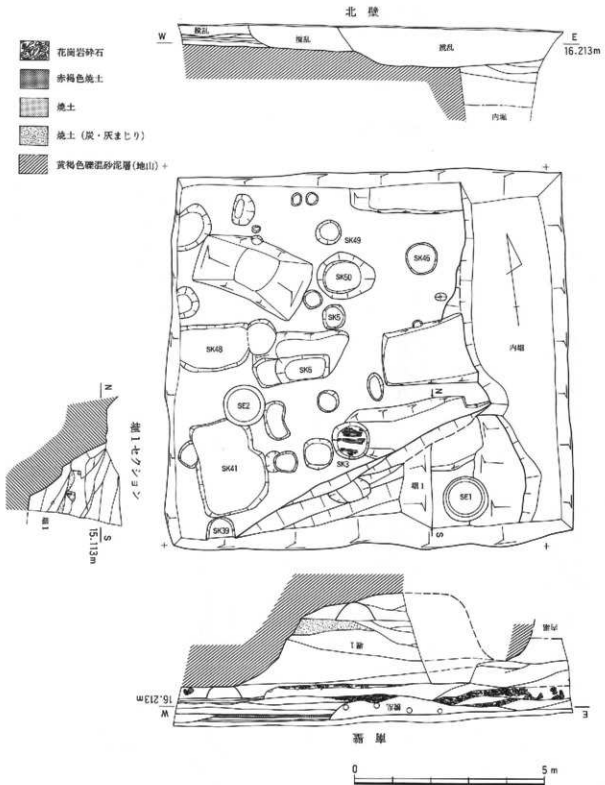


図81 第1トレンチ検出遺構平面図と土層断面図

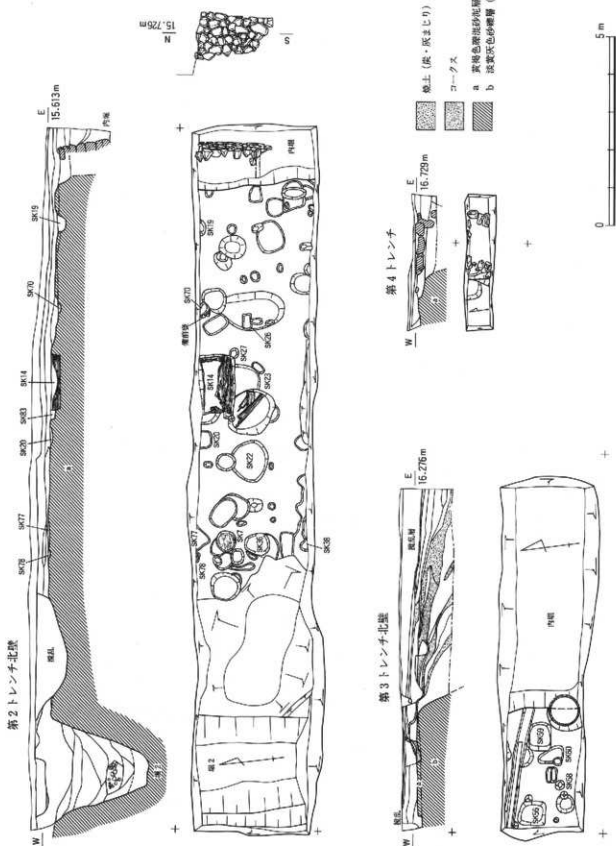


図82 第2・3・4トレンチ検出遺構平面図と土層断面図

堀 2 (図版25下)

堀2は第2トレンチの西端から検出された。内堀との間隔は14mである。規模は、幅3m、深さ2.5mで、V字形を呈す。出土遺物から見て、有岡落城時または廃城時に埋め立てられたと思われる。

土 坑

城存続期の遺物を出した土坑にSK-26・27・28・36・38・70の6基がある。しかし、ほとんどの土坑は後世の土坑に切られていたり、調査区外に伸びており、規模や性格などは不明である。

SK-26は、38cm×23cmの長方形を呈し、土師器皿や瓦、古墳時代須恵器が出土した。SK-27からは瓦器碗、土師器皿が1点ずつ、SK-28からは土師器皿や土師器が数点、SK-36からは瓦器、古墳時代須恵器、SK-38からは瓦器、土師器皿、備前焼甕底部、SK-70からはIVb期の備前焼甕の口縁部と体部が出土している。

(3) 第3トレンチ (図82、図版26上)

内堀は、トレンチの西辺から3.1mのところ検出した。残存土塁の法下との間隔は約15mをはかる。堀はコークスや焼土などで埋め立てられており、国鉄(現JR)福知山線の前身である阪鶴鉄道開通後に、急速に埋め立てが進められたようである。

標尺	深度(m)	柱状図	土質名	地質系統	観 察
1	3.10		砂 礫	沖積統 沖積層	ガレキの多い比較的新しい埋土。
2					
3					
4	6.10		礫・砂 混りシルト	沖積統 沖積層	上部腐植物及び臭気ある古い埋土。
5					
6					
7	7.80		粘 性 土	洪積統	粘性土と砂礫の互層状態の地山層。
8					
9	8.70		砂 礫	洪積統	
10	10.60		粘 性 土		
11			砂 礫	段丘層	

図83 ボーリング調査結果概略図

土質調査柱状図

調査場名		有開成陸路第2次調査に伴う開成ボーリング調査									
調査場所		伊丹市伊丹1丁目地内									
調査地点		No. 地盤高 OP+11.85 m									
調査期間		昭和61年3月6日～3月6日									
試錐工法 Rotary Boring & S.P.T											
孔内水位 GL-2.70m (保水位)											
株式会社 ソールコンサルタンツ											
調査責任者 村上 治											
標尺 (m)	標高 (m)	深度 (m)	層厚 (m)	柱状図	色調	土質名	銀	察	試験採取深度 (m)	標準貫入試験	N 値
0											
1											
2											
3	-14.75	3.10	3.30		暗褐	砂			3.15	8	3
4					茶褐	砂			3.45	3	2
5									4.15	1	3
6	-11.75	6.10	3.00			礫・砂混シルト			4.55	2	2
7	-10.95	6.90	0.45		緑灰	粘土混り砂礫			5.15	1	1
8	-10.05	7.80	0.90		黄褐	砂質粘土			5.50	3	1
9	-9.15	8.70	0.90		暗灰	砂質シルト			6.15	1	1
10	-7.25	10.60	1.90		淡緑灰	砂			6.45	21	8
11	-6.52	11.33	0.73		暗灰	粘土			7.15	7	2
									7.45	2	2
									8.15	50	25
									8.34	19	24
									9.15	6	2
									9.45	6	2
									10.15	8	2
									10.45	8	2
									11.15	50	32
					黄褐	砂			11.33	18	18

図84 ボーリング調査柱状図

(4) 第4トレンチ (図82、図版26下)

第1・2トレンチで検出した内堀と第3トレンチで検出した内堀は、そのまま直線で結ぶことができず、途中でどこかで折れ曲がっていることが明らかになった。そこで、第2トレンチからできるだけ北側で、立ち退き未完了の家屋に接して第4トレンチを設定した。その結果、第2トレンチの内堀のラインよりも若干西へ寄るものの、第2トレンチの延長線上に内堀を確認した。それにより、第3トレンチの内堀に向かって折れ曲がる場所は立ち退き未完了の家屋の下になることが判明した。

(5) ボーリング調査 (図83・84)

ボーリング調査は、低速ハンドフィード型ロータリー式ボーリング機械を使用し、ベントナイト泥水循環法により行った。ボーリングで得られた層位は、表土下3.1mまでが瓦礫を多く含む比較的新しい埋土で、それ以下6.1mまでが腐植物を含む比較的古い埋土になる。地表下6.1mを境に内堀の埋土と地山(粘土と砂礫の互層)とに分かれる。

これにより、堀底は地表下6.1m(標高10.45m)に求められる。

3. 小 結

有岡城跡主郭の西側を取り巻く内堀は、幅約15mの規模で巡っていたことが分かった。しかし、それは直線的に伸びるのではなく、第3トレンチと第4トレンチの間で食い違いになっているようである。かつて、国鉄伊丹駅前から西に伸びる東西道路の下水工事の立会で堀の範囲を確認しており、その範囲は第3トレンチで検出した堀の範囲と一致することから、より厳密にはその東西道路と第4トレンチの間ということになる(図85)。そこには立ち退き未完了家屋があり、おそらくその下で食い違っているものと思われる。その後の調査に期待がかかる。

内堀の深さについては、発掘調査で確認はできていないが、今回のボーリング調査で6.1m、第13次調査のボーリング調査で6.5mを測っており、おおむね6m～7mの間で推移しているようである。

つぎに、第1・2トレンチで検出した堀1・2は、第1次調査や第5次調査、大手前女子大学が実施した第23次調査などでも確認されている。堀幅3m～5m、深さ2m～3m程度の小中の堀は主郭の周辺に縦横無尽、網の目のように張り巡らされていた状況を窺い知ることができる。それらの堀の全容はほとんど分かっておらず、その機能については今後の課題であるが、絵図などから町家の中が堀と土塁で複雑に区割りされていた様子を読みとれるように、主郭を取り巻く内郭(侍屋敷)も同様に複雑に区割りされていたものと思われる。つまり、惣構えの中は大小さまざまな堀で区割りされ、土塁が巡らされて、容易に主郭に近づけない構造になっていたのである。

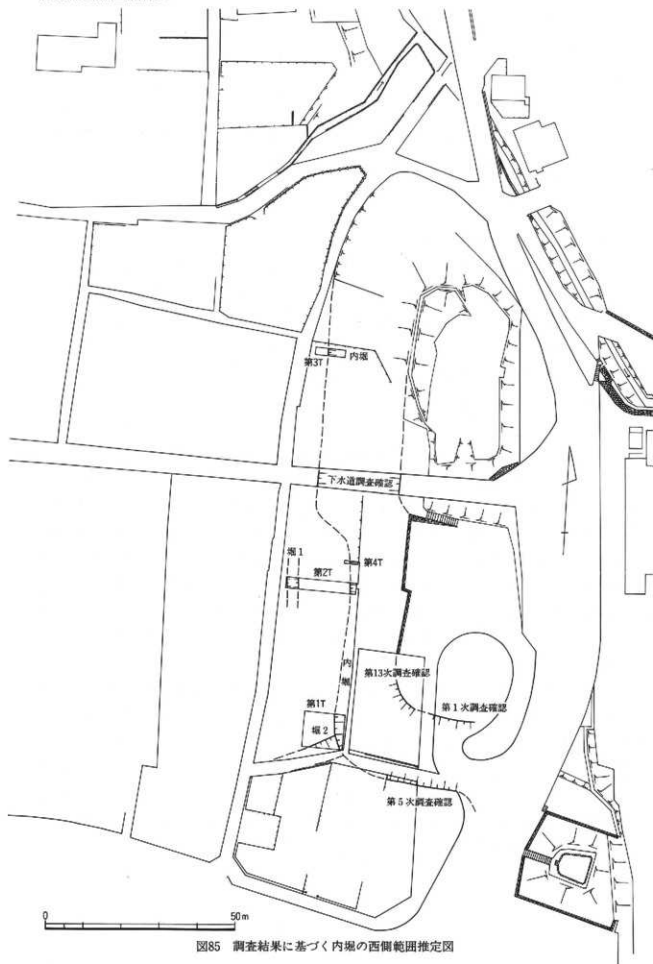


図85 調査結果に基づく内堀の西側範囲推定図

XV 第22次調査

・調査期間	1986年2月21日～2月24日
・調査地	伊丹市中央2丁目483-3
・調査原因	道路新設工事
・調査組織	有岡城跡発掘調査団
調査団長	橋本 久
調査主任	浅岡俊夫
補助員	河野克人 谷口恵美子 福井千代子

1. 調査の経緯と調査方法

社会経済会館西側の中央2丁目地先において東西長60m、幅員6mの市道建設工事が有岡城跡内にもかかわらず、教育委員会に相談もなく進められていたが、工事中、偶然市民が掘らし溝遺構を見つけ、市教育委員会へ通報された。しかし、通報があったにもかかわらず教育委員会はそれを無視し、工事は続けられたため、それが報道機関の知るところとなり、市教育委員会は急遽、兵庫県教育委員会へ指導を仰ぎ、その一部分が調査されることになったのである。

調査されることとなった地点は、市道建設地の東端部、長さ7mと短い範囲である(図86)。道路予定地は、すでに側溝部分に捨てコンが打たれており、調査可能な範囲は3.5mしかなく、しかも中央部には下水道管が埋設されていた。調査は十分な予算も、期間もなく、地山而まで機械掘削した後、遺構検出を行った。調査面積は37㎡である。

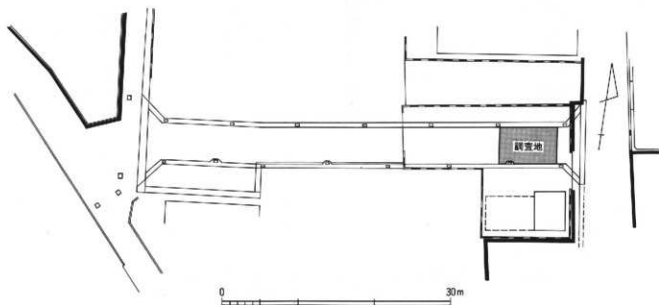


図86 第22次調査範囲図

2. 調査概要

検出した遺構には土坑、井戸、礎石、柱穴がある(図87)。主な遺構の概要はつぎのとおりである。

SK-1は直径約50cmの土坑である。土坑は二段に掘り窪められている。土坑の中央に宝篋印塔の返り花台座を裏返しに置き、その三方を囲んで15cm大の川原石がそえられていた。台座の下には平瓦と丸瓦が数枚重ねて埋められていた。江戸時代後期に考えられる。何か宗教的なにおいがするが、性格は不明である。

SK-2は、SK-1の東2.2mに位置する直径約50cm、深さ15cmほどの土坑である。土坑の中央には30cm大の扁平な川原石が埋設されていた。SK-1と対をなすものとすれば、建物の柱穴になる可能性が強い。しかし、今回の調査範囲内からは性格不明とせざるを得ない。

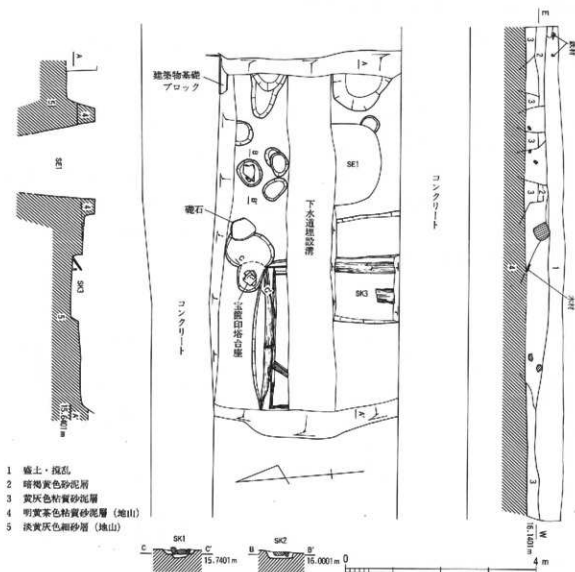


図87 検出遺構平面・断面図と土層断面図

SK-3は方形に掘られた大土坑であるが、その大半が調査区外にあり、全容は不明である。土坑の辺に沿って廃材を二重に組み合わせた木柵施設をもつ。外枠は東西約3m、内枠は2.8m、深さ50cmをはかる。南北の規模は不明。

SE-1は直径1.7mの素掘りの井戸である。深さ1.5mほど掘り下げたが、中にはガラス瓶、化粧瓶、セメント鍍、セルロイドなど現代用品が投棄されており、十数年前頃に廃棄されたものと思われる。

そのほか、直径50cm～100cmの土坑やピットを10基ほど検出し、中には練り石が入れられた土坑もあったが、すべて江戸時代から近代にかけてのものである。また、SK-1とSK-2の間に50cm大の礎石が1点据えられてあったが、これと対になるものは調査区内には見あたらなかった。

3. 小 結

検出した遺構は、すべて江戸時代後半から近・現代にかけての町家遺構で、有岡城に関する遺構は確認できなかった。しかしながら、出土遺物の中には図示しなかったが江戸時代以前に廻る瓦が数点含まれており、周辺に城跡に関係した建物跡の存在が考えられる。

跋

年初めの午後、久しぶりにJR伊丹駅から歩き出した。なにもかも変貌している。改札口から右斜め前方に長大な陸橋がかけられ、ダイヤモンド・シティへ。広大な工場跡地が、ショッピング・センターに変わっていた。もしこの構想がかつての国鉄駅前再開発事業の企画当時に可能であつたら…、と無念の思いに再び駆られた。

私が伊丹市に通い出したのは、昭和33（1958）年12月25日に始まった伊丹鹿寺跡の調査からである。当時、甲陽学院高校2年だった。地歴部の一員として、甲陽史学会の田岡香逸・高井悌三郎・宮川秀一3先生の指導のもとに、発掘調査に参加した。その後の十余年の調査に従事するそもそもの始まりであった。

高井悌三郎先生の推薦で、伊丹市史考古編の作成を手伝い、また昭和45年から伊丹市立博物館の開館準備を担当した。ひきつづき伊丹市内の埋蔵文化財保護にも従事した。当時、国鉄駅前再開発事業を知り、ただちに旧伊丹城・有岡城跡の発掘調査の必要性を説き、鈴木充教授を調査団長としての発掘調査を開始した。今日の伊丹郷町調査に続く事業の発端であった。この調査が契機となって、有岡城跡も伊丹鹿寺に続いて国の史跡に指定された。市内に国指定史跡が2ヶ所となった。史跡有岡城跡は惣構えを含むが、全域指定ではなく、全国的にも珍しい内郭の遺存部と惣構えの外郭線による、いわば点と線による指定である。

その後、伊丹市内の埋蔵文化財調査作業を浅岡俊夫氏に引継ぎ、本務校の仕事に専念するようになった。しかし、伊丹市での文化財保護業務は、必ずしも部内の全面協力を得ているとはいいがたくなった。新任の社会教育部長が、文化財保護にはほとんど無理解で、むしろ調査妨害にひどい指示をしばしば出すに至った。今回の調査報告書の中心となる第20次調査は、この部長の妨害を排しつつ、日々の作業を進めなければならなかったという鮮烈な苦い思い出をともなう。

旧伊丹町の中心地は、昭和30年代までは戦災も受けていないため、僅かに戦争中に拡幅された産業道路（現在の県道尼崎一池田線）に面した部分が変化を被った程度であった。江戸時代から明治・大正・昭和初期にかけての建物が整然と並ぶ貴重な住空間であった。古い建物の景観を変えずに保存していくことはできないか、と日々腐心した時期もある。とりわけ大阪から神戸にかけての阪神間のほとんどが戦災を被り、唯一といってもいい貴重な景観であった。唯一の大きな問題といえば、町の中心を東西に横断している、神戸から大阪空港に至る道路が昔のままではせまく、渋滞と歩行困難、騒音・排気ガスなどの公害をもたらしていることであった。

おりからの経済成長の中で、すでに町の西側に移った阪急伊丹駅を中心とした新市街に続いて、市当局は国鉄駅前の再開発計画を立てた。たしかに当時は阪急駅前にくらべて乗降客数は

少なくなっていた。高層住宅建設を伴う、この計画は従来の生活環境を大きく変化させることは間違いなかった。しかもその功罪を予測すると、必ずしも手放しでは賛成できない点が多々あった。駅前開発室との協議の中でも、私見をのべた覚えがある。

JR伊丹駅から西の町に入る陸橋も新しく増し、これまでの上がり下りの苦勞が少なくなった。高層住宅ビルのアリオ2棟いずれも、大修繕中として、すっぱりと全体をネットと足場でおおわれていた。あらためて建ってからの年月経過を考えさせられた。旧町の中心部はかつて立ち退きであげられたままの空間が今も残る。再開発事業の対象区域の旧住民はどうしているのだろうか。かつてより快適な生活を営めたのだろうか。この地にいまも住んでいるのだろうか。全く異質な空間が造られ、新米の住民が圧倒的大多数を占めているのではなからうか。旧来の小売店舗は、今も近くで続いているのだろうか。阪神大震災後の広範な景観変化と重ね合わせつつ、様々な想いが浮かんだ。

宮の前商店街は短くなり、ますますどちらの駅からも離れていった。ごく一部の近世建築が復元され、手厚い保護の対象にはなったが、それを取り巻いた面としての空間は、自然災害や戦災ではなくて、折々の施政のもとで破壊されていった。たしかに一見快適な空間が部分的には形成されたが、失ったものの大きさにどれだけ関心が払われたのだろうか。

シティホテルの敷地が第20次調査の対象区域であった。大きく市街地改造が進み、高層建築物の築造に拍車がかかりはじめた頃である。伊丹郷町の町家の跡のみならず、未知の前方後円墳まで検出したことにより、この地が古代以来の要衝であったことを、さらに確かめることにもなった。その他の調査も部分的ではあっても、今日の伊丹郷町発掘調査の前提となった貴重な作業であった。これまでも一部を紹介したことはあるが、調査成果の全容をようやく明らかにすることができた。

橋本・浅岡の両名が、心ならずも伊丹市の文化財行政と袂を分かって以来、長い年月を経て、ここにかつての調査責任の一端を果たすことができた。あらためて、当時の調査参加者・関係者と報告書に直接携わった方々、報告書作成の機会を設けるために努力された伊丹市教育委員会の関係者各位のご努力に深く謝意を表したい。

2003年1月

有岡城跡発掘調査団

団 長 橋 本 久

報告書抄録

ふりがな	ありおかじょうせきはくつちょうさほうこくしょ10
書名	有岡城跡発掘調査報告書X
副書名	第11次～第16次・第18次～第23次調査の概要
編著者名	浅岡俊夫
編集機関	六甲山麓遺跡調査会 有岡城跡発掘調査団
所在地	〒662-0977 兵庫県西宮市神楽町8-10 3階 TEL0798-22-3627
発行機関	伊丹市教育委員会 六甲山麓遺跡調査会
所在地	〒664-8503 兵庫県伊丹市千僧1-1 TEL072-783-1234(内)
発行年月日	西暦2003年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
有岡城跡 <small>ありおかじょうせき</small>	有岡城跡 <small>ありおかじょうせき</small> 兵庫県伊丹市 千僧の丘 伊丹・宮ノ前 1451007 ・中央	28207	61	34'	135°	第11次 19830702～ 19830823	507㎡	集合住宅ス イミングブ ール建設
				46'	25°	第12次 19831102～ 19831114	97㎡	柿藪文庫館 建設
				40'	26°	第13次 19831115～ 19831124	24㎡	史跡地内 堀跡確認
				第14次 19840921～ 19841001	84㎡	高層住宅建 設		
				第15次 19841005～ 19841020	103㎡	高層住宅建 設		
				第16次 19841119～ 19850331	48㎡	土塁石垣の 写真測量図 化		
				第18次 19850619～ 19850626	70㎡	遊技場建設		
				第19次 19851004～ 19851007	210㎡	社屋新築		
				第20次 19851011～ 19851210	728㎡	シティホテ ル建設		
				第21次 19860205～ 19860331	184㎡	国鉄伊丹駅 前再開発事 業		
				第22次 19860221～ 19860224	37㎡	道路新設工 事		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
有岡城跡 (伊丹郡町)	城跡 (町家)	縄文時代後 期 古墳時代前 期 中世 近代	土坑 上層塚古墳 堀跡、溝、石垣土塁 土坑、溝、水琴窟、 埋甕	縄文土器、石鏃 埴輪、ガラス玉 土師器皿、青花、瓦 器、陶器など 染付、陶器、瓦、キ セル、銭貨など	前方後円墳 緑釉瓦1点 上層塚岩跡 酒造り遺構

版 圖



第11次調査 発掘調査前 (調査地北側を望む)



第11次調査 発掘調査前 (調査地南側を望む)



第11次調査 第6 (N) トレンチ拡張区 遺構発掘状況 (東より)



第11次調査 第6 (N) トレンチ拡張区 縄文土坑SK-6 (上)・27 (下)



第11次調査 第8トレンチ SD-8



第11次調査 第1トレンチ 埋桶土坑



国鉄伊丹駅前整備事業主郭石積み工事立会 切り土の状況



国鉄伊丹駅前整備事業主郭石積み工事立会 遺構確認状況



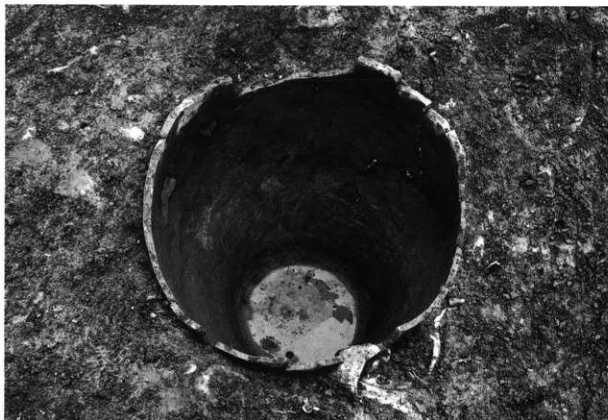
国鉄伊丹駅前整備事業主郭石積み工事立会 確認遺構のグリ石除去の状況



第12次調査 第1トレンチ 遺構発掘状況



第12次調査 埋甕発掘状況



第12次調査 埋甕の底に見える銭貨の痕跡



第13次調査 発掘状況



第13次調査
第2トレンチ検出の
内堀の法面



第13次調査
第1トレンチ検出の
内堀の法面

第13次調査
第1トレンチ内堀の
東壁断面





第14次調査 発掘調査全景



第14次調査 伏せ甕遺構検出状況

第15次調査 第2(N) トレンチ発掘のSD-1



第15次調査 発掘調査全景





第16次調査 石垣全景



第16次調査 東面石垣



第16次調査 南面石垣



第16次調査 石垣前の地山検出状況（北より）

第16次調査
南面石垣と東面
石垣の接合部



第16次調査
南面石垣と東面石垣
の接合部俯瞰撮影





第16次調査 石造品の石垣転用状況(1)



第16次調査 石造品の石垣転用状況(2)



第20次調査 発掘調査地全景（北より）



第20次調査 発掘調査前（南より）



第20次調査 上層遺構面遺構発掘状況



第20次調査 第1トレンチ 下層遺構面(地山面)遺構発掘状況(古墳基底部分)



第20次調査 第2トレンチ 堀跡発掘状況



第20次調査 第1トレンチ SD-6発掘状況



第20次調査 窯跡の焚口部（北より）



第20次調査 窯跡の焚口部側面（東より）



第20次調査 SF-1・2・3全景(南より)



第20次調査 SF-1・2・3側面全景(西より)



第20次調査 SF-1 石積み遺構



第20次調査 SF-1 石積み遺構の墨書石



第20次調査 SF-4 全景 (東より)



第20次調査 SF-6・7 全景 (南より)



第20次調査 SF-6 全景 (東より)



第20次調査 SF-7の火床 (西より)



第21次調査 発掘調査前（北より）



第21次調査 第1トレンチ 発掘状況（西より）



第21次調査 第1トレンチ 内堀発掘状況 (北より)



第21次調査 第1トレンチ 堀1発掘状況 (西より)



第21次調査 第2トレンチ 内堀発掘状況(南より)



第21次調査 第2トレンチ 堀2発掘状況(南より)



第21次調査
第3トレンチ全景
(西より)

第21次調査
第4トレンチ 内堀
検出状況 (西より)





412



420



198



419



197



432



206



205



20



334



319



217



240



240



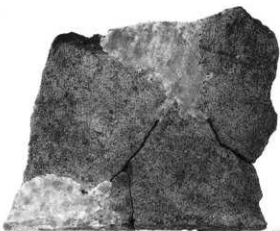
239



305

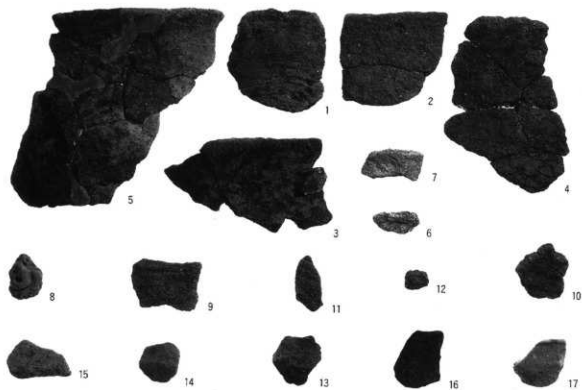


326

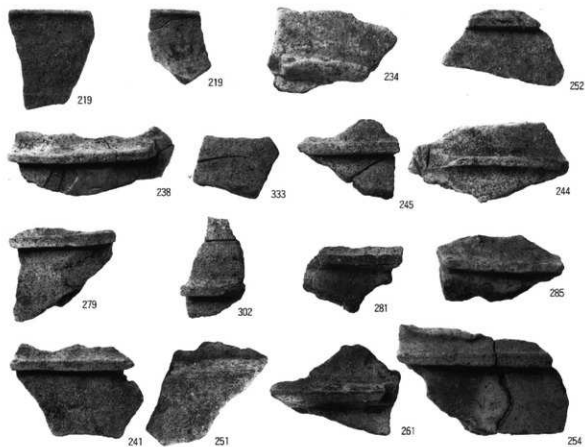


304

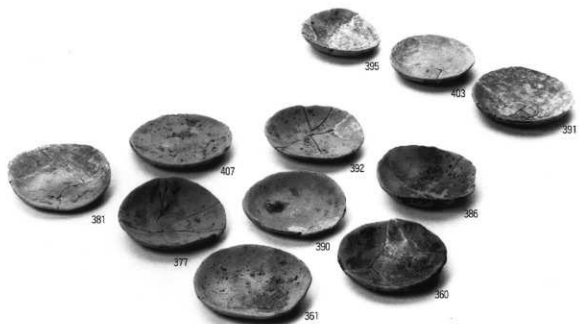
第20次調査出土の埴輪



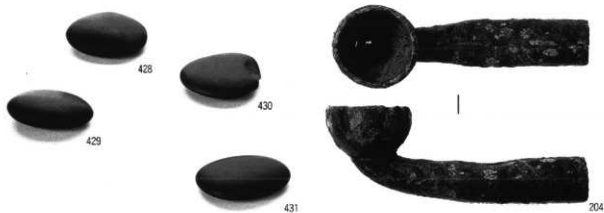
第11次調査出土の縄文土器



第20次調査出土の埴輪

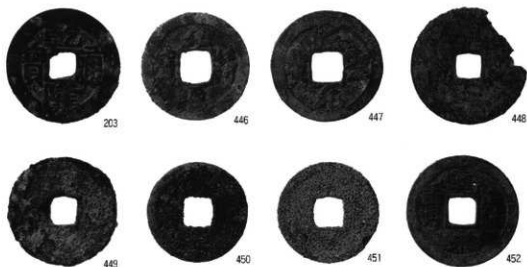


第20次調査出土の土師器皿



第20次調査出土の碁石

第16次調査出土のキセル



第16・20次調査出土の銭貨

有岡城跡発掘調査報告書X

—第11次～第16次・第18次～第22次調査の概要—

2003年3月31日発行

- 編 集** 六甲山麓遺跡調査会 有岡城跡発掘調査団
浅岡 俊夫
〒662-0977 西宮市神楽町8-10 3階
(TEL)0798-22-3627
- 発 行** 伊丹市教育委員会
〒664-8503 伊丹市千僧1-1
(TEL)072-783-1234(代)
六甲山麓遺跡調査会
- 印 刷** 真 陽 社
〒600-8475 京都市下京区油小路仏光寺上ル
(TEL)075-351-6034

